

■風俗文獻とSMプレイ情報満載■

# 奇譚クラブ

♥淫繩狐火街道②美濃村兇♥プレイ情報♥事件簿・憲兵隊秘録♥読者ハントルポ♥女人切腹秘話♥告白手記・女獣飼育♥毛皮と女と縄♥人妻調教・鞭とパイプ♥懐しの奇ク嬢たち

復刊第5号

7

SMのエキスだけを集大成した  
マニア待望の読者参加情報雑誌



奇譚クラブ

復刊第5号

マニア待望の読者参加SM情報誌

昭和57年7月1日発行(毎月発行)第1巻第5号



雑誌02805-7

定価1000円

(株)きたん社発行



# 奇譚クラブ7月号目次



競艶SMイラスト	(3)
読者ハント・濡れた縄	(8)
懐かしの奇ク嬢たち・大塚啓子	(11)
辻村隆氏との交遊記⑤	(20)
読者ロープハント・緊縛悦虐縄責め	(30)
標的は牝犬⑤	(40)
SM事件簿・憲兵隊秘録	(54)
百恵の太腿④	(66)
犬と私と夫③(上野悦子)	(76)
女獣飼育①(柘植浩二)	(84)
鞭とパイプ(縛悦介)	(90)
マソヒズム幻想(読者投稿)	(96)
女人切腹秘話(篠崎陽・巴鳥訓右)	(102)
淫繩狐火街道②(美濃村晃)	(110)
SMブレイ情報	(118)
SM時評(ロマン派生)	(120)
奇クサロン	(128)
奇ク・友の家紹介	(141)
読者ポスト	(142)
投稿規定	(147)

## 投稿規定

### 〔体験・告白・日記など〕

SM・エネマ・フェチ・レズ・スワップ・トリプル・複数・アニマル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真(モノクロ、カラー、ボラロイド)のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上(長篇は連載)。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

### 〔創作・小説など〕

SM小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はSM、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇―三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載(長篇は連載)とし、規定の原稿料をお支払いします。

### 〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンビツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

### 〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品(写真を含む)の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

宛先

〒104東京都中央区銀座1の22の10

ストークビル501号

風俗資料保存会編集室



SMイラスト 羞夏風物詩



小日向一夢・画



# 温泉宿の狂宴 SMイラスト



山崎無平・画



SMイラスト 怪人S博士



桐丘裕詩・画



じやじや馬馴らし SMイラスト



鬼頭 暁・画



読者投稿フォト

# 濡れた股縄

T生(和歌山)

2年前より密かに交際している二十七歳の人妻。緊縛の上、主にパイプ責めにM性を開発しました。その甲斐あってか、局部責めを好むようになり、羞恥責め、アヌ責めによく歓泣します。柱縛りは私の好みで、観賞やくすぐり責めに適しており、股間縛りの縄を濡らすほど興奮するようです。





読者投稿フォト

# 羞恥あぐら

W・K(都内)

22歳、OL。飼育  
半年めです。従順で、  
どんな責めにもよく  
耐えますが、あぐら  
縛りだけは苦しいら  
しく、すぐネをあげ、  
口で奉仕するから許  
して、と哀願します。





# 美剣士、暁の自刃！





# 懐かしの奇ワ嬢たち

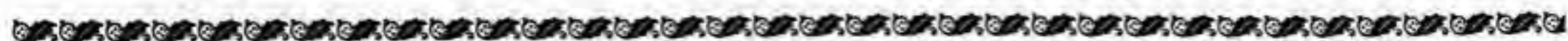
梨花悠紀子







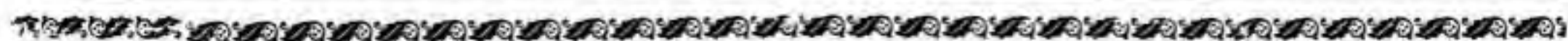








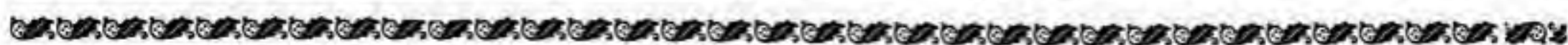
















## 大塚啓子

どこにでもいそうな娘という感じが  
受けてファン層が厚かった。柔らか

い体とボリュームのある乳房は被虐  
味を横溢させる。







奇譚  
クラブ

1982年7月号



— 縄の魔術師辻村隆氏との交遊記・その5 —

# S M 天国まっしぐら

賀山 茂

引退記念パーティーで  
谷ナオミと筆者



十九歳、清純ムードの谷ナオミ



東京方面のカメハンを受けもった筆者は辻村隆さんの手を離れて一人歩きをする事になった。

いよいよS Mの道を求めている武者修業の旅に出掛けるのである。行動力のある筆者は早速に名古屋の左近麻理子との再会の約束の旅に――

辻村隆の上京によって人気作家団鬼六さんとも知り合うことも出来た。

後年のS Mの女王谷ナオミとの交友関係も出来た。

S M、S M、S M！  
大忙しのS M人生に、  
幸多かれ！！



## SM街道を西に東に

辻村さんは、やっぱり東京ですね、チャンスを作って又出てきますと感慨深そうに東京をたっていきました。

私のカメラハントも合格したようで東京方面のハント希望者をリストアップして送るので宜しく頼むとの依頼の手紙が来ました。賀山さん此れを機会にブレイの写真でもハントの写真でも送って下さい。私も送りますので交換型式をとりませんか、そして東と西で大いに活躍しましょう。お互いに好きな道で頑張りましょうと辻村さんの激励の便りでした。

私もこうなったらSM街道まっしぐらと手初めに辻村さんと一緒にカメラハントした左近麻理子さんの再会の約束を果たすために愛用のロープをバックにつめて名古屋に向いました。会うなり左近さんは、

「賀山さん御免なさい今日は余り時間が無いのですよ」

私はそれは大変と一直線にホテルに行くことにしました。今日は私がリーダーですので左近さんに一風呂浴びて下さいとお願いして私は冷蔵庫よりビールを出して一ぱい飲んで

勢いをつけるのでした。風呂から上ってきた左近さんに此方へ来て下さいと備え付けの座椅子に両足を伸ばして坐らせました。両手を座椅子の背にしっかりと後手縛りにしてから両足を押えつけるように両股びらきのスタイルで開けるだけ開かせて座椅子に固定しました。

左近さんはそ知らぬ顔をしておりませんが、自分がどんな恥しい格好をさせられているのかは承知しているようでした。

彼女の秘めたる花びらもきれいに左右に開いてその奥所もパツチリと目の前に息づいておりました。屈辱的な姿勢をとられぬ所を眺められる羞しさに一人耐えているマゾの女の風情をみせておりました。

乳房にナワ掛け

してそのまゝ暫らく放置して眺めることにしました。

扇情的な彼女のポーズをみて心なしか私のジュニアもふくらみをましてきました。しかし彼女を犯したいと云うよりこれがSMの心情ではないかと思いました。

暫らくたつと彼女の表情は羞しさの中にやすらぎというか喜びというか演技ではないM



諦めの表情の左近麻理子



性の動きがみいだされてきました。縛られてから一言もしゃべらないがマゾヒストとしての喜びをしっかりと体で感じておりました。

今日は徹底的に羞恥責めにすることにしました。そこで今度は壁の幕板を利用しての大字縛りをしました。両足を左右に一ぱいに開かせて縛りつけました。左近さんは私にす

っかり身をまかせており、私は更に彼女をいたぶるためにタテ縄をかける事にしました。

乳房を縛り首縄を乳房の間へ通して濃い目の樹林を押えつけるように引っ張りクレパスの中心を横切らせるために親指と人差指とで花びらを左右に開きました。じつとりとした生ジュースと共に澄んだピンク色の紅肉が姿





をあらわしており、ロープは無残にもそこに浸入して左右にわけるようにして尻の方に回しました。

ハリツケにされてすっかり観念している左近さんの顔は逆に生き生きしていて実に素適な表情をしておりました。

これはSMの醍醐味であり、SMの境地にのみ味わえることだと思います。

私はたまらなくなつてベッド・ルームにある美容器具スタイリーの上に彼女を寝かしめました。型通りに縄掛けをして両足をひろげ、左右のパイプに固定し、お尻はパイプレーションマットの上にあてがいました。スイッチを入れて彼女の局部に刺激を与える事にしたのです。なすが儘にされていた左近さんもこれから何をされるかを期待しているように太腿のつけ根の所に微妙な振動がおきていました。これから直接に秘めた所へのいたぶりを始めるわけです。私は産婦人科の先生と同じように台にまたがって彼女の両脚の間に体をもっていきました。

目の前三十センチの所にその秘所が全貌をかくす所なく展開しております。

弱く強く、上を責め下を政めたり秘術をつくしておりますと、さすがにたまらずにうめき声をあげ、肩で息をしながら、喜びと共に

屈服したのでした。一寸脱線した感じもありますが、カメハンは違ってSMの純生ですので大変満足することができました。

### 谷ナオミとの再会に心は弾む

その頃、谷ナオミはピンク映画のヤマベプ

ロに所属しておりました。九州の熊本の出身でゴーゴーの好きな夢多き十九才の青春時代です。谷ナオミちゃんは恵れた肉体と男好きのする顔立ち、頑張りの根情で映画女優のジャンルに挑戦し、立派にピンク映画界のヒロインの座を勝ち得たわけです。

辻村さんの上京のチャンスにナオミちゃん



谷ナオミ、縦縛りに諦く







と知りあった私は、好みのタイプでしたので一目ぼれをしてしまいました。何度か連絡をとり、映画のロケの暇を見つけてデートに誘うことに成功しました。デートの日、ナオミちゃんは中華料理が大好きだと云うので赤坂の桜花楼へいき食事をしました。そして食後の運動にゴーゴーを踊りにいったのです。その後、青山のアジトに連れていき、SMプレイをしたのです。踊っている時のナオミちゃんは現代娘そのものですが、SMプレイに入りますと演技のセンスが目覚めてグイグイと私をプレイに引きずり込んでくるのです。こんな所にもナオミちゃんの演劇に対する天性の表れを感じました。

何んと云ってもゴムマリの様なバウンドとお腕を伏せたようなブッチリとしたポリウームのある乳房に縄をかける時はオッパイマニヤの私は天にも昇る気持です。彼女は、そのオッパイでピンク映画界の女王になったといっても過言ではないと思います。

一方、団鬼六さんもテレビの脚本家から脱皮してSM界にそのペンをふるうようになり、その評判が漸くたかまって参りました。その頃、団鬼六さんは風光明媚な真鶴に住んでおり、私も折りにふれて訪れては振舞酒でSM論に花を咲かせ、SMへの果しない夢をぶっ

つけあっていました。或る日、団さんから連絡があり、団さんのシナリオでヤマベプロがSM映画をとることになり、谷ナオミが主演で伊豆にロケをするので一緒に行きませんかという誘いがありました。私は喜んで団さんに誘われるまま、伊豆の下賀茂のロケに参加したのですが、原作者の団さんとの同行です。ので旅館には一部屋用意されておりました。私達は野天風呂で疲れをいやし、ユカタ姿で撮影現場に出掛けました。撮影はたけなわで谷ナオミが裸にむかれて縛られ、痛めつけられるシーンが始っておりまして。ポリウームたっぷりのオッパイをむき出して、体当り演技の迫力で頑張っておりまして。しかし、



オール・ヌードの谷ナオミ



お世辞にも縛り方は上手といえませんが、谷ナオミの清純なお色気で充分カバーしており、エロチックなSMに満マニヤの私が見ても大変素適に感じました。足な顔で、これが鬼六やがて大風呂での格闘場面の撮影となり、谷ナオミが白いサラシでフンドシ姿になっていた。時計を見ますと早や十一時を廻っておりま

すが、まだ撮影はたけなわで、いつ終るかわからない状態でした。





ロケ現場の谷ナオミ



着物姿とは違った清纯ムード 谷ナオミ



団鬼六さんは皆が一生懸命やっているので安心したのか、部屋に戻って一杯やりませんか撮影も間もなく終ると思いますから、と声をかけ部屋に戻りました。撮影で大変だなあと思いましたが何んといってもナオミちゃんの魅力にひかれ胸が一ぱいでした。谷ナオミさんは素適ですね、今に大女優になりますね。と盛んに

ナオミちゃんを賞めますと団鬼六さんは察したように、撮影が終わったら部屋にきますよ、と云われ私はてれくさい思いでした。「お疲れさま」とナオミちゃんがユカタ姿で入ってきました。賀山さんお早うございます。差し入れ有難うございました。スタッフの連中が嬉んで今一杯やっています、と云い乍ら団さんと私の間にチョココンと座りました。

「あ、疲れちゃった、先生、私も飲んでい





「い」と私がついだビールをうまそうに飲みます。足を投げだして坐っている姿をみるだけで色気が感じられ酒に酔うより色に酔ってしまいました。団鬼六さんは「ナオミ、賀山さんはナオミちゃんナオミちゃんで大変にご執心だぞ。辻村さんも素晴らしい女性だと云って

いたし、SMマニヤは皆、ナオミにぞっこんだ」

ナオミちゃんは、

「約束通り賀山さんがロケに来てくれて、ナオミ、嬉しい」

とサラッといいました。団さんは

「これはこれは賀山さんうまくやって下さい、グットラック」

と自分の出番は終わったよ、といわぬばかりにグッと一杯のみほして、

「ナオミ、明日の野外ロケに行く時に賀山さんの車で送って貰ったらいいじゃないか」

というので私は喜んでやりましょう、と送り迎への役をかって出ました。運命のいたずらで、残念乍らその後、彼女と私はスレ違いの人生を歩くことになりました。

## SMの帝王 辻村隆

一方その後の辻村隆の活躍も目覚ましく奇クのカメラハントは益々さえて、私から送った写真もしばしば奇クの誌上を飾るようになりました。

又東映の緊縛映画「徳川女刑罰史」も予想外の大反響で続いて第二作「徳川いれずみ師責め地獄」の制作にとりかかりました。今度は緊縛場面のレパートリーも多く辻村さんも緊縛指導の立場から勿論つきっきりの指導をしなければならぬので大変のようでした。しかし、この映画にかける辻村さんは自分の集大成にするのだとチョンマゲを結って端役で出演もしたのです。





私もSMの誘いがあれば西に北に飛んで行きました。必ず辻村隆の名前が出てくるのです。そして辻村隆はSMの帝王の名に恥じない憧れの存在なのでした。



それから数年たち過労から持病の糖尿病が悪化して病床に伏せることになりました。早く回復して今一度その情熱をSMにぶつけてほしいものです。恐らくファンも今一度の活躍を願っていることでしょう。

近日中に病氣見舞いに行きますので、他日、辻村さんの近況を誌上にて御報告をしたいと思えます。





読者ロープハント

# 緊縛悦虐責め

利根川乱遊



「ドンデン」とは何か……

私のペンネームからお察しのとおり、乱歩の「パノラマ島奇談」あたりからSMに目覚め、女体狩りに精を出し始めてから二十数年が経つ。

もちろん、ハントした女性の数に比例してSM道の奥儀も深まる、というわけではないが、三〇人近いハント数は、私にいくばくかの知識、特に女性を扱う知識を与えずにはおかなかった。よく、女性には生来、マゾ的な素質があるという。確かに、男は凸、女は凹という肉体的な構造や女性特有の精神的な弱さ、何事にも受身になりやすい性格などを考えれば、その説にも一理あるといえる。

だが、私の得た経験による知識ではマゾ的な素質は、女性だけでなく男性にも同じようにある、という事実であった。つまり、男も女も、マゾになり得るし、サドにもなるという、誠に当り前のことを知ったのである。また、その両面性がないなら、SMのことは



永久に理解できないであろう。被虐に歓喜する女性の心理を理解できる男は、自らもマゾの喜びの「お裾分け」にあづかっているといふべきだろう。そして、その逆も真であり、ある日、サドがマゾへ、マゾがサドへ、と引っ繰り返る「ドンデン」が起り得るのだ。名の知れた多くの「緊縛師」が、時には女性に縛られてみたいと願っている事実を知るがよい。そして、そうでなくては、「緊縛師」の名に値しないし、SMの奥儀も悟り得ない

のである。

偉そうな前置きが長くなってしまったが、「奇々」誌はSM理論誌(?)としての伝統もあり、フロンティアとしての責任もあると考えて一言を呈した次第である。

さて、私は理論派でなく、「実践派」なので、最近のハントをお届けしよう。







### プロかアマチュアか：

女性ハントの難しさは今に始まったことではない。最近の女性は、フリーセックスを謳歌しているとはいえ、縛ったり、叩いたり、浣腸したり、という妙なアソビに、オイソレと応じるほ

ど遊び好きでもなければ物好きでもない。

どうかして、面白そうねエ、やってみようかしら、などという女子大生がいないでもないが、そういうのは、男性体験数知れず、といったプレイガールで、SMプレイには欠かせない羞恥心というものを持ちあわせていないときている。

そうかといって、金銭でプレイする女性もいるようだが、プレイ後の空しさを考えたら、ちよつと二の足を踏むのも無理なからう、と私などは思うのだ。プレイ相手は、やはりアマチュアに限る。というのも、経済的に余裕のない私などは、そういう「オ大臣遊び」ができないせいもあるのである。

もっとも、ハントに使う費用のことを考えれば、食事代、プレゼント代、ホテル代などと、アマチュア相手のほうが結構高くつくのだが、ソレはソレ、まだ他人に荒らされていない魅力につい目がくらんでしまうのだ。





## モーテルへ行くワケ……

モーテルという所は、秘密の遊びをする人間には便利にできている。クルマでスーッと入り、そのまま部屋へあがれるので他人に見られる心配がない。私のクルマは中古だが外車、しかも、色は真っ赤ときているから目立つことこの上ない。他人に知られようと一向に構わないというゴーケツならいいが、私の場合、いろいろと役職を兼ねているので、若い娘とモーテルへ入るなどというのは、ちょっと差し障りがあるのだ。

そこへいくと、香奈子は社員数5人の小さな会社のOL、まして都心から遠く離れたモーテルへ入るのを目撃するような知人がいるはずもなく、誠に気楽なものである。

首をすくめて入室する私を目で笑いながら、「先にお風呂に入っていいいかしら……」と、誠に屈託がない。

私がわざわざ三〇分もクルマを走らせて、そのモーテルへ行ったのにはワケがある。以前、別の女性をハントして、そこへ行ったとき気づいたのだが、ガラスのテーブルが置いてあるのだ。その時は、そんなものをプレイに利用する考えが浮ばなかったのだが、あ

そこで、今回のハントだが、相手は二十一才のOL、色白のムチムチプリン、見るからにオイシソウなコなのである。こんなかわい

いコが、どうして鬼神の如き私のエジキにな

ってしまったか、というと、理由は簡単。つ

まり、おコズカイ欲しさなのである。

時は春、哀れ、可憐な蝶は、毒グモの巣に

からだ、やっぱり金銭の絡むプレイじゃな

いか、と仰言るなかれ。この場合のおコズカ

イは、SMクラブとやらのプレイ料金とは、

あつた——。



とで、

（そうだ、あのテーブルに縛りつけたら面白そうなプレイができるぞ……）

と思ったのだ。ガラスのテーブルなどは、たいして珍しい物でもないが、私の知っているモーターでそれを置いてあるところは他に知らない。わざわざ遠くからクルマを飛ばしてきたのは、そういう理由からなのである。

応接セットの椅子に腰をおろして、

（さて、どうやってあのピチピチ娘を料理してやるか……）

と考えているところへ、タオル一枚を体へ巻きつけた香奈子が、ポツと頬を染めて浴室から出てきた。

それまでの会話で、香奈子は羞恥心の薄い娘ではなからうか、と危惧していたのだが、スッポンポンの全裸で浴室からとびだしてこなかったところを見ると、男の前で裸をさらすのは恥ずかしい、と思うぐらいの羞恥心は残っているらしい。



「いいお湯だったわ……」

中年男のねばっこい視線にテレ奥いのか、香奈子はまるで温泉にでも入ってきたかのようなことをいいながらテーブルの上のグレイプジュースをゴクゴク飲んだ。

（とにかく、早く縛りあげちまおう）  
プレイに入るきっかけを先にのばすと、ついシラケがちになるのを知っていたので、バッグの中からロープの束をつかんで、香奈子に、オイデオイデと手を振る。

「なアに……？」

ちよつと鼻にかかった声で、近づいてきた彼女を抱き寄せ、額から両マブタ、鼻の頭へとキスを降らし、目をつぶったところで、唇を奪った。舌先で歯をこじあげ、彼女の舌と絡ませると、  
「ウウン、ウウン……」

と低い呻き声をあげていたが、やがておとなしく舌を吸わせてきた。

その間に、私の片手は香奈子の体からバスタオルを剥いで全裸にしてしまう。湯にほてった香奈子の肌が、私の掌の中でムチムチと弾む。敏感そうな脇腹を撫ぜあげ、撫ぜおろしていると





フムム……、フーム、と香奈子の鼻息が荒くなってきた。指先で、乳首を摘まむと、ピクンと体を震わせ、たちまち先端を固くした。

（そろそろ、プレイに入るとするか……）

自分にいいきかせて、今はもう何もかも許す気でピタッと体をくっつけている香奈子を引きはがし、裸の体を椅子に坐らせて、両手を椅子の背へ回させて固定する。

「ねエ、わたし、こういうの、始めてなのよ、なんだか、心配……」

両手の自由を失ったせいかな、香奈子が心細そうな声を出す。

「何も心配することはないさ、わたしに任せておけばいい……」

いい気なもので、香奈子の心配をよそに、今度はロープを彼女の膝へ片方ずつ巻きつけてグイグイと絞る。

「アアッ、そんなの、ひどいッ……」

両膝へ巻きつけたロープを背後へ引っばられて、香奈子の膝がどんどん開いていく。

キャアキャアと、悲鳴なのか喜んでいるのかわからないような声をあげるのも構わず、





M字型の開脚縛りにしてロープを固定した。

「いやアッ、見ないでエッ！」  
前方へ回って香奈子の秘器をしげしげと眺める私にたまらず羞恥する。いよいよプレイの開幕である――。

バイブでシヌか……

ブルル……、ブル……と低く鈍い音をたてながら、開脚縛りの香奈子をバイブが真正面から責めたてる。震えるように震動する電動バイブの先端が薄桃色の蕾を責め始めてから、もうかれこれ三〇分は経過していた。

先刻までヒイヒイと泣き叫んでいた香奈子も、数度のアクメにもはや声もでず、ただ、ウーン、ウーンと低く呻いて恍惚境をさまよっているふうだった。

その様子をすでに数枚の写真に収めていた私は、  
(最初はこの程度でやめておくか……)



とパイプを離し、そのかわりに、浴衣の前を押しわけるように突きだしているわが肉棒を香奈子の顔を押しつけ、熱い息を吐いている唇の間からこじ入れたのだった。



数日後、今度は香奈子を友人と共同で借りているマンションの一室へ連れていった。そこは、その友人が2号さんを住まわせていたところなのだが、ある日、その女性が家財道具もろとも姿を消してしまい、空宿になってしまったというもので、現在は部屋代を半分ずつ払って、プレイ室のようなものになっている。女性を連れこんだときに使うダブルベッドと冷えたビールが数本入っているだけの冷蔵庫……、家財道具といえば、それだけしかない。それから、私のために友人が知人の鉄工場経営者に頼んで作らせてくれた鉄棒とも健康器具ともしれない奇妙なしろものがひとつ置いてある。いうまでもなくSMプレイに使うものだ。

「なにをするの、コレ？」

鉄パイプで組立てた奇妙な道具に香奈子が不審そうな声をたてた。

「ま、いろいろなことに使うんだ」

私は適当にお茶をにごして、香奈子に衣服

を脱ぐように命じておいて、壁にはめこまれた戸棚の中へ頭をつっこむ。SMプレイ用の小道具がごっそりと隠してある。

友人はSMには興味がなく、もっぱら外国ポルノ写真に熱心だ。戸棚の中にはそれらの類いの写真集が1メートルもの高さに積まれている。全裸でベッドへもぐりこんだ香奈子に二、三冊放り投げてやると、すぐ目を皿のようにして見入っていた。あからさまなフェラやファックの写真が適当な刺激剤となって香奈子の体を潤わせた頃をみはからって、ベッドから引っぱりだし、鉄棒の脚へ仰向けに縛りつけた。両足を肩の上まで挙げた二ツ折りのポーズである。薄い茂みは秘密の肉洞を隠す役目も果たせず、





私の眼下に若々しいそれをさらけだしてみせていた。

「いやだア、こんな格好……」

羞恥の部分を天井へ向けてさらしている香奈子が、尻をウネウネと揺すつてもがく。

「そのまま天国へ行って遊んでおいで」

例の小型パイプを周辺から中心へと押しあてていくと、香奈子は尻を弾ませ、アウウ、アア……と苦痛とも欣びともつかぬ悲鳴をあげた。すっかり潤ったところで、ロウソクを立てるようにやや大型のパイプを突き立てた。

奇妙にエロチックな光景だった。女のそこは本来が凹部であるのに、今は棒状のパイプが突き出ているのだ。その色がピンク色だけに妙なナマナマしさがある。

大型のパイプはそのままに、ヒクヒクと震えている薄茶色の小菊へ先刻まで蕾をいじめていた小型パイプを近づけていった。

たて続けに数回、激しいアクメに達した香奈子を今度は四つん這いに這わせ、尻を持ちあげた格好で両手両足を鉄棒へ固定した。弾力のある白い尻を



鞭でピシピシと叩く。大型のパイプは香奈子の秘洞の間に胴中を埋め、先端は蕾にあてがってガムテープで固定してある。

これはよく効いた。羞恥の部分を間断なく襲う震動と、尻を鞭打たれる苦痛……、香奈子は、

「ヒイッ、助けてエッ……」

と、口をパクパク喘がせて許しを請うた。その口へ私の下腹部を押しつけていく……。

二回目のプレイは、こうして3時間ばかりも続いた。

蝶は舞ったか……

香奈子との三回目のプレイ。前回と同様、友人と共同で借りているマンションへ連れこみ、緊縛プレイ、パイプ責めなどで、いじめられることに慣れさせておき、二、三度、アクメに達したところで少し休ませる。香奈子をハントしてから一カ月ほどが過ぎているので彼女も私の性癖に慣れ、プレイのほうにも慣れ始めていた。もうそ



ろそろハードな責めがしなくなっていた頃である。アイデアを絞った上、高いカネを払って作ってもらった責め道具もそのためにあるのだ。

部屋の隅に置かれた奇妙な鉄棒を見上げる私の様子に、香奈子はちょっと不安そうな表情を浮べた。

「まさか、あそこへぶらさげるなんていうんじゃないでしょうね……」

「いや、その『まさか』なんだがね……」

「エーッ、そんなの無理よ……」

「やってみなくちゃわからないか！」

自分がぶら下げられるわけじゃないので、気楽なものである。丈夫なロープを数束用意して、鉄棒の下へ全裸の香奈子を立たせる。

その器具に女を吊るすのは、香奈子が始めてだ。頑丈に作ってあるので、人間の二人や三人ぶらさがっても大丈夫だが、吊るし方が悪ければ、脱臼ぐらいはしかねない。

まづ両手を横棒へ縛りつけておいて、片方の足首に別のロープを巻きつける。そのままグイグイと片足を吊りあげると、

「ヒィーッ、裂けちゃうッ……」

と、香奈子が驚いて悲鳴をあげた。両手と片足を吊られて宙に浮いた彼女の体はユラユラと揺れていた。まだ自由なもう一方の足が、



かえって不安定さを増し、体が胴でよじれた「よし、いいぞッ、そのまま我慢していろよ」ようになっていく。

「アアッ、つらいわッ、どうせならもう一方」

の足も吊ってちょうだい！」

妙な形にゆがんだ秘洞を下から眺めあげてせいぜい五分ぐらいであつたろう。クモの巣いた私に、香奈子の苦痛に満ちた悲鳴が聞えてくる。すばやくもう一方の足首へ別のロープを巻き、宙へ吊りあげてやった。

今や、香奈子の裸身は両手両足をひろげて

空中に浮いているような状態だった。



# 標的は牝犬

## 恐怖のチャイム

死んだ魚の眼みたいにくく濁った英次の眼が、夏子の脳裡に灼きついて離れなかった。おぞましい排泄器官への責めの連続……思い出すだけでも、アヌスがヒリヒリと痛痒く、ひくついてくる。そのたびに、夏子は思わず立ちすくまずにはいられた。夜中にうなされて眼をさます事も、しばしばだった。

もう、とても夫に打ちあける勇氣はない。一度言いそびれると、泥沼にはまり込んだように言えなくなる。

玄関のチャイムが鳴るたびに、夏子はビクッとからだをこわばらせた。恐ろしい英次が、いつやってくるかわからないのだ。とくに夫がいる日曜日は、一日中生きた心地がしなかった。

今日は、その日曜日である。夏子は朝から胸さわぎがしてならなかった。と言うのも、英次はこの二・三日、

美しい女に異常な執念を燃やす暴力団組長の息子・英次はいつも子分を二人従えて趣味の女狩りにでかける。しかし英次は女を普通に抱くだけでは満足せず、縄で縛り、柔肌を鞭打ち、アヌスを尻腸で責め、パイプ責めなどあらゆる残酷な弄りを加えたあげく、アナルセックスまでもっていかないと満足しない。こんな変質者の英次に狙われた人妻・夏子の余りにも悲惨な物語はいよいよ佳境を迎える……

姿を見せていないのだ。

（も、もし、あの男が来たら……ど、どうしよう、今日は主人がいるのよ……お願い、こないで……）

部屋のかたづけものをしながら、夏子はワラをもつかむ想いで祈った。

突然、電話のベルがけたたましく鳴った。ドキッと心臓が凍りつき、夏子は全身を硬張らせる。

「どうしたんだ、夏子。電話じゃないか」  
テレビを見ている夫の利彦が、夏子をふり返った。

「は、はい」

夏子はあわてて受話器を取った。

「もしもし……」

「フフフ、奥さんかい」

相手は堂島だった。

やはり……夏子は思わずめまいを覚え、柱に手をやってからだを支えた。

「亭主がいるんだろ、奥さん。気づかれましたら、



おとなしく俺の言う事を聞くんだ。フッフ、わかってるな、奥さん」

「……は、はい……」

夏子は必死に冷静をよそおってこたえた。すぐ近くで夫がテレビのゴルフ番組を見ている。へたな受けこたえをすればあやしまれてしまう。

「フッフ、奥さん、坊っちゃんがさびしがってしようがねえんだ。ちよいと公園まで出て来てくれねえか」  
「そ、そんな……」

夏子は狼狽した。公園へ行く事が何を意味するか、聞かなくてもはつきりわかる。

「今、今日はちよっと……」

「いやだと言うのかい、奥さん。坊っちゃんが奥さんを亭主の前で犯りたがってんのは知ってんだろ、フッフ、いやなら押しかけるだけだぜ」

堂島は冷たく言った。受話器を通して、英次のわめき声が聞えてくる。夏子の所へ押しかけると言う英次を堂島と会田が押さえ、夏子呼び出す事で納得させようとしているらしい。

「どうするんだよう、奥さん」  
「わ、わかったわ……いきま  
す」

そうこたえるしかない夏子だった。涙があふれそうなのを、必死にこらえた。おぞましいいたぶりを想って、夏子は本能的にアヌスをすぼめていた。

「フッフ、その調子だ、奥さん。素直に言う事を聞いている限り、亭主にはバラしやしねえよ。安心しな」

堂島はへらへらと笑った。





「わかってると思うが、ノーパンで来るんだぜ。裸の上になるべく薄い服をつけてくるんだ、フッフ……それに買ってきてもらいたい物があるんだけどよ」

しゃべりまくる堂島の声を、はいはいと夏子は聞いた。時々、夏子の方をふり返る夫に、夏子は生きた心地がしなかった。

電話が終ると、

「誰れからの電話だい、夏子」

夫の利彦がふり返った。

「学校時代のお友達……会いたいって、近くまで来ているらしいの」

夏子は必死に笑顔をつくってこたえた。何んの疑いも抱かない夫への、うしろめたさに胸が痛い。

それでも夏子の顔色の微妙な変化に気づいて、

「どうしたんだ。顔色がよくないよ」

「お、お友達が相談事があるらしいの……あなた、申し訳ありませんけどお留守番をお願いします」

夏子は動揺をかくすように、髪をかき上げながら言った。

寝室へ入って下着を脱ぎ、一糸まとわぬ全裸になると、夏子は素肌の上へワンピースをまとい、念入りに化粧をした。涙があふれ、何度も化粧をしなおす。

（あなた、ゆるして……ご、ごめんなさい。で、でも、これしか方法がないの……）

夏子は何度も心の中で夫にわびた。

子供の由加を夫にあずけて、夏子は外へ出た。下着をつけないスカートの中へしのび込む外気に、夏子は戦慄した。すれ違う人が皆、ノーパンなのを知っている気がして、思わずスカートの裾を押える。

なるべくめだたない薬局をさがすと、夏子は中へ入った。堂島に言いつけられた物を、買っていかねばならない。

「あの……イ、イチジク浣腸をいただきたいのですが……」

薬局の主人は、黙ってイチジク浣腸をひとつ、取り出した。

「そ、それを二ダース……」

「二ダースですか、一箱に二個ずつ入ってるんですよ、奥さん」

主人は驚ろいて夏子の顔を見た。

夏子は真赤になった。まともに顔をあげられずにうつむいてしまう。それに気づいた薬局の主人がいやらしい笑いを浮べた気がした。イチジク浣腸二ダース、それに五百CCのグリセリン液を三瓶買うと、夏子は逃げるように薬局を出た。

自分に使われる浣腸を買う……みじめさに涙が出た。昼下がりの公園には、休日を楽しむ家族連れの姿がいくつもあった。本当なら夏子も、愛する夫と娘と三人で、



そこにいるはずであった。

「奥さん、待ってたぜ、フッフ」

夏子はいきなり腕を取られた。会田一人である。

「お、お願いです。も、もう、これ以上つきまとわないで……」

夏子はさすがに言った。黒いスーツにサングラスをかけた会田は、いつ見てもドスがきいて、すごみがあった。

「もう、かんにんして……あんな羞かしめは二度といやです……」

観念したつもりでいても、泣きごとが口に出た。

「何を言ってるんだ。さあ、坊っちゃんがお待ちかねだぜ、奥さん」

「い、いやッ」

夏子は本能的にあとずさった。急激に恐怖がこみあげてくる。

「そんな態度じゃ、俺も坊っちゃんを押えられなくなるぜ。いいのかい、亭主の前で犯られてもよう、奥さん」

会田は意地悪くささやいた。憎いまでに夏子の弱味をついてくる。

「そ、それは……」

夏子のおびえた顔が、ペソをかかんばかりにゆがんだ。言いなりになるしかないのだ。だが、言いなりになっている限り、夫に対して秘密は守られる。夏子はガックリ

と首をうなだれた。

「さあ、行こうか、奥さん」

会田は勝ち誇ったように、夏子の腕をとるのだった。

## 公園での痴戯

英次は堂島と共に、公園の公衆トイレの中で待っていた。夏子が始めて英次に襲われた場所である。

覚醒剤のうちすぎだろうか、英次の顔は病的なまでに蒼く、死人のようだった。その眼は白く濁り、まわりに隈が出来て不気味である。まるで狂人だ。

「いいな、奥さん。坊っちゃんをおこらせるなよ。坊っちゃんがたいくつしたら、困るのは奥さんだぜ」

会田は夏子の耳元で念を押すと、夏子をトイレの中へ押し込んだ。会田と堂島は見張りにつく。

「尻を、尻を出せッ」

英次はひきつった声で命じた。もう待ちきれない様子だ。

夏子はもう、何も言わなかった。この英次には、いくら哀願しても無駄なのだ。狭いトイレの中で英次と二人きり。うしろを向くと、ふるえる手でスカートをまくった。

「もっと尻を突き出せ」

いやらしい手つきで撫でまわしてくる。ゾツとするほ



ど熱い手だった。

夏子はからだ中が、ガタガタとふるえ出した。涙も出てくる。それでも言われるままに、うしろへ裸の双臀をせり出した。

「へへへ、この尻だ……この感触だぜ」

英次は何ヶ月も触れなかったみたいに、執拗に撫でまわした。かがみ込んで、まるで頬ずりせんばかりに手を這わせる。

スツと指先が臀丘の谷間にしのび込んだかと思うと、アヌスをとらえた。

「ひッ……」

小さな悲鳴をあげて夏子は本能的に腰を前へ引いた。

「逃げるんじゃないやねえッ。いいことをしてやろうと言うんじゃないやねえか」

「ご、ごめんなさい……」

夏子の双臀が再びせり出された。

「あ、ああ……しないで……」

おぞましい排泄器官が、指先でゆるゆるともみ込まれ



る。アヌスがキュッとすぼまり、周辺の肉がビクッと硬張る。

夏子はまくりあげたスカートを握りしめて弱々しくかぶりを振った。

「そ、そこは……かんにんして……」

「ガタガタ言うな、へへへ」

「あ、ああ……か、かんにんしてッ」

夏子の声はもう、泣いていた。

おぞましいと思う心が逆に、かえって英次の指を敏感



なまでに感じ取ってしまう。菊の花びらを思わせる肉壁がこすられ、すぼまろうとする筋肉がほぐされるのだ。ほぐしながら指の先が、ジワジワともぐり込んでくる。

「あ、ああ、いやッ……や、やめて……」

「へへへ、たまんねえぜ、この感触……いい気持ちだろ、奥さん」

英次は指先でぬうように貫いた。しめつけてくる感触が心地いい。激しく欲情してきたのであろう。死人のような英次の顔が赤くなってきた。

「ああ、かんにんして……お、お尻はいや、いやなの」

夏子のからだは硬直している。英次は女の排泄器官にしか興味を示さない変態なのだという事が、改めて思い知らされる。夏子の顔が蒼ざめ、ひきつれた。

「お、お願い、やめて……いやなの……」

「いやだからおもしれえんじやねえかよ、フッフ……ほれ、ほれ、いいだろ、奥さん」

深々と貫いた指が、夏子の中でうごめき始める。指先をまげて、奥をまさぐるのだ。

「あッ……あッ……いやッ」

たえきれずに、夏子は悲鳴をあげた。屈辱と羞恥、加えて恐怖の哀しみにまみれる。

夏子は弱々しく顔をふるだけで、逃げなかった。逃げようものならもっと恐ろしい夫の前で羞かしめられる事にエスカレートする事が、わかっているのだ。

英次は指で責めながら、へらへらと笑った。

「奥さん、尻の穴の力をゆるめてみる」

英次は指を付け根までいっばいに埋め込むと、冷たく命じた。

「そ、そんな……無理よ、そんなこと……」

「ゆるめろって言ってんだッ」

「ああ、出来ない、出来ないわ……」

夏子は英次をふり返って、泣き声をあげた。おぞましい排泄器官を指で貫かれ、からだ中の筋肉が硬直しているのだ。

「出来ねえって言うのか、この牝めッ」

英次の声が変わった。自分の思い通りにならないと、すぐに腹を立てて狂ったようになる男だ。

（坊っちゃんをおこらせるなよッ）

そう言った会田の声が、夏子の脳裡に響いた。夏子は狼狽した。

「や、やるわ……やってみるわ」

夏子はあわてて叫んだ。

英次の顔がすぐにニンマリとくずれた。

「へへへ、よし、ゆるめろ」

英次は指のうごめきをとめた。夏子のアヌスがゆるむのを、指で感じ取ろうと言うのである。

「ああ……」

哀しげな声をあげると、夏子は力を抜こうと努力し始



めた。自分からアヌスをゆるめる……おぞましさに気も狂わんばかりだ。

思うようにいかない。いくら心でゆるめようと思っても、からだと言う事をきかない。英次の指で貫かれているものだから、本能的にすぼまってしまうのだ。

「ああ……」

「どうした。早くゆるめねえかッ」

「今、今やってるのよ……ああ……」

夏子は懸命に活約筋をゆるめようとした。英次の指をしめつけている力が、夏子のうめき声と共に、ほんの少しゆるんだ。だが、次の瞬間、キュッとすぼまってしまう。また、少しゆるむ、そんな事がくり返された。

「ゆるめられねえのか、奥さんよう」

英次の声が、いら立ちの色を帯びてきた。

早くゆるめなくては……夏子はあせった。グズグズしている、英次がおこり出してしまふ。

「ああ、ま、まって……も、もう少しなの」

夏子は必死になった。

やがて、英次の指をしめつける抵抗が、少しずつゆるみ始めた。さっきまでのしめつけがウソのようにとろけてくる。トイレできばっている状態と同じだった。

「へへへ、ゆるんだぜ、奥さん」

英次は意地悪く知らせた。

「ああ……ひどい、ひどいわ……」

おぞましい排泄器官を指で貫かれたまま、ゆるめているのはたまらなかった。少しでも英次の指がうごめくと、本能的にキュッとすぼまってしまう。そのたびに夏子はどなられ、再び力を抜いていく。

「尻の穴をゆるめると、気持ちいいだろ、奥さん」

「……知、知らないッ」

夏子は舌ったらずの泣き声をあげた。どこか歎き声を想わせる。

「よし、今度はしめつけてみる。思いきり力を入れるんだぜ」

「ああ……み、みじめだわ……」

夏子は活約筋の力をふりしぼった。キュッとすぼまる。さっきよりも数段強い力でしめつけてくる。指の血がとまって、くいちぎられるかと思う程だ。

「しめつける力はたいしたもんだぜ、奥さん、フッフ……よし、今度はまた、ゆるめるんだ、ほれッ……」

「あ、ああッ、ひどいことをさせるのね……」

夏子は泣いた。泣きながら、ゆるめたりしめつけたり、またゆるめたりと何度もくり返させられた。

いまわしい行為だった。だが、いくらいまわしくとも、どうする事も出来ないのだ。夏子は総身をふるわせて泣きじゃくるだけであった。



## アナル地獄

英次は持ってきたカバンの中から、五百CC用の浣腸器を取り出した。それをふり返って見た夏子は、思わず身ぶるいした。

「……浣、浣腸するのね……」

夏子はおびえと哀しみのこもった声で言った。

「あたり前じゃねえか。奥さんには浣腸責めが最高なんだ、へへへ……グリセリン買ってきたろうな」

「……ええ」

夏子はふるえながら、薬局の紙袋を差し出した。

英次は紙袋の中からグリセリン液の瓶を三本取り出して、床に並べた。

「へへへ、奥さんの尻の穴に入れるなんて、こいつがうらやましいぜ」

英次は笑いながら瓶の中のグリセリン液を嘴管に吸いあげていく。その顔は欲情にだらしなく崩れ、口の端から唾液がたれている。

嘴管がキュウッと不気味に鳴った。夏子は総毛立って、顔をそむけた。わあッと泣き出したいのを必死に堪える。

「へへへ、浣腸だぜ。うれしいか、奥さん」

「い、いや……死にたいわ」

「そいつはいいや死にたい程きついのをしてやるぜ」

瓶の中のグリセリン液は、一滴残らず吸いあげられた。ちようど瓶一本分の量である。グリセリン原液による五百CC浣腸なのである。

「足を開いて、もっと尻を突き出しな」

「か、かんにんして……それは、それだけはいや、いやなの。お願い……」

夏子は必死の思いで言った。英次はどんなに哀願してもやめる男ではない。それがわかっていても、眼の前に恐ろしい浣腸器を見せつけられては、哀願せずにはいられなかった。

「さっさと尻を突き出すんだッ」

「し、しないで……お願い、浣腸はいや、いやッ……他のことにして」

「俺は浣腸してえんだよ」

英次のひと言で、夏子は観念したように足を開いた。双臀をグッと英次の方へせり出す。

「へへへ、浣腸してやるぜ、奥さん」

浣腸器をかまえると、英次はゆっくりと嘴管で貫いた。

「あ、あッ」

夏子の唇が開き、戦慄の悲鳴があがった。

「じっとしてろ」

英次は嘴管の先で責め始めた。夏子のアヌスをこねくりまわすように動かしては、深々とえぐる。

「あ、ああ……も、もてあそばないで……浣腸するなら、



早く、早くすませてッ」

「へへへ、催促かい、奥さん」

「……ち、ちがうわッ」

そう言った時、注入が始まった。キューと嘴管が鳴り、ドクッ、ドクッと重い液体が流れ込んでくる。夏子は全身が総毛立った。

「うッ、ううッッ……羞かしい……」

何度味わされても、決してなれる事の出来ない感覚である。夏子は、うッ、うッとうめき声をあげて泣いた。

「へへへ、いいだろ、奥さん。ほれ、ほれ、ほうれ……」

ポンプを押す英次の手がふるえている。もう、どうしようもないまでに昂ぶっている英次なのだ。

「ううッ、うむむ……きつい、きついわッ」

「そんなに感じるのかい、へへへ」

「っ、っらいだけだわ……うむむ、きついッ」

流れ込んでくるのは、グリセリン液の原液である。苦痛に夏子は顔をゆがめた。早くもあぶら汗が、ジットリとにじんでくる。

「あッ、あうう……きつい、きついわッ」

「もらすなよ。一滴残らずのみ込むんだ」

「うむむ……く、くるしいッ、かんにんして……もう、入れないでッ」

激しい便意がこみあげてくるのであろう、夏子の双臀

が苦悩にうねった。

「だらしねえぜ。まだ二百CCしか入ってねんだぞ、へへ……動くなッ」

英次は笑いながら、わざとゆっくりと注入していく。夏子が苦しみ、泣くのを楽しんでいるのだ。

「た、たまらないの……早く、早くすませて、お願いッ」

「駄目だ、へへへ……」

「お願い、せめてひと思いに……うむむ、くるしいッ」

ひと思いに入れて欲しいと、夏子は泣きながら哀願した。苦痛にからだがかくずれそうになり、壁に爪をたててしがみつく。

ドクッ、ドクッとグリセリン原液が流入する。英次はおもしろがって、嘴管を淫らに動かしながらポンプを押し続けた。嘴管を上に向けたり、下に向けたり、また回転させながら注入した。

「あ、あうッ……お腹が、お腹がどうかなっちゃう……きついわッ」

泣きながら叫んだ時、注入が終った。ズズッと不気味な音がして、浣腸器のポンプが押し切られた。

「へへへ、おいしかったろ、奥さん」

英次はぬれそぼった夏子のアヌスに指をあてがい、ゆるるともみ込みながら笑った。もう一方の手でふくらんだ下腹を撫でまわす。

「さあ、かがみな」





両手をそのままに、夏子を便器の上へかがませる。夏子はスカートをまくりあげたまま、すすり泣いた。

「ああ……したい、したいのッ、手をどけて……早くどけてッ」

「フッフ、いいから、このままやりな」

英次はアヌスをもみ込む指を引こうとはしない。もみ込みながら、身をかがめてのぞき込むのだ。

「そ、そんな……出来ないわッ、手をどけて、お願いッ」  
「俺はこのまましろと言ったんだ」

英次は冷たく言い放った。  
強烈なグリセリン液の原液である。夏子は三分ともたなかった。

「あ、あッ……く、くるしいッ、も、もう、駄目だわ……手を、手をとってッ」

無駄とはわかっていても、夏子は最後の氣力をふりしぼるように哀願した。

英次はせせら笑うだけだった。夏子が高くすすりないた時、夏子のアヌスが花開くように盛りあがってきた。

英次の指にはっきりと感じ取れた。

「あ、ああッ……」

夏子の排泄が始まった。英次の指がまさぐる夏子のアヌスが満開に咲き、グリセリン原液がたぎって噴出する。それでも英次は、指を引こうとはしなかった。次々とほとばしらせるアヌスの状態を、指先で味わっている。

「うッ、ううッ……ひどい、ひどいわ。あんまりだわ……」  
夏子は両手で顔をおおって、泣きじゃくった。排泄してい



るアヌスをまさぐられる事など、夏子には信じられなかった。

英次の指先がアヌスを貫いてきた。水のほとばしる蛇口に指を入れるようなものだ。

「あ、あうッ……いや、指をとってッ」

「へへへ、いい感じだぜ、奥さん。一度ひり出している女の尻の穴に指を入れてみてえと思ってたんだ」

英次は指で開き切った肉襞をまさぐってみせた。指のまわりからほとばしるのも苦にはならなかった。

「お、おわってからにしてッ……そんなのいや、いやッ」

口から出る言葉とは裏腹に、夏子は頭の中がうつろになった。荒々しい便意からの心地よい解放感と、アヌスをまさぐられる狂おしい鹿触……おぞましさと快感ともつかないふるえが背筋を走る。夏子の排泄はまだ、続いていた。

## 割られた花

夏子がようやくくしぼり切ると、英次は指を抜いた。激しい興奮に顔がひきつっている。まるで夜叉を想わせる形相だった。

英次は二本目のグリセリン液の栓をあけると、からになった浣腸器を取りあげた。ズズッと吸いあげる。

それを眼にした夏子は、激しく狼狽した。

「い、いやッ、いや、浣腸はいや……も、もういやッ」  
おびえた泣き顔がひきつる。

「フフフ、甘いな、奥さん。一回きりの浣腸で終りだとも思ってたのかよ」

「いや……他の、他のことにして。浣腸は、もう、もういやッ」

「いいから尻を突き出しな」

「ああ……」

夏子はすすり泣いた。

「お願いだから、他のことにして……」

いきなり英次の手の平が、夏子の頬へとんだ。二度、三度とはたかれる。

夏子は嗚咽して、再び双臀を英次の顔の前へ突き出した。

「どう、どうしてもするのね……っらいわ」

「へへへ、もっとつらくしてやるぜ」

何かを思いついたように、英次はニヤッと笑った。ひとまず浣腸器を床に置くと、夏子のからだを前に向かせた。夏子の片肢を横へ割り開いて肩へかつぐ。

「ああ、何を、何をするの……」

「スカートをもっとまくってろ、へへへ、じっとしてるんだぜ」

英次のポケットから釣り糸が取り出されるのを、夏子は見た。その釣り糸は真中から二つに重ねられ、その真



中の部分に輪がつくられる。ちょうど小指が入るほどの輪だ。

「そ、そんなもので何をしようと言うの」

「いいから、じっとしてるんだ」

英次は艶やかな女の茂みをかきあげると、肉の合わせ目を指で割り開いた。妖しいサーモンピンクが剥き出る。

「あッ……いやッ」

夏子は狼狽して、泣き声をあげた。弱々しくかぶりをふる。

「なんだ、感じてるじゃねえか、奥さん」

ネットリと光る女の潤いに気づき、英次はケラケラと笑った。

「いやッ……言わないでッ」

アヌスをまさぐられ、敏感に反応するまでになった自分のからだに、哀しかった。

英次は指先で女の蕾をさぐりあてると、丹念に剥き出しにかかった。指先でこすりつまむようにしていびる。

「あ、あう……いや、いや……」

「へへへ、敏感なからだをしてやがる」

「あうッ……あ、ああ、だ、だめ……」

夏子は英次のいたぶりに、ジクジクとあふれさせた。浣腸と排泄の直後とあって、女の神経は昂ぶっている。

「へへへ、可愛い蕾をしてやがる」

英次は釣り糸を手にとると、蕾をつまみあげた。釣り

糸の輪の部分に、ちょうど女の蕾にあたるようにして、キュッと締めあげる。釣り糸で女の蕾を縛りあげたのである。

「ひいッ……そ、そんな、そんなことって……ひッ……ひッ」

夏子はビクッとからだをふるわせ、ひゅッと顔をのけぞらせた。わきあがってきた妖しい情感が、一気にけしとんだような狼狽ぶりだった。

「ひッ……いや、いやッ……」

「へへへ、いやでも尻を突き出すようにしてやるのさ」

英次は、釣り糸の先を二本持つと、意地悪くクイッと引いた。蕾がキュッと引かれる。

「ひゅッ……やめて、やめてッ」

夏子が泣くのもかわわず、英次は釣り糸を引きながら前を肌けて乳房を剥き出しにした。その乳首に釣り糸を巻きつけると、夏子を前かがみの状態にしてむすびつける。もう一方の乳首にも釣り糸は巻かれた。

釣り糸は、夏子の股間から両乳首へ「V」の字型にながれたのである。

「こ、こんな……ひどい、ひどいわッ」

「ひどいのはこれからさ、へへへ……」

英次は夏子をうしろ向きにした。浣腸器を手取る。

英次はムッチリと張った夏子の双臀をピタピタとたたいてから、嘴管をアヌスに沈めた。



「いやッ、こんなかつこうで浣腸されるのはいや……お願い、かんにんして……」

そう言う間にも、冷たい液体が流れ込んできた。そのおぞましさに、夏子は思わずのびあがろうとした。

「あ、ああッ」

夏子は悲鳴をあげて、からだを硬張らせた。自分で釣り糸を引っぱる結果となったのだ。

「わかったろ、じっとしてることよ」

英次は笑って、一気にポンプを押しきった。

「ひッ、ひいッ……」

夏子は高く泣いて、アヌスをヒクヒクと痙 させた。

浣腸器が引き抜かれると、英次が荒々しく腰を抱いてきた。求めるのはもちろん、恐ろしい肛交だ。

「あ、ああ、待ってッ……先に、先にさせて、させてえ……」

「ダダをこねるんじゃないよ」

太く長い英次が、ジワジワとめり込んできく。浣腸されての肛交は地獄である。

「うッ、うむむッ……っらいッ」

「へへへ、っらいか。そいつはおもしれえ」

「っらいわ……うッ、ううッ」

英次は深々と押し入ってきた。はり裂けそうだった。

白い腹が、グリセリン原液の荒々しい刺激にグッ、グッと鳴いた。

「尻をふれッ、奥さんが俺を楽しませるんだ。ほれ、ふらねえか」

「そ、そんな……そんなことさせないでッ」

「尻をふれよう」

英次は釣り糸を指ではじいた。ピーンと張っているのはじかれたのだから、たまらない。

「ひいッ……やめて」

夏子の双臀がゆれ始めた。

「もっとふるんだ、奥さん」

夏子はもう、泣きながら双臀をゆすった。少しでもゆれが小さくなると、英次は容赦なく釣り糸をはじいた。

乳首と女の蕾が、ちぎられんばかりになる。

「ひいッ」

悲鳴をあげて、夏子は双臀をゆすり続けた。

「ああ、早く満足して……まだなの……」

「へへへ、そいつは奥さんの尻のふり方しだいだぜ」

「あ、あ……早く終って。きつくて死にそうだわ」

夏子は泣き声で言った。浣腸による荒々しい便意がきむしる内臓の苦悩と、肛交の苦しさ、二重の責め苦だった。

妖しくゆれる双臀が、ブルッ、ブルッとはふるえている。あぶら汗を浮べて、夏子はあえいだ。

「く、くるしい……まだ、まだなの」

「まだだ」



英次の返事は冷たい。果てる事よりも、夏子の苦しむ様子を見て、楽しんでゐるのだ。

「へへへ、苦しいか、奥さん」

「く、くるしいわ……お願いだから、早く終って……ね、ねえッ、あなたも……」

英次にも腰をつかつて欲しいと、夏子は哀願した。耐えきれずに出た言葉だった。

「へへへ、俺に激しく責めて欲しいと言うんだな、奥さんよう」

「お、お願い……」

「きついぜ。それでもいいのか」

夏子はガクガクうなずいた。もう、おぞましさも、羞恥もなかった。あるのは、この苦悩から逃がりたい一心だった。

「牝らしくなってきたやがった、へへへ……よしよし」

そう言うなり、英次は猛然と腰を使い出した。覚醒剤中毒でやせたからだからは、想像も出来ないたくましさだ。こねくりまわし、突きあげ、自分の氣に入るように夏子をあやつるのだ。

「ほれ、ほれッ、いいだろ」

英次は残酷だった。乳房を根元からつかんでしぼり込む。キュッと釣り糸が引っぱられた。それだけではない。釣り糸をピン、ピンとはじく事さえした。

「ひいッ、あ、ああッ……」

夏子は甲高い悲鳴をあげて、泣きじゃくった。もう、狂乱状態である。ひッ、ひッとかすれた悲鳴をあげ、全身をうねらせ、両手で髪をかきむしっては、ドンドンと壁を両手でたたくののだ。

快感などと言う生やさしいものではなかった。腸管の地獄と、送り込まれてくる官能の蠢めきと……もう、わけがわからなくなっていく。

「ううッ、く、くうッ……ひッ、ひいッ」

「フッフ、そんなにいいのか。ほれ、ほれ、ほうれッ」  
英次は夢中になって夏子を責めつづけた。荒々しくて、むさぼるようだ。貫いているアヌスだけでなく、釣り糸をはじいて女の蕾と乳首も責める三ヶ所責めである。

「く、くくッ、くうッ……早くおわって……あうッ、きついわ、きついわ……」

息も絶えだえに夏子はうめいた。(以下次号)





反戦主義者の 印を押され、憲兵隊に連行された外交官の年若く美しい令夫人が、夫の命を救いたい一心で、冷酷無残、無類の好色漢である憲兵隊将校の許を訪れるが、それはまさしく飛んで火に入る夏の虫であった。

# 淫ら検問に泣いた令夫人

(憲兵隊秘録)

## 憲兵が行う身体検査

憲兵隊の取り調べ室は、昼だというのに薄暗く、裸電球がゆらゆらとゆれていた。その裸電球の下で、横沢大尉はふろしきづつみを解いた。重箱につめられた家庭料理と、下着の着がえだった。

「差し入れは、これだけか」

憲兵としての横沢の眼はするどい。

静香は黙ってうなずいた。

「よし、次は身体検査だ、フッフ……」

横沢大尉のするどい眼つきが、淫らな色を帯びてくずれた。

「は、はい……」

静香はふるえる声で答えた。哀しげにうつむいて上衣の前を肌け、裸の乳房をさらす。

白く匂うような成熟した乳房だ。透き通る感じさえした。

「ど、どうぞ、お調べ下さい……」

静香は剥き出しの乳房を、横沢大尉に差し出した。今にも泣き出しそうな声だった。

「よし、調べてやるぞ」

横沢はニヤツと笑った。手をのばして、静香の乳房に触れる。くるむように撫でまわしてから、力を入れてわしづかみにした。付け根からしぼり込み、荒々しくもみしだく。

「あ、ああ……」

静香の顔が、苦痛にゆがんだ。感覚の敏感な乳房をしぼり込まれるのだ。

横沢大尉は両手でしぼり込みながら、その頂点の乳首にしゃぶりついた。乳首をひきちぎらんばかりに吸いあげては、歯でガキツとかむ。乳がにじみ出た。

「あ、ううッ……うむむ……」

静香はうめいた。

「うッ、ううッ……つらい……」

「じつとしてろ。じっくり調べてやるからな、外交官夫人」

横沢はガキツ、ガキツとかんだ。かんで吸い、吸ってはかむ。たちまち静香の乳首は充血して腫れ、疼いてきた。乳房全体も火の



ようになった。

「よし、次だ」

赤く充血して、唾液にまみれている乳首を指先でつついて、横沢は言った。

静香はうしろを向くと、スカートの裾をまくって臀を剥き出した。下着はつけていなか

った。横沢大尉に禁じられているのだ。

白く豊満な臀丘は驚ろく程の悩ましさと、

ムッチリと形がいい。ムキ玉子を思わせる。

その白い臀丘に、横沢大尉の眼が吸いついた。

「脱げッ」

「……全部ですか」

「そうだ。スッ裸だ」

横沢は冷たく命じた。

言われるままに衣服を脱ぎすてると、静香

は机の上でよつん這いになった。美しい顔を

真赤にして、全身をブルブルとふるわせる。

「膝を開け。何もかも剥き出しになるまでだ

ぞ、フッフ……」

静香は小さくすすり

泣いて、膝を開いた。

横沢の眼が、ねっとり

としのび込んでくるの

がわかった。

「ああ……お、お調べ

を……」

静香は真赤に灼けた。

たとえ愛する夫の前で

も、こんなかっこうを

とった事はない。

横沢大尉は高くもた

げられた静香の臀をゆ

るゆると撫でまわしな

がら、ケケケッと気味

の悪い声で笑った。

「女はからだの中に、

いろんな物をかくせる

からな。じっくりと調





べてやる。いいな、外交官夫人」

「……は、はい」

静香はすすり泣きながら、返事した。

横沢の指が、女の肉の合わせ目に這った。

つまむように左右へくつろげ、奥を剥き出す。

「ああ、いや……」

静香は羞恥と屈辱にまみれた。すすり泣き

ながら、弱々しくかぶりを振る。腰が左右へよじれた。

「フフフ、いやか」

「……い、いやじゃありません……あ、ああ

いやッ」

「おとなしくしている」

横沢の指の動きはしつこかった。肉襷をひとつひとつ探るようにしながら、あますところなくまさぐるのだ。

女の蕾が剥き出され、おしっここの出るところまでさぐられた。執拗ないたぶりに、敏感な静香のからだはジワジワと反応を見せた。

妖しく収縮させながら、ジクジクと蜜をにじませる。

「あ、ああ……いや、いや……」

静香は歯をくいしばって、官能のうずきに耐えようとしている。だが、からだの芯がジーンとしびれ、どうしようもないまでにドロドロと溶け出してしまふ。悦びを知りつくし

た人妻の、哀しい性であった。

「あ、あ……かんにんして……」

「フフフ、身体検査でこんなにあふれさせる

とは……淫らな外交官夫人だ」

「……言、言わないでッ……」

静香は泣きながら言った。横沢大尉はへらへらと笑った。

「奥も調べるぞ、フフフ、何もかくしてはいないだろうな」

横沢は、いきなり指を二本、女の最奥へ沈めた。

「あ、あうッ……かんにんして下さいッ」

「じっとしてろ。奥を調べているのだ」

横沢は指を深々と挿入させたまま、中をまさぐった。指先でこすってやる。

ヌルヌルとした肉襷が、妖しく蠢めいて指にからみついてくる。指がとろけんばかりである。そのすばらしい感触に、横沢大尉は舌を捲いた。

「こらッ、そんなに喰いしめるな。何か入ってないか、よく調べられんではないか」

「あ……あ、あうッ、早く、早くすませて下さいッ」

「まだだ。よく調べると言ったはずだぞ」

横沢は憎いまでの巧みさで、静香の弱点、官能をさぐりあててきた。知らず知らずの内

に、静香の腰がうねり出してしまふ。

それは身体検査という名のいたぶりであり、愛撫だった。

「フフフ、敏感すぎるぞ。もっともこれだけのからだをしてれば無理もないがな」

横沢は笑った。横沢は決して静香を追い上げようとはしなかった。七合目あたりで上げたり、下げたりをくり返した。まるでトロ火にかけているのと同じである。

「よし。どうやら何もかくしていないようだな、フフフ」

ようやく横沢大尉は顔をあげた。指が甘い蜜にまみれて、しどろに濡れそぼっている。

## 夫との面会の代償

突然、外交官である夫が憲兵隊に連行されたのは、今から十日前の事であった。日米開戦を回避しようと努力した事から、反戦主義者とみなされたのである。

連行したのは憲兵の横沢大尉である。この横沢という男、以前から静香の所へ押しかけたいやがらせをし、いやらしい眼つきで静香を見つめる嫌な憲兵だった。

静香は、夫との面会を求めて毎日のように憲兵隊へかよった。



「お願いします。主人に、主人に会わせて下さいッ」

静香は何度も訴えた。まだ一度も、夫との面会を許されていなかった。憲兵隊の拷問が苛烈なことは有名である。とくに横沢大尉は、「鬼の横沢」と言われ、その拷問のすさまじさは有名だった。

「主人は、無事なんですか……お願いします。ひと目、ひと目会わせて下さい」

「奴は国賊だ。それも超危険分子だからな。会わせるわけにはいかん」

「う、うそですッ……国賊だなんて、なにかの間違いです」

「黙れッ。憲兵隊をうそつき呼ばわりする気かッ」

横沢はどなった。軍刀をガチャガチャ鳴らしながら、静香のまわりをゆっくりとまわる。まわりながら、

静香のからだをなめるように見つめる。

静香はこの横沢大尉の視線がたまらなかった。まるで裸を見ていられるようで、背筋が

寒くなる。だが、今の静香は夫の身を案じる事で精一杯であった。

「ひと目でいいんです。会わせて、会わせて下さい」

「フフフ……そんなに会いたいのか」

横沢は、静香の顔をいやらしくのぞき込んで、ささやくように言った。

「心配するな。まだ死んじやいない」横沢大尉の言葉が、夫がきつい拷問にかけられていた事実を暗示している。

静香の顔が、狼狽してひきつった。

「フフフ、素直に言う事を聞いた方がいいぞ。亭主の身を案じるのなら」

ハツとして、静香はからだを硬張らせた。面会させて欲しければ裸を見せろ……夫が連

行されたその日から、執に言い寄る横沢大尉なのだ。

「い、いやです。そんなこと……」

静香は拒み続けた。蛇のような男に裸を見せるなど、死んでもいやだった。

だが、静香が拒めば拒む程、その腹いせに夫への拷問を激化させる横沢である。

「いやか……それなら面会はさせられん、フフ、また亭主が血ヘドを吐く事になる」

「ま、まっ下さい。主人を、主人を責めないで……」

「そいつはお前しだいだ、フフフ、おとなしく裸になって身体検査を受けると言うのか、外交官夫人」

静香は唇をかみしめた。この横沢大尉は、始めから自分を狙ってい

て、その為に夫を反戦主義者にしたてあげたのでは……静香はそう思った。

横沢は用意しておいた焼きごてを取り出して、わざと見せつけた。机に押しつけると、

ジュツと音がして黒くこげた。横目で静香の反応を見ている。

「きくぞ、こいつは、フフフ……亭主のからだ、パーベキューだ。いつまでもつかない」

意地悪く大きな声で言う。

「や、やめて下さい。主人に、そんなことしないで」

静香の顔が、ベソをかかばかりにゆがんだ。

「ま、まっ下さい。本当に、本当に裸になれば……」

静香の声がふるえている。愛する夫の為に自分を犠牲にしようとする妻の叫びだ。

横沢大尉は歯を剥き出して、露骨にニヤツと笑った。

「そいつは態度しだいだ、フフフ」

もう、横沢の思い通りである。この手口で何人もの女の肉をむさぼってきた男なのである。

面会に先だつての身体検査は、横沢大尉が女をもてあそぶ格好の口実であった。横沢はきまって乳房の検査から始めた。乳房から肉





の最奥へと下がっていくコースだ。

「フッフ、よし、次は肛門だ、外交官夫人」

横沢は命じた。

静香は狼狽した。よつん這いになったまま横沢をふり返る。

「そ、そんな……そんな所まで調べるのですか……」

「当り前だ。肛門の中にだって、何をかくしてるかわからんからな、フッフ」

横沢は両手で臀丘を割りひらいてのぞき込んだ。可憐な菊の蕾がひっそりとのぞいている。いじらしいまでにすぼめていた。

「羞かしい……そんな所を見られるなんて、羞かしいわ」

静香はそう言ってすすり泣いた。

いきなり横沢はその菊の蕾に指を押しつけた。

「あッ……ああ、いやです。かんにんして」

静香は悲鳴をあげて臀丘を硬張らせた。キュッとすぼまり、周辺がビクッとふるえる。

「そ、そこはいや、いやですッ……かんにんして下さいッ」

愛する夫にさえ触れさせた事のない箇所である。言いようのないおぞましさに、静香は横沢の手をふりはらいたい欲望を、必死に押さえた。ふりはらったりしたら、夫がどんな



目に合わされることか。

「中を調べるぞ」

横沢大尉は、指先もみ込みながら、沈めにかかった。

「あ、ああ、なんという事を……」

「おとなしくせんかッ」

横沢はむごく突き立てて、ジワジワと指先をもぐり込ませた。すぼまろうとするのをもみほぐしながら貫いていく。

「ひどい、ひどいわ……痛い、痛いッ……」

「痛ければ肛門をゆるめればいいんだ、フッフ、ほれ、ほれッ、もっとゆるめんか」

「かんにんして……入れないで」

横沢の変態的な行為がおぞましく、不気味だった。想像を絶した行為は、汚辱感と嫌悪以外の何ものでもない。

「肛門の方もなかなかのもんだ、フッフ、敏感なんだな、外交官夫人」

横沢は指の付け根まで深々と貫いた。

「熱いぞ。それにしめつけおって……指が溶けそうだ、フッフ」

「うむむ……み、みじめだわ……」

静香は苦しげにうめいた。わあッと号泣したいのを必死に耐える。

「もっと肛門の力をゆるめろッ」

「そんな……うッ、ううむ……」

「そんなにしめつける所をみると、奥に何かかくしているのか」

横沢は意地悪く言った。何もかくしているはずなどないのを知っていて、わざと楽しんでいるのだ。

「か、かくしてなんかいません……う、ううむッ、かんにんしてッ」

「なら、ゆるめろ」

深く貫いた指はむごく蠢めいて、腸管をいびり始めた。

## 夫の居る前で……

淫らな身体検査が終ると、ようやく愛する夫との面会が許された。

いそいで服を身につけようとする静香の手を、横沢がつかんだ。

「そのままだ、フッフ……」

「そ、そんな……裸のままなんていや、むごすぎますッ」

「国賊の女房のくせに、なまいき言うなッ」

横沢大尉はどなって、静香の裸の臀をはたいた。

「心配するな。亭主には眼かくしをする事になっっている」

横沢はつけ加えた。

取り調べ室の奥の戸が開いた。静香は思わず前かがみになって、両手で前をかくした。

こんなみじめな姿を見られたくはない……それは女としての本能的な動きだった。

横沢の言った通り、夫は眼かくしをされていた。激しい拷問のあとを物語るようによろよろしている。眼かくしされた顔は、醜く腫れあがっていた。

「あ、あなた……」

それ以上、言葉が出ない。

十日ぶりに見る夫であった。愛する夫の胸にとび込んで行きたい……そんな胸の内を、静香は必死に押し殺した。静香は一糸まとわぬ全裸なのだ。

机をはさんで、静香は夫と向いあって座った。

「静香か……静香なんだな」

「はい、あなた。静香です」

「静香」

夫の声がふるえている。

どちらからともなく手がのびて、机の上で握りあった。夫の手は人さし指の爪がはがされてなかった。

「静香」

「あ、あなた」

「静香の顔が見たい……」



夫の手が力をこめて、静香の手を握りしめてくる。強い願いがこもっていた。

「眼かくしを取る事は許さんぞッ」

横沢大尉は軍刀で床をたたいて、どなった。

横沢は静香のうしろへまわった。静香を抱

くように、両手で裸の乳房を握りしめる。ギユウッ、ギユウッつけ根から荒々しくもみ込む。ジクジクと乳がにじめ出た。

（あッ、こんな時に……いや、いやあッ）

静香は狼狽した。だが、拒む事は許されない。静香は夫の手を強く握り返すことで耐えた。

「あ、あなた……早く帰ってきて」

夫はしばらく黙っていた。

「たぶん……生きて、ここは出られないだろう……」

重く暗い口調で夫は言った。拷問のすさまじさを裏付ける言葉だ。

「あなたッ」

静香はすすり泣いた。

どんな事をして夫を救わなくては、横沢の言いなりになる事で夫を救えるなら……哀しい決意を固める静香だった。

「フフフ……」

そんな静香の心を見ぬいて、横沢大尉は笑った。乳房いびりはネチネチと続いた。乳首

は赤くなって火のようである。

乳房をもみ込む一方の手が、すべりおりて太腿を割りにかかった。静香はあわてて太腿に力を入れて閉じ合わせた。

「足を開け」

横沢が耳元でささやく。静香は夫に気づかれないように、いやいやと顔をふった。横沢の顔がきびしさをあらわにした。

「よし、面会は終了だッ」

意地悪い声をはりあげた。

「ま、まって下さい。もう少し、主人と話させて下さい」

静香はさすがに言った。まだ五分しかたっていない。

「静香」

夫も声をあげた。

憲兵にさからってはいけない、静香もまきぞいをくう事になる……そう言っている響きがあった。

「お願いです。もう少しだけ……」

静香は自分から太腿を開いた。少しでも長く、夫のそばにいたかったのだ。

「よし、あと十分だけだぞ、フフフ」

大きく開かれた静香の肉腿を、横沢の指が這いながら進んだ。女の茂みをかき上げ、肉の合わせ目の奥へしのび込む。ゆるゆるとま

さぐられた。

「う、うッ……」

静香は小さくうめいた。歯をくいしばって声が洩れるのを押し殺した。

眼かくしをされているとはいえ、愛する夫の前で女の最奥を触らせているのである。涙が出た。その涙は頬をつたわり、太腿の間でうごめく横沢大尉の手の上へ流れ落ちた。

「あ、あなた……」

「静香、友子は元気か」

「元気です。あなたの帰りを待ってるわ……あなた」

静香には夫との間に一粒種の友子がいる。まだ生後四ヶ月だった。静香は友子の事を話してきかせた。夫は何よりも一人娘を可愛いがっていた。

横沢は指を深々と埋め込んで、肉襞をまきぐり続けた。しどろに濡れそぼり、指を動かすと淫らな音色を立てた。

ツーン、ツーンとこみあげてくる快楽のう

ずきがうらめしかった。こんな時にも反応を見せる女の性が、静香には哀しい。

「友子か……会いたい」

夫はため息をつくように言った。

「あなた、今度友子を連れてきます……」  
「だめだ、静香。こんな所へ連れてくるんじ



やない」

哀しい響きがこもっていた。

夫は時々、激しくせき込んだ。苦しげだった。

その激しくせき込む時を狙って、横沢は荒々しく指でえぐって静香を責めた。

「あッ、いやッ」

思わず悲鳴があがる。

だがその悲鳴も、激しくせき込む夫には、聞えた様子もなかった。

十分はすぐにたった。

「時間だ。面会終り」

非情な声があがった。

「静香、友子をたのむぞ」

「あ、あなたあ……」

入って来た当番兵に荒々しく引きずられながら自分の名を呼ぶ夫に、静香は泣いた。

## キセルが菊の蕾に

夫との面会が許されるようになって、三日がたった。淫らな身体検査を拒まない限り、いつでも面会出来た。だが、拷問の方はやめられた様子はなく、日に日に夫は衰弱していく様子だった。

その日も静香は憲兵隊へ足を運んだ。愛す

る夫の身を案じ、会いたい一心だった。子供の友子も連れていった。夫にひと目会わせてやりたかった。

一条まとわぬ全裸で友子を抱いたまま、静香は淫らな身体検査を受けさせられた。乳房から始まるおきまりのコースで、肛門まで調べられた。

「だいぶ素直になったな、外交官夫人」

横沢大尉は指を静香の肛門に埋め込んだまま、せせら笑った。

「ど、どうなってもいい……ですから主人は、主人は……」

主人に拷問を加えないで欲しいと、静香は哀願した。横沢に犯される事を覚悟した言葉だった。だが、横沢は不能者だった。静香はその事をまだ知らない。

「フッフ、拷問をやめて欲しいか」

「や、やめて下さい。お願いです……」

静香はすがるように言った。その声はもう、泣いていた。

「奴は超危険分子だからな、フッフ、拷問をやめる代償は高いぞ」

「……覚悟は出来ています」

「言ったな。よし、その言葉にウソがなければ考えてやる」

横沢大尉は冷たく言った。

静香の決意を確かめるように、横沢の指は菊の蕾を深くえぐって、責め始めた。

「あ、ああ……ううむ、ううん……」

「いやなのか、フッフ」

「い、いやじゃありません……好きにして」  
よっん這いで子供を抱いたまま、静香はうめいた。

「よし、こうしてやる」

横沢は愛用のキセルを上衣のポケットから取り出した。サセルの先がググッと菊の蕾に沈められる。

「うッ、うむむ……ううんッ」

静香は顔をのけぞらせてうめいた。キセルが深く縫うように貫いてくる。本能的に腰が前へ逃げた。

「いやなのかッ」

「ち、ちがいます……うむむ……」

「なら、なぜ腰が逃げるか」

ムッチリと張った静香の臀が、うしろへ突き出された。ググッ、キセルが更に深く沈んだ。

「それでいい、フッフ……」

深く埋め込まれたキセルがゆさぶられ始めた。クルクルと回転させられる。

「うッ、ううむ……」  
涙がポタポタと机の上に落ちた。肉のおも



ちやにされているのだ。

突然、戸がたたかれた。

「横沢大尉殿、柿崎衛生兵入りますッ」

「よし、入れッ」

キセルをあやつりながら横沢は叫んだ。

戸が開き、柿崎衛生兵と名のる男が入ってきた。手に液体の入った瓶を持っている。

「グリセリン液と酢の混合液であります」

瓶を差し出した柿崎は、裸の静香にギョツとした様子だった。

「ああ、見ないで……」

すすりなく声で、静香は言った。

まだ二十才前であろう、柿崎はおどおどして眼をそらした。

「かまわん、見ろッ。これは命令だ」

「はい、見させていただきます」

柿崎は顔を真赤にして、静香に眼を向けた。

女の裸を見るのは、これが始めてらしい。

横沢大尉はおもしろがって、キセルをむごくあやつって見せつけた。

「フッフ、おもしろいものを見せてやる」

横沢は柿崎の持ってきた瓶の栓をぬいた。

酒をあおるように中の液体を口に含むと、キセルの口をくわえた。そのまま、ゆっくりと吹き出す。

「ひッ、ひいッ……」

弾かれたように、静香は悲鳴をあげた。キセルを通して液体が、静香の腸へ流れ込んできたのである。まぎれもない浣腸だった。

「な、なんという事を……ひいッ、ひッ」

「じっとしてろ。覚悟は出来てははずだぞ」

口の中の液体をすっかり吹き出してしまふと、横沢はへらへらと笑った。

再び瓶の液体を口に含むと、キセルをくわえる。そして吹き出す。

「い、いやアッ……ひッ、ひッ、うむむッ」

静香の全身に悪寒が走った。ズズッと液体が流れ込んでくるのだ。

「いや、いやッ……うッ、ううむ……」

静香は逃げない。拷問されている夫の身を思うと、どんなにおぞましくとも逃げられなかった。かわりに静香は、声をあげて泣きじやくった。

「横沢大尉殿」

柿崎衛生兵がうわずった声をあげた。今にも洩らさんばかりに昂ぶっている様子で、ズボンの前を押えている。

「なんだ」

「自分は、自分はもう……失礼します、横沢大尉殿」

そう叫ぶなり、柿崎はズボンの前を押えて飛び出していった。

「我慢出来なくなったか、フッフ、若いな、奴も」

横沢は笑った。静香はあまりにも妖しく、美しすぎるのだ。

その静香は全身をふるわせて泣きじやくっていた。その声に眼をさましたのか、赤ん坊の友子も泣き出した。

「うるさいぞ。静かにせんか」

横沢はどなった。静香の泣き声は心地いいが、赤ん坊の方は耳ざわりなだけである。

「静かにさせろッ。そんな事じゃ、拷問をやるわけにはいかんぞ」

「は、はい……泣かないで、友子ちゃん」

静香は必死に友子をあやした。乳房を友子にあてがう。友子の泣き声が、たちまちやんだ。静香は肩をふるわせて、むせび泣きながら授乳した。

横沢大尉は再び瓶の液体を口に含んだ。

それを見た静香は、にわかにおびえて泣き顔をひきつらせた。

「まって、まって下さい。この子にお乳をあげ終るまでまって……」

横沢は哀願を無視してキセルをくわえると、ゆっくり吹き込んだ。

「あ、あッ……う、うむむッ、ううん……」

ブルッ、ブルッと臀丘がふるえた。



横沢大尉は何度もくり返した。もう、二合ぐらいは注入されている。

「これ位にするか、始めてだからな、フッフよし、面会を許すぞ」

横沢はニヤッと笑って、キセルを引き抜いた。そしてつけ加えた。

「フッフ、何分間面会していただけるか見ものだ。せいぜい尻の穴をひきしめておけ」

静香はすすり泣くだけだった。

## 慰安婦が生れる刻

朝から雨がシトシトと降っていた。取り調べ室は陰気でカビ臭かった。いつもは待ちかまえている横沢が、その日に限っておくれて入ってきた。

「来たか、静香」

横沢は静香を呼びすてにした。

静香は差し入れのふろしきを差し出した。

「お、お願いします……あんな羞しめはもう、かんにんして下さい……」

いっそひと思いに犯して……静香は哀しげにつぶやいた。浣腸され、おもちゃにされるのはたまらない。いつ犯されるかとおびえ続けるのも耐えられなかった。ひと思いに犯された方がまだ救われる。





「なまいき言うな、フフフ」

横沢はせせら笑った。笑いながら軍服からキセルを取り出し、手の上でころがす。静香の顔が蒼ざめた。キセルから眼がはなせなかった。

「今日も、それを使うのですか……」

「フフフ、浣腸はいやか。今日は五合はのませてやる」

キセルで静香の双臀をポンとたたいて、横沢はまた、せせら笑った。

静香はおびえてうなだれた。それでも淫らな身体検査を受けようと、服を脱ぎにかかった。その手をキセルがとめた。

「今日はそのままでいい。机の上へあがれ」

命じられるままに机の上へ乗った。よつん這いではなく、あお向けの姿勢にされた。

「……お乳を、調べて……」

前を肌けて乳房をさらし、静香はうながした。長く残忍な乳房いびりだ。乳首をかまれ、にじみ出る乳を吸われながら、静香はずっとキセルから眼を離せなかった。

「まったく見事なおっぱいをしてやがる……フフフ、よし、次はスカートをまくって、両膝を立てろ」

静香は白い下半身を剥き出して、両膝を立てた。

「もっと膝を開け」

「ああ」

哀しげな声をあげて、静香は大きく膝を開いた。その奥に女の秘肉がわずかに口を開き、妖しく濡れそぼっていた。それに気づいて、横沢大尉はいやらしく笑った。

「なんだ、もう感じているのか」

「……言わないで……ああ……」

「フフフ、それでも人妻か、牝め」

横沢はあざ笑った。

突然、横沢は戸口の方をふり返った。

「伍長、そこにいるか」

「はい、待機しております」

「よし、入れッ」

伍長が入ってきた。

「静香、今日の身体検査は伍長を立ちあわせる事にしたぞ」

「横沢大尉殿、こんな美人の身体検査に立ちあえて、自分はうれしいであります」

伍長は憲兵隊十五年のベテランである。それでも静香の美しさに魅せられてか、顔が興奮にひきつっていた。

「ああ……」

静香は悲鳴をもらした。それだけで、あとは何も言わなかった。いくら哀願しても聞いてくれる横沢ではない。両手で顔をおおって

すすり泣く。

「美しい顔をかくす事はない。見せろ」

横沢は冷たく言った。

静香は泣き顔をさらした。

「フフフ、この伍長は亭主の担当兵だ。機嫌をとつといて損はないぞ」

「亭主を生かすも殺すも、横沢大尉殿と俺の胸ひとつだ、へへへ」

伍長はいやらしく笑った。蒼白い青年将校の横沢に比べ、伍長は色が黒くがっしりしていた。

静香はおびえた。おびえながら、膝を更に開く。精一杯さらして見せるのだ。

「主人を、主人をよろしくお願いします……」

「よし、身体検査を続けるぞ」

「やらせていただきます、横沢大尉殿」

横沢の承諾を得て、伍長は静香の膝の間に顔をつっこんだ。女の部分を指でくつろげて奥をまさぐる。

「あ、ああ……う、うッ」

静香のからだは硬直した。硬直したまま、立てた膝がふるえ出す。

病的な横沢の指と違って、伍長のはゴツゴツと節くれだっていた。その指を深く埋め込まれ、まさぐられるのだ。キューンとからだの芯がしびれた。



「こりや、極上もんであります、大尉殿」

「そうだろう、フッフ、だから憲兵隊きつての女泣かせの貴様を呼んだ。遠慮なくやれ」

「は、光栄です、横沢大尉殿」

深く埋め込まれた伍長の指は、荒々しくうごめいて、騷り始めた。

「あ、あ……やさしく、やさしくして下さい、ああッ、ひどい……」

静香はうらめしそうに横沢を見て、泣き出した。

「どうだ、亭主を責める指で騷られるのは」

横沢はへらへらと笑った。ラムネの瓶を伍長に握らせる。

「こいつを使え」

「横沢大尉殿、いいのでありますか」

「かまわん、深く入れてやれ」

伍長はニヤッと笑った。

「じつとしてんだぞ、へへへ」

ゆっくりと女の最奥へラムネの瓶を突き立てた。ジワジワと沈めにかかる。

「あ、ああ、やめて下さいッ、や、やめて……」

……う、うむ……」

ラムネの瓶がめり込んでくる。肉襞をジワジワと拡張しながら一寸きざみにめり込んでくるのだ。静香は絶息するようなうめき声をあげて、からだをのけぞらせた。

「うッ、ううッ……痛い、痛いわ……」

「子供をうんでいる。痛いはずがない」

「う、ううむ……うん、ううんッ」

からだがり裂けそうだった。静香は唇を開き、白眼を剝いた。もう、ラムネの先は子壺に達していた。

「ううむ……きつい、きついわ」

「きついか、フッフ……」

横沢はのぞき込みながらあざ笑った。静香が苦悩する姿を見て、楽しんでいる。

ラムネの瓶は淫らにあやつられて、静香を責め始めた。円を描くように回転させられながら抽送されるのだ。

「う、ううむ……かんにんして……ひッ……」

ひッ……ううん……」

静香は耐えきれずに泣き出した。うめき声と悲鳴まじりの泣き声である。

「こ、こんなのはいや、うッ、ううッ……早くカタをつけて……ひッ、ひッ」

「フッフ、犯して欲しいと言うのか」

「う、ううん……うッううッ」

静香はうめきながら、ガクガクうなずいた。ラムネの瓶で騷られるのは、生身で犯されるより、はるかに屈辱が大きかった。

「ほれ、ほれッ、いいだろ」

伍長はかけ声をかけてしつこくさいなみ続

けた。横沢大尉のお気に入りのお気だけあつて嗜虐性が濃い。

「う、う、うむむ……きつい……」

「きついか……だが、亭主はもったときついにあつてんだぞ、へへへ」

伍長は深くえぐった。子壺が押しあげられて、突き破られんばかりだ。

「ひッ、ひいいッ」

静香は泣きじやくった。両手で髪をかきむしって悶える。

他人に静香をもてあそばせる事で、横沢はこれまでになく昂ぶっていく様子だった。やがて横沢の興奮は頂点に達した。

「伍長、犯れッ。犯って犯りまくるんだッ」

「本当でありますか、へへへ……犯ります」

伍長の顔が淫らな歓びをあらわにした。結ながる所を見せるためらいは、まるでない顔をしている。軍服を脱ぐと、荒々しく静香にのしかかっていった。

「静香、今日から憲兵隊専属慰安婦にしてやるぞ」

横沢大尉は冷たく言った。

だが、その声はもう、静香には聞えなかった。



# 百恵の太腿

そろそろトウが立ってきたタレント歌手が失地回復のため芸能プロデューサーに肉体を投げ出す。しかししたたかな仕事師は先頃人気絶頂時に結婚引退した山内百恵を復帰させる為の淫靡な計画に往年のアイドル歌手を利用しようとする。

笛吹童子

## 華やいだ新妻

「ビデオテープを、じっくり見せてもらったよ」

酒田はそう云って、舐めるように百恵の姿を眺めた。久し振りに見る優雅な美貌はもちろん、白地のワンピースを着た肢体からも新妻らしい若く、華やいだ色気がムンムンと滲み出している。

「どうして、先生がこんなことなされるんです」

百恵はまだ信じられ減ないといった表情で、酒田の顔を見つめている。

「これもみんな君やわれわれのためだよ。わかるだろう。今のままじゃみんなが不幸になる。君さえその気になれば、全てうまく行くんだよ。私たちの懐も、君たちの家庭ももっと優雅な生活ができる」

「いったい私にどうしろっておっしゃるんです」

「わからんのかね。復帰するんだよ、芸能界に。今、カムバックしてみたまえ。スーパースタア不在の歌謡界じゃ、たちまちトップの座に返り咲ける。いや、引退前以上の人気が出ることは間違いないだろう」

「冗談はやめて下さい。そのことなら、引退する時にはっきり云ったはずです。もう二度とマイクは握らないって」

「そう、引退する時はね。だが、今は事態が変わってるんだよ。云っちゃ悪いが、君のご主人も三十だろう。もともと甘いマスクで若い娘に人気があるだけの男だからね。いくら君にとつていい亭主でも、俳優としちゃ二流だよ。あと数年もすれば、役はまわってこなくなる。何しろ汚れ役はあのマスクじゃできんし、演技力だってまるきしないんだから。」

「そうだったら、君はどうするつもりだね。」

「やっぱり君がカムバックするしかないだろう。君ならCMにでるだけで二億は稼げるんだからな」

「そんなこと先生に心配して頂かなくても結構です」

「しかしわれわれは急ぐんでね。君の復帰を望む声が高いうちに、カムバックさせたいんだよ」

「何と云われても、それだけはお断りです」

百恵は露骨に眉をひそめて、顔をそむけた。「そうだろうな。私も君がはい、そうですかと承知するとは思っていなかったよ。だからこそ、こんな面倒なことまでして君をここへ呼び寄せたのさ」





そう云うと、酒田は松方に目配せし、  
「君に見せたいものがあるんだ。こっちへ来  
たまえ」

松方に背中を押されて、百恵は隣りの部屋 中世の拷問部屋を思わせる造りになっており、  
に通された。そこに置かれている器具も一段と豪華に見え  
た。中は先日松方に凌辱を受けた地下室に似て、た。



「どうだね。君のためにこうして部屋を作り変えたんだ」

「わ、私のために——？」

と百恵が云ったとたん、背後でドアの開まる音がした。振り返ると、松方がドアに鍵をかけている。百恵の面に狼狽の色が走った。「これで君はここから逃れられなくなった。私の云う通りにしない限りね」

反対にそう云う酒田の口もとには、中年のしたたかで狡猾そうな薄笑いが浮んでいる。

「ほうら、こいつをご覧」

酒田が手にしたりリモートコントロールの装置のスイッチを押すと、壁脇のソファの横にあるテレビがつき、画面には一眼でそれとわかるブルーフィルムが写し出された。しかも画面いっぱい、両肢を開き、堂々と恥部を晒している若い女が、まぎれもなく自分であることに気づいて、百恵は顔から火が出るほど、頬を赭らめた。

「どうだね、面白いビデオだろう。私の友人に見せれば、恐らく百万出しても欲しいと云うに違いない。あるいは出版社に持ち込むか、君のご亭主に直接送るという手もある」

「お願いです、他人に渡すなら私に売って下さい。お金ならできるだけ払いますから」

「金なら君以上の値段で買ってくれる者はい

くらでもいる。だが、君がこれから私の云う通りにするなら、ただで譲ってやってもいいと思ってるんだ」

酒田がこうして穏やかに、時間をかけて話をするのには理由があった。力づくで百恵を裸に剥いて、責め上げるのは容易い。が、彼のように長い間、女を辱めて欲望を満たしてきた者には、暴力をふるうよりも、ジワジワと言葉巧みに相手を追い詰め、自分の膝もとに跪かせることに愉悦を覚えるようになってくるのである。

「どうすればいいんです」

「まず服を脱いでもらおうか」

右手にパイプを持って、酒田は云った。

## 無駄な抵抗

手を背中にまわして、百恵はワンピースのジッパーを下ろした。

許しを請い、それが叶わぬと知って抗って見たが、結局は相手を罵りながらも、指示に従わなくてはならなかった。こうなることは、マンションを出るときから半ば覚悟していたことだった。がこうして二人の男の前で自ら服を脱ぐとなると、さすがに指先が震えた。

そんな可憐な姿がまた、二人の嗜虐者を切ないまでにそそるのである。

ワンピースの下に百恵が着けていたのは、新妻らしい艶めかしいベージュのブラスリッパだった。何かそれだけで、新婚生活の甘い雰囲気と、人妻となつて一段と熟れた肉体の色香が、嫌でも伝わってくる感じである。ことにスリッパの裾からにゅつと露わになって、ストッキングをはち切れんばかりに脹らませる太腿の、息を呑むような豊満さ、そして熟れ具合——。

その太腿をピッタリと付け合わせたまま、百恵は自分の胸を抱くように交差させた指先で、スリッパの紐を肩から外した。ブラスリッパが脚もとに絡みつくと、あとは薄いストッキングとパンティだけである。

「ほら、まだ残ってるぞ。ここでは君は一切衣服は着けられないんだ」

百恵は両腕の中に寄り合う乳房を隠していたが、酒田に促されておずおずとストッキングを下ろし始めた。かがむと垂れる二つの乳は、心なしか震えて、ピンクの乳うんに鳥肌を立てている。

「もう許して下さい」

ストッキングを爪先から抜きとり、続いてパンティに指をかけたところで、百恵はとう



とう耐え切れなくなつて、その場にしゃがみ込んだ。

「今さら隠すことないだろう」松方は百恵の顔を覗き込んだ。「お前さんは、この間排泄物まで俺の前で出してみせたんだぜ。ビデオにちゃんと写ってるんだ。お前だって智和よりイイ、イイって悶えてたくせに」

「嫌っ……もうあんなこと二度と嫌です」

激しく頭を振った百恵は、酒田を仰ぎ見ると、

「お願いです、他のことなら何でもしますから、もう許して下さい」

「ほう、素直じゃないか、ずい分と。それならカムバックすると約束してもらおうか」

「そ、それは困ります——」

「ふん、あれはイヤ、これはイヤ。じゃあ何をするって云うんだね、え、百恵ちゃん」

冷やかに百恵を見下ろした酒田は、眼をキラッと不気味に光らせ、

「甘えるんじゃないやしませんよ。君は何様だと思つとるんだね」

と云いながら、靴の底で百恵の両手を強く踏みにじった。

「わ、わかりました。ぬ、脱ぎますから」

美しい眉を歪めて、百恵が云うと、

「何、それには及ばんよ」

松方に目配せし、二人で百恵の躰を抱え上げた。そして細長いレザー張りのベッドに仰けに寝かせると、四隅に備え付けられた革製の枷を、それぞれ四肢に嵌めていく。

百恵の若く、熟した肢体は、ちょうど大字に固定された。

（あれからもう八年か——）

酒田はその人妻となった躰を見ながら、ふと百恵がデビューした当時のことを思い浮べた。まだ中学生だった百恵は、肉体的に早熟だった点を除けば、他の新人歌手に比べてそれほど目立つ存在ではなかった。

ただ一つだけ印象に残っているのは、ある瞬間にふと見せる、妙に大人びたもの憂い眼差しである。それは何か、一種病的な美しさと同時に、その底にキラキラと輝く天賦の才能を感じさすずにはいられなかった。

その頃、友人が百恵の写真を見てこう云ったのを、彼は今でも覚えている。

「この子、少女っぽいところもあるけど、この表情とこの腰の辺りの肉付きを見ると、おかしい気分になってくるよ。何だか無理矢理犯しちゃっても、黙って許してくれるような雰囲気があるんだよな」

その彼も含めて、恐らく誰一人として数年後のスーパースター、山内百恵を想像した者

はいない。そして、あの円らかな眸が目立つだけの田舎少女が、これほど洗練された美貌と氣品を身につけるとは。しかも、こうして久しぶりに真近に見る百恵の姿態は、引退前よりもさらに輝きを増しているように思える。以前、ある医者がテレビで、

「男の精液の中には、非常に多くの栄養分が含まれています。だから、セックスが最も頻繁に行われる新婚一、二年この時期の新妻と云うのは肌の色艶もよく、潤いがあつて、一番いきいきと見えるんですね。よく、結婚して綺麗になったというのも、精神面以上に、夫の精を吸つて、それを肥しにして美しくなっているわけです」

と話していたのを思い出した。今の百恵がまさにそれだった。ふくよかな腹部の張り具合、柔かく揉みしだかれて豊かな乳、さらに妖しいまでに冴えた頬の色合いと瑞々しさ——どこをとっても滑らかな美しさに、乳白色の肌を輝かせている。

その豊満な肢体には、薄いページュの艶っぽいパンティが、漆黒の叢を透かして、デリケートな部分にびっちり張りついているだけである。

「どれ、百恵ちゃんの×××××を見せてもらうかな」



酒田の手が悩ましいパンティにかかった。

「い、嫌っ——」

半ば観念したように、眼を閉じていた百恵は、そのときになって不意に抗い始めた。が、身をよじり、頭を振り乱しても、四肢の自由を奪われていてはどうにもならない。酒田は百恵の仕草を楽しむように、一寸きざみに下穿きを下ろしていった。

## 秘薬の効力

太腿の付根まで下ろしてひも状になったパンティを、ナイフで切り取ると、もう百恵の花園を覆うものは何もない。人一倍小高く、ムッと盛り上った頂きに、縮れの少ない若草は形よく逆三角に繁茂し、その下から淡紅色のはざまを縦に長く走らせている。

注がれる視線に、百恵は唇を噛みしめ、全身を硬直させて身悶えた。それを見た酒田は、「ちよっと手を貸してくれ」

松方に百恵の腰を抱え上げさせ、その下にソファのクッションを重ねて敷いた。

「ああっ……こんな、嫌です、嫌々っ」

と、百恵は右に左にショートカットの髪を振り乱す。

無理もない。成熟した体は下腹のそそけだ

つ頂きの叢を頂点に、ブリッジの恰好をして、無残に開かれた両肢の付根からは、女の羞恥をその下の排泄器官とともにさらけ出しているのだ。

「なるほど、ココで旦那の智和と楽しんだわけか」

わざと露骨な表現を用いながら、柔かい若草を撫で返して、しげしげと新妻の羞恥の佇いに眺め入った。ピッタリと処女のように口を閉ざしている淡紅色のクレヴァスを押し開くと、

「あっ——」

声にならぬ声を発して、百恵の体はピクッと強張った。全身の毛穴が開いて、そこからじつとりと脂汗の滲むような恥ずかしさと屈辱が百恵を襲った。

その上気して歪み、それが一層被虐美を湛えた面を見ながら、酒田は両の人さし指で、入りくんだ髪を一枚一枚捲っては、女体の園を無理に横や縦に押し開き、形を変えて楽しんだ。

酒田はこれまでもチーフプロデューサーという地位を利用して、何人もの新人歌手たちの体弄んできた。柳田留美子もその一人だが、そんな中でただ一人、酒田を拒んだのが百恵だった。いずれ人氣が落ちたときはこ

の手にとっていたのに、百恵は彼の秘かな期待とは逆に、やがてスーパースターの地位を築き上げ、そのまま引退してしまった。

その百恵を今、こうして裸に剥いて辱めているのだと思うと、酒田の胸は切ないまでに甘く疼いた。

「智和君と毎晩楽しんでいる××××を、こうして覗かれる気持ちはどうだね、え？」

嘲るように酒田が顔をのぞき込んで云うと、百恵はキッと相手を睨みつけ、

「こ、こんなことなさっても、私は芸能界に復帰なんて絶対しません」

と、氣丈なところを見せるのだ。

「まあ、何とでも云うさ。それにそうやって強がってくれた方が、こっちも責めがいがあるってものだ」

そう云って松方を振り返ると、

「例の代物、もってきてくれたかね」

「ええ、中国製の秘薬で、ずい分と値段もはりましたよ」

松方はポケットから小瓶に入った媚薬を出して、酒田に渡した。

「こいつを塗ればどんな女も狂ったように男を欲しがります。もっとも、彼女には必要ないかもしれませんがね」

酒田はさっそく指にクリーム状の薬をすく





って、百恵の両肢の付根で息づく肉の挟間に塗り込んだ。

「どれ、こんなもんでいいだろう」

粘膜にたっぷりとクリームをすり込んだ酒田は、百恵の頸を把むと、

「もうじき智和君とのセックスじゃ味わえない悦びを、たっぷりと味合わせてやるからな」  
そう云って唇を重ねようとしたが、百恵は顔をプイとそむけた。

「舐は許しても心だけは違うと云うわけか、え？ それなら、こうしてやろう」

弱者をいたぶるように、酒田は両手で百恵の頬を挟みつけると、ふくよかな唇にピタリと唇を押しつけていった。そして、舌を出すなり唇と云わず、頬と云わず、額、眉、瞼、さらに尖った鼻先まで、ナメクジが這うようにネトネトと舐めまわすのだ。

「い、嫌っ……嫌ですっ」

唾液でベトベトになった面を歪めて、百恵は引き響った声を上げる。

「そんなに嫌なら遠慮することはないよ。大声で泣き叫ぶといい」

百恵の特徴ある鼻梁を摘み上げたり、ひねり上げたり、鼻孔を豚のように広げたりして、酒田は揶揄する。

「先生、そろそろいいですか」



松方は用意しておいたバッグの中から、カメラを取り出して訊ねた。

「うん、そうだな。私はこいつだ」

と、酒田も小さなケースを戸棚から出して、百恵の枕元に置いた。ふたを開けると、中には色々な形をしたパイプレーターやら張型が並んでいる。

松方がカメラを構えると、しばらく顔を肩にうずめて鼻をすすっていた百恵は、不意に頭を上げて、

「嫌っ、写真は撮らないでっ」

「そう騒ぐんじゃない。これは君がカムバックするときの記念として出す写真集に載せる予定になってるんだから」

と、酒田は冗談とも思えぬ口振りで百恵をなだめた。

## 花芯が疼く

女体の層に染み込んだ媚薬が効力を発揮し始めたのは、それから間もなくのことだった。歯を噛み合わせ、爪先を反り返しながら、懸命に堪えていた百恵も、とうとう我慢できなくなつて、

「お、お願い、どうかして下さい……疼いの」

と、身悶えをくり返して懇願した。

「欲しいんだろう、こいつが」

酒田にケースの中の張型を見せられると、百恵は狼狽したような、羞恥と躊躇いの混った眼差しをあわててそむけ、どうしたらいいのだろうと困惑の表情を浮べる。

「どうして欲しいか、はっきり云いたまえ」

と、酒田は意地悪く、苦悶する百恵の表情をのぞき込んでとぼけたように云う。

尚も百恵は、ジワジワと神経まで蝕むような搔痒感と闘っていたが、やがて口を開くと、

「あ、あの……オ、オッパイを揉んで下さい」

と、恥を忍んで屈辱的な懇願をした。

「うん、よしよし。君に頼まれて嫌と云う男もおるまい」

酒田の手は、形よく盛り上った若妻の乳を、下からすくうようにやんわりと揉みしだいた。

一瞬だが、百恵の眉合いに喜悦の色が走るのを酒田は見逃さなかった。ちょうど掌に収まるほどの乳は、柔かく、指の間に乳頭を挟んで揉むうちに、しだいに弾力を増してせり出してくる。

痒みはそれで薄らいだものの、今度は代って舐めがジーンと異様なほど熱く、甘美に疼き始めた。

溢れる——百恵はあわてて歯をくいしばったが、花園の粘膜の奥からは、トロリと熱い蜜が湧き出した。さらに、酒田に悦びに固くなった乳首を吸われ、柔かく噛まれ、百恵は思わず声を上げて、舐めを震わせた。

「お願い、意地悪しないで。もう、気が変になりそう」

あられもない言葉を口走り、百恵は脂汗に濡れた面を狂ったように振り乱す。

「こいつが欲しいんだろう」

ケースの中の張型を見せられると、今度は恥も外聞もなく頷き、

「どれがいい？ 一つ選んでくれないか」

「ああ、そんな」

この場に及んでも、まだ苛めるのかと恨めしく思いながら、しかし、やり場のない異様な官能の火照りに追いつめられて、百恵は切長のうるんだ眸でケースの中を見やり、

「そ、その一番右の、で——」

もちろん、ろくに見比べもせず指定したのだが、その張型を手にした酒田は、

「さすがに好きなんだね、百恵ちゃん。一番でかいのを選んだりして」

そう云うと、百恵の口もとにつきつけ、

「このままじゃ痛いだろうから、これを智和君の物と思って、しゃぶりなさい」

すでに羞らいのために躊躇う余裕を失った



百恵は、臉を伏せて、チロチロと舌先で張型の先を舐め始めた。

舌を使ううちに、自制心も薄れてきたのか、  
「ほら、口を開けて吸うんだ」

と云われるまま、官能的なポツテリとした唇で、精巧に型どられた張型の亀頭を柔かく挟み、押し込まれるまま頬をすぼめながら前後に顔を揺するのだ。

「ほう、なかなか上手じゃないか。毎晩智和にしてあげてたのかい」

と、酒田は淫靡に濡れ光る張型を眺めて云った。

「彼のもこんなに大きいかね」

「し、知りません……それより、は、早く、お願い——」

豊満な下半身をやるせなくねらせて、せっぱ詰まった声を上げる百恵。

「よしよし、今入れてやるから、イイ声で泣くんですよ」

ようやく、張型が太腿の付根、淡いピンク色に咲いた百恵の花園に当てがわれた。すでおびただしいほどの蜜を溢れさせた肉の挟間は、外人並みの巨大な責め具をみるみる呑み込んでいく。

あっ——酒田が片手を太腿に置き、ゆっくりと抽送を始めるなり、百恵は早くも感きわ

まった声を上げて、逞しい、嫌になるほど官能的な太さの太腿を痙攣させた。

その息を呑むばかりの悩ましい恥態を、松方が次々とカメラに収めていく。

松方から話は聞いていたものの、酒田も実際、自分の手でたしかめてみて、百恵の肉体の構造の素晴らしさに舌を巻いた。それはまるで別の生き物のごとく、刺し、引く度に重厚な女体の層を絡みつかせ、彼の手から張型を奪おうとする。

「驚いたな。これじゃあ智和君が君に夢中になるのも無理はない。あとでじっくり味合わせてもらおうよ」

そう云うと、酒田は抽送のビッチをあげ、一気に百恵を頂上付近まで追い込んだ。

と、そこで急に律動がやんで、張型が引き抜かれた。

「い、嫌っ！」

百恵は引きつった声で叫んで、豊かに脂ののった腰を物欲しげに揺すった。そのクッションによって高々と突き出された太腿の奥の花園は、可哀想なくらい果肉をピンク色に濡れ光らせてわなないている。

「お、お願い、意地悪しないでっ。気が、気が変になりそうなの」

「よし、それなら自分でやってみなさい」

酒田は百恵の右手の枷を取ってやった。

張型を渡された百恵は、ほとんど躊躇うことなく、自分の下腹に押し込むと、ぎこちない手つきで出し入れを始めた。自分が今、どんなふしだらな真似をしているかなどという思いは、百恵の頭には、もちろんない。

「それじゃあ、そろそろ楽にしてやるかな」  
酒田はケースの中からバイブレーターを取り、スイッチを入れると、小刻みに震動する先端を、百恵の今張型を受け入れて捲れた髪の上端からのぞく小さな淡紅色の豆に触れさせたのだ。

「いっ……く——」

ピクンと張りのある腹部が弾んだかと思うと、百恵は虚をつかれたように頼りない声を発して、ムッチリと太い腿をブルブルと震わせながら、それでも張型だけはしっかりと咥え込んで頂上を極めた。

## 切迫した女体

燃えさかった官能の焰が鎮まったあとも、百恵は去り行く喜悦の余韻を味わうように、うっとり切長の眼を閉じて、ときおり甘美な溜息を洩らしている。

その間にも酒田と松方は次の責めの準備に



とりかかっていた。

まず百恵の右手を再び枷に嵌め、続いてベッドに備え付けられたベルトで、百恵の額をしっかりと固定する。次にプラスチック製の管の部分が直径五センチもあるような漏斗を松方が持ち、

「さ、口を開けてこいつを啜えるんだよ」

「な、何をなさるの」

怯えたような表情で、顔を固定された百恵は眼を見開いて訊ねた。

「すぐにわかるさ。ほら、早く」

「い、嫌っ」

百恵が逆らって口を閉じると、松方は、

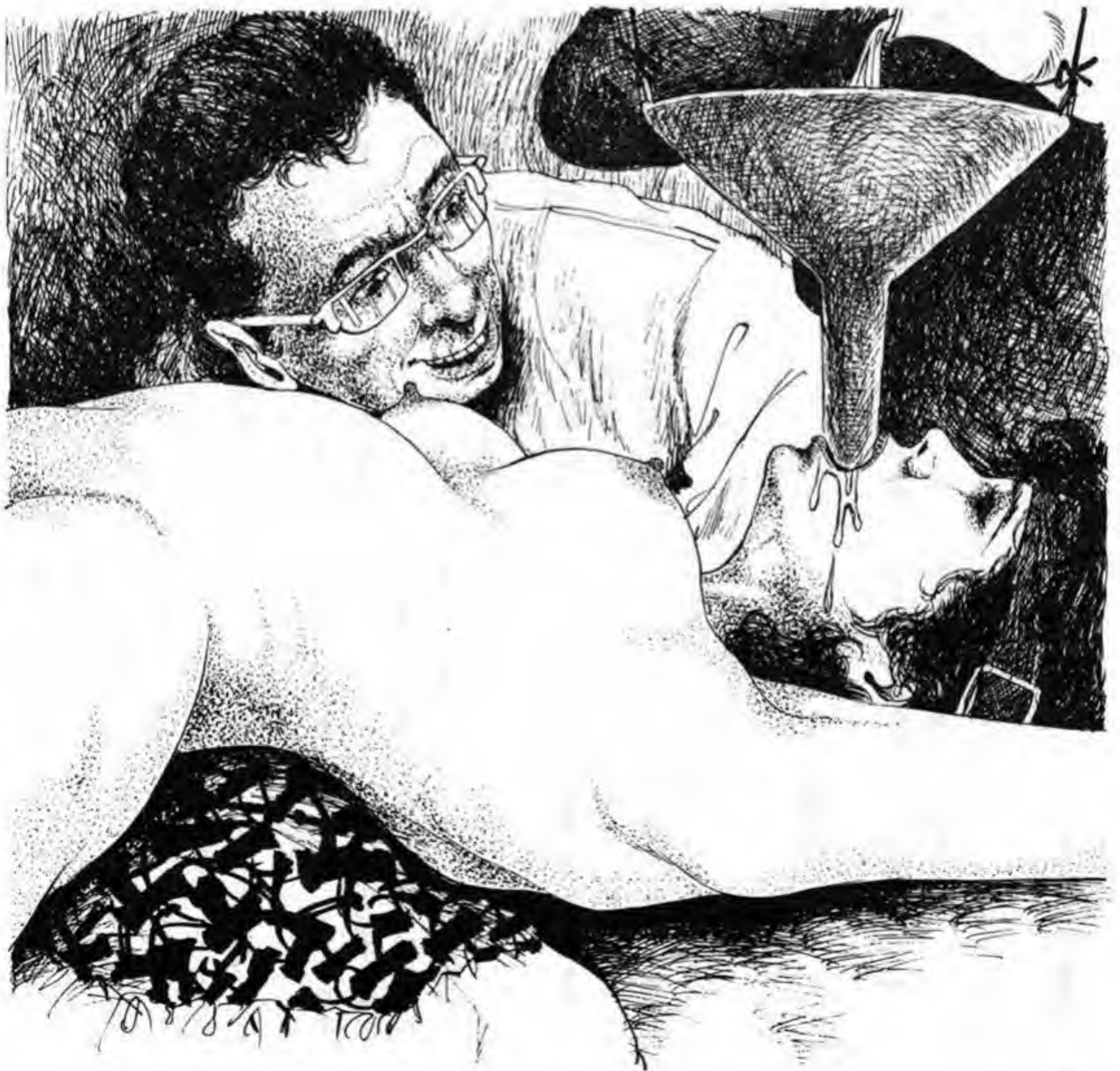
「乱暴はしたくないんだがね」

云って大きな尖った鼻を摘み上げ、百恵が息が苦しくなると口を開いたところへ、強引に漏斗の先をねじ込んだ。

漏斗の長さは四十センチ以上ある。その巨大な器具を、百恵は四肢はもちろん、首さえ動かせぬ状態で啜え込まされているのだ。

「楽しんだあとと云うのは、喉が乾くんじやないかね。ほれ、君のために特別の飲み物を作ってきたよ」

ヤカンの中になみなみとくんだ水を、酒田が見せた。ただの水でないことは、云うまでもない。中にはたっぷりと利尿剤が溶かされ





ているのだ。

「ま、夜は長いんだ。今のうちに吞めるだけ吞んでおくといい」

そんなことを云いながら、酒田は漏斗の上からヤカンの水を注ぎ込んだ。

吞もうか吞まいか——迷っているうちに口の中は満水となり、さらに松方が鼻を摘まんだために、百恵は嫌でも吞み込まなくてはならなかった。が、吞んでも吞んでも、次から次へと水は流し込まれ、百恵は漏斗を咥えたまま烈しくむせた。

「嫌っ、もうたくさんですっ」

口の中が空になったとき、そう叫んだが、それはただの呻き声にしかならず、百恵の視界が涙で曇っているうちにも、水は尚も注ぎ込まれてくる。今の百恵には、漏斗を押しつけ、あるいは頭を振って逃れることはおろか、悲鳴を上げ、言葉で哀訴することすらできないのである。

一方、酒田や松方は、そんな美貌を歪めるだけで、流し込まれる水をゴクリゴクリと懸命に吞み干して、腹部を脹らませていく百恵の姿に、痺れるような悦びを覚えていた。

ほとんどヤカンの水全部を吞み込んだところで、ようやく口から漏斗が引き抜かれた。よほどこの責めがみじめに感じられたのだろ

う、あの気丈な百恵が小鼻を赤らめ、眼尻から涙を流している。

が、それを見て責め手を緩めるような連中ではなかった。

「百恵ちゃん、舌を出してご覧」

急に猫撫で声になって、酒田が百恵の顔のぞき込んだ。百恵が訝って拒むと、

「まだ吞み足りないのかい。今度は水と云うわけにはいかんよ」

と云われて、恐る恐る舌を出した。唾液に濡れた小魚のような舌である。

「それ、もっと長く」

云うなり、酒田の指が舌を摘み、その先へ洗濯バサミが噛まされた。

舌を引こうとしたときは、もう遅かった。

洗濯バサミの強さは相当なものである。舌を挟みつける痛みもさることながら、百恵にとつてたまらないのは、洗濯バサミを取り外すことができぬまま、犬のようにだらしなく舌を出していることだった。

嫌っ——そう叫んでも、声は言葉にならない。

さらに酒田は、あの低音の、甘く、官能的な声音を出す、尖った鼻梁にも洗濯バサミを噛ませた。

「どうだね、百恵ちゃん。悔しいければ、泣

き叫んで旦那の名前でも呼ぶといい。ほら、どうした」

嘲るような笑みを浮べて、酒田は鼻梁を挟んだ洗濯バサミを摘んで、押捻するように左右にひねり上げる。そして、耳朵や乳房の丸み、肉の薄い脇腹から重たそうな太腿の肉側にまで洗濯バサミの飾りをつけていく。

百恵は、しかし、苦しめば苦しむほど彼らを悦ばすことになるを知って、美しい眉を寄せるだけで嗚咽は決して出さなかった。

「ほう、これくらいじゃ何も感じないらしい。それならこうしてやろう」

形よく盛り上った乳房の先で実った薄桃色の乳首——酒田はその果実を、洗濯バサミで挟んだ。

「アアッ——」

舌を出したまま、百恵は気のふれた人間のように、だらしなく涎を流しながら声を引きらせた。

「痛いかな？ 悔しいかな？ え？ 百恵ちゃん。それなら、何とか云ってみたまえよ」

酒田はそう云って、形のよい鼻をひねっては、痛快そうな笑みを滲ませるのだった。

が、そんな揶揄よりも、今の百恵にはもっと切迫した事態が起っていた。

(つづく)



美濃村 晃

伝記

# 淫縄狐火街道

第二回

小日向一夢・画

〈前号までのあらすじ〉

慶安元年八月二十日、公儀隠密井関半九郎は、隠密旅の途中、ふとしたことから丹波福知山四万五千石の城主稲葉淡路守紀通の発狂自刃を知る。稲葉城主家城代家老の黒岩図書は、藩主発狂自刃の場合は当家は廃絶となることを予知して藩の御用金参万両を由良ヶ岳の中腹赤岩洞に埋めたのである。その隠し金の絵図を城代家老に預けられた狐火のお紺は、絵図を稲葉家本家の稲葉美濃守に届けるために旅に出る。それを邪魔するために井関半九郎は、人買いの辰造を味方につけてお紺を追わせる。

## お紺はだか責め

辰造は、お紺のむきだしのままのおしりをいやらしく撫でまわしながら云った。

「ふ、ふふッ。こんな素っ裸のまま縛られていて、どこまで知らぬ存せぬが通せるつもりでいやがるんだッ。け、へへへッお紺よう、おめえのよな好い女が、女の生き恥を曝して悶え苦しむ姿を見るのは、たまらねえ眺めだろうぜ。えへへへッ。どうしても云わねえなら、ちょっとばかり泣い

てもらうことになりそうだなあ、へ、へへへッ」

辰造は、舌なめずりをしながら、お紺のむっちりとした豊かな臀部をいやらしい手で撫でまわすのだった。

「あッ／＼あれッ／＼」

「へ、へへへッ。たまらねえ手ざわりだ」

「な、なんてことをするんだようッ。よしとおくれよッ／＼す、すけべいッ／＼」

「ああ。おれは助平な男さ。おめえ、このしりの割れめに指をさし込まれてえか／＼」

「あーッ／＼よ、よしとくれッ／＼そ、そ





んないやらしいことをッ……あーッ！」  
「へ。いやらしいことをされたくなかつたら稲葉家の金のことを、すっかりしゃべってしまいな。でねえと、こうするぜ、ほら、ほらほらッ」  
と、辰造は、お紺の乳首を指先で強くはさみつけて、きりきりともみしだいた。

「あ、ふうーんッ。あ、あ、あーッ」  
お紺は、乳首を指先でいじられると、もうそれだけで股間が潤ってくる癖があるのだ。

「へ、おめえ、こんなにされるとたまらねえか。けへへへッ」

辰造はお紺のようすを見て面白がってこんどはお紺の乳首を唇に含んで舌の先でコロコロと転がしたり、チュウチュウと吸ったりするのだった。

「あーッ！ひいーッ！」

お紺、われにもなく悲鳴をあげてのけぞった。

「けへへッ、ひょっとしておめえ、もうぐっしょりと濡らしてるんじゃない、あるめえなッええ？どうでえ……お紺」  
辰造の手がお紺の下腹部にすりと伸びてきて、濃い草むらの下の亀裂を



さぐった。

「あッッ！」

「うふふッッ！ 案の定だな。おめえもう、こんなになってやがる。ほうらみろ」

辰造め、お紺が身を悶えるのをかまわず、ぐりぐりと指をまわしやがった。

「ひいッッよ、よしとくれッッ！」

お紺、声がかすれている。

「へ。これを見ろ、おいらの指をこんなにぬらしやがった」

辰造いやな奴で、ぬれた指をお紺の眼の前にこれ見よがしにかざして云った。

「お紺、ちょっといじりまわしただけでこんなになりやがる。おめえもまんざら嫌いなほうじゃあねえんだなッ……おめえはゆっくり湯に入ってきたから、あそここのところはたっぷりとあたたまっているだろうぜ……昔から湯ぼには酒まらがいちばん合うということだが、俺はいまここでおめえの裸を見ながら酒を飲むことにするぜ……そうすりゃあ、おめえを抱きたくなる頃にはすっかり筒の先まで酒がまわ

って……程よくなっているはずだからな……へ、へへへへッ」

## 酒のさかな

辰造め、眼がトロソとしていやがる。それもそのはずで、眼の前には一糸もまとわぬスッパダカにむかれたお紺が必死に片膝を立てて助平男の視線から女の羞恥を隠そうとして油汗を流しているのである。

「へ、へへへッ、お紺ッたまらねえ姿だな、いくらそんなにして片膝立てても見えるものは見えるんだッ……おッ、おめえ見かけによらず濃いほうだなッ……さっきは俺の指をぬらしてくれたが、へへへッもうすこしいじらせてもらおうかい……けへへへッッ」

辰造は、お紺をいたぶりながら酒を飲んでいたのであった。

「ふ、ふふふ。こうしてみるとおめえ、美味そうな尻をしていやがる……ふ、うふふッ」

「あッッい、いやらしいことをッ……」と、お紺は形のいい臀部を隠すすべもなく男の淫うな眼の前に身を縮めた

が無情に縛られた両手は、乳房も恥部もかくすすべもなかった。

辰造の酒ににどった眼は、男の欲望にギラギラと輝いていて、禪に包まれた下のものは男猛りに猛りはじめているのだった。

「へ、へへへッ。酒がまわりはじめると、すぐいきり立ちやがる。お紺よう、これを見てくれ、始末のわるい小坊主さ……へ、へへへへ」

辰造のその醜惡なものは女買辰造の自慢のものでこの股間の道具が今までに何人の女を気ちがいになさせてきやがったか知れたものではなかった。

「やいッお紺ッッこれを見ろッッ」

辰造は股間のそそり立ったものをお紺の眼の前に誇示するようにこれ見よがしにふりたった。

「け、けけけッッこれをよく見ろッ、そろそろ小坊主の先のほうまで酒がまわってきたやがったぜッ、あぁいい心持ちだ。長久旅の幾夜だったが今夜は久しぶりに酒がうめえや」

辰造め、うまそうなお紺の素ッ裸を酒の肴にして徳利から冷や酒を口飲みであふったせいで、かなり酔っていた。







し入れて舐めさせている。

「あー、そんなに舌を巻きつけられると、た、たまらねえや……ああ、たまらねえたまらねえ……う、うわッ！も、もう果てそうになってきやがった……あー、いい気持ちだッ」

辰造、悦に入っていやがる、湯上りのお紺の舌で、酒にはてった一物をこをせんと舐めたてられてはたまらない。

「あぐッ！むぐッ！ぺちゃぺちゃ……ちゅーッ、ごほッごほッ！あぐあぐッ」

お紺は夢中でなめていた。こんな人並み外れた大きなものをおしりの穴に突っこまれたら狐火のお紺がどれほど男まさりの女賊だとしても股倉が毀れてしまうことは必定だった。

お紺は必死の思いで、そうなる前に辰造に気をやらせてしまおうとして懸命になって舐めているのであった。

「あーっ、た、たまらねえ、たまらねえッ。も、もうどうにもこうにもこらえきれなくなってきたそうだッ……う、うッ！ふうーッ」

辰造はそろそろ終りに近くなってきたようで、腰をつっぱり足指を反らし

て、息があらくなってくる。

口の中の辰造のものの様子でお紺にもその気配がわかるので、いまひといきとお紺は唇と舌を激しく動かして辰造を責めたてるのだった。

「ふわッ！ッ！も、もうたまらねえッ。も、もう、い、いっちゃいそうだッ！ッ」

辰造、もう気持が良くて膝がガクガクしてくる。今にも噴き出しそうになる心地よさをぐっとこらえているものの、

「ちゅうちゅー。すっぱすっぱ、べろべろべろろッ」

と、お紺も必死に舌をからめて吸い上げながら辰造を追いあげようとするのだった。

その舌のぬめりが、ヌルリと辰造の亀の首の根元の周囲をゆっくりとひとまわりすると、

「うッ、いひーッ！」

今までこらえにこらえていたものがこのひと舐めで一度に堰を切っておとされた思いで、

「あーッ、うわーッ！うっうーッ！」と、けだもののような呻り声をあげ

ていってしまった。

辰造の噴出したものは、お紺の口の中いっぱいになり唇の端からあふれ出てきている。

「ふえーッ。というっかり気をゆるしたら、とっぱずしてしまいたい、やいお紺！いま俺の出したものは、みんな飲みこんでしまうんだぞッ」

辰造はお紺の口の中で果ててしまった照れくさを打ち消すように空いばりにいばってみせたが、たったいまの快感でがっくりするほど疲れていたのだった。

## 桂林寺の密謀

その翌日。しのめ宿にはど近い桂林寺の宿坊で、公儀隠密組頭井関半九郎は配下の者を呼び集めて旅の密議を開いていた。

辰造もその中の一人だったのは当然である。

「辰造ッ」

と、あらためて井関半九郎に声をかけられると、女買いの辰造め、ピリリと身体がふるえる思いだ。



「へ、へいッ！」

思わず頭を地にすりつける。

「で、何がわかった？」

「へ？」

「へ？……ではない。しのめ宿のひさご屋の土蔵の中で、狐火お紺の口から訊き出したことがあるはずだ」

「へ、へえッ」

「それを訊きたいのだ」

「そ、それが……」

辰造、思わず口もった。

「お紺を、そちに追わせたのは、あの女が前日に福知山藩の城代家老黒岩図書と逢っているからだ。黒岩図書はお紺に何かを預けている。それを奪い取ることがお前の仕事なのだぞ！ 稲葉家は遠からずお取りつぶしになるのだ。公儀隠密であるわれわれは廃絶になる大名家の如何なる復興の企てもつぶしてしまわねばならぬのだ！ 判ってか辰造！」

「へ、へいッ。わ、わかりましたッ！」

辰造は恐れきって頭を下げた。

井関半九郎は、丹波のおの篠塚の茶店で福知山藩の城下に早馬や早かどが行き交うのを見ていた武士だった。

「丹波福知山の稲葉家は、藩主の淡路守紀通どのが発狂自刃となれば当然稲葉家は断絶となることは明白だが……」

「えッ！ 稲葉家は断絶ですか」

「まず、そうだな。これまでの大公儀のなされ方をみても判ろう。まして丹波福知山の稲葉家は関ヶ原以来の外様大名だ、たかが四万五千石、おとりつぶしになるのは当然だろうて、ふっふッ」

井関半九郎は、公儀隠密の東ねをする人物らしい鷹揚さでそう云ったが、

「ところで辰造」

と、辰に向って訊ねた。

「へいッ」

辰造は、何を訊かれるかとビクビクしていやがる。

「……お紺を、だいぶ責めたようだな。」

「うへえッ！ そ、そんなことまで……ご存知なので……組頭さま！」

「ふふ、配下のしていることがいちいち判らなくて隠密組頭がつとまると思ふか！」

「へ、へいッ」

「で、お紺はどのあたりまで白状をし

たのかそれを聞かせてくれ。宿の者の話によると、そちはお紺を裸責めにして責め問うたそうじゃな……」

「へ、へい。おそれ入りやす……そんなことまでどうも……なにしろお紺のような強情な阿魔は、ああして素ッ裸に引っ剥いでから高手小手に縄をかけて……へ、へへッ、ぶっ叩きませんとなかなか吐きませんもので……へえ……」

「ふむ、で、吐いたか？」

「へ、へえ……そのう……」

と云ったが、辰造がお紺の口から知り得たことは、稲葉家城代家老の黒岩図書に頼まれて稲葉家復興資金としての隠し金三万両の絵図面を江戸の市谷堀端に屋敷のある稲葉家本家の稲葉山城守正知山城淀の城主 間詰石高十萬二千石に届けることになっていたのである。

「なに。稲葉家の本家にお家復興資金の隠し金の絵図面を届けるのだと？」

「は、はいッ お紺がさように申ししておりますので……」

「ふむ、そのようなことをさせてなるうか」



と、隠密組頭井関半九郎は云い放った。

狐火お紺は、鳥追い女に姿を変えて道を急いでいた。今朝、京の三条を發つて逢坂山を越えたところである。

「ああ、やっとうまく身をかくして大津から中仙道へ入ろうと思ったら、あのいやな十手持ちの男がいつまでもあとをつけてくるじゃないか。いやだねえ……」

お紺は、黒岩図書から預かった隠し金の絵図は小さくたたんで油紙に包みこみ着物の襟に縫いつけてあるのだった。

三条大橋を渡りはじめた頃からつかず離れず一人の男がお紺のあとを追ってくるのに気がついたのだ。

「ああ、やっぱり尾けてくる、あたしの持っているこの絵図がほしいんだね。あんな厭な奴にこの絵図面が渡せるものかい」

お紺はそう云って、絵図を縫いこんである襟元を抑えるのだった。

お紺を尾けていたのは、やっぱりあの人買いの辰造だった。稲葉家復興資





金の三万両の隠し金の絵図面を持ったお紺のあとを尾けているのだ。

「ふん。案の定だな。大津から東海道を中を行きやがるかと思っただが……こりゃあどうやら中仙道だな、ふふふ、中仙道を江戸へ行くとなりゃあ、この先は草津、守山、武佐、愛知川、高宮、鳥居本、番場、醒ヶ井とつづく野っ原道だ……へ、へへッ狐火街道を行ってくれるなあ、いい辻うらだぜ、これならいつでもあの絵図面をこっちの好みの所でいただけるというもんだ。さあ、どのあたりでまたお紺を裸にしてやろうかなあ……ふふふ……」

辰造は、お紺のあとを尾けながら、いつかのしのめ宿の土蔵のことを思い出してニタニタしていやがる。

## 淫情草津宿

辰造は、宿の入口の札の辻で、ふと立ち止って前後を見た。

右側に道があり、これは美濃街道が守山に通じている。

「……まさか、江戸へ行くはずの女

が、ここから美濃路に出るはずもなからうぜ。ええい、狐火のお紺は、狐火街道のほかは江戸へ行く道はねえはずだ……」

と、辰造の奴は、お紺の通る街道をごろ合わせのように決めやがったが、果してこれでお紺を捕えることができのかどうか。

「へ。この宿屋に入りやがったか」

辰造は、お紺が、たつみやと染めた宿ののれんをくぐるのを見て自分も同じ宿に泊る気持になっていやがった。

「おいねえさん。いま入った女の、となりの部屋をとってくれ」

辰造は例によって十手をちらつかせてお紺のとなり部屋に入った。

「へ、へへッ……さて今夜がたのしみなことだ……へ、へへへへッ」

辰造め、夕食前に一本つけさせて飲みながらお紺の白いおしりを思い出して禪の下ものを硬くしていやがるのだった。

「……え？絵図面をよこせだって？

……おほほッ、大笑いだねえ、そんなもの、あたしは持っていないよ、嘘だと思ったらあたしの身体中を調べ

てもらってもいいんですよ、なんならハダカになりましょうか？」

と、お紺が云ったのは、その夜人々が寝静まってから、お紺の部屋へ辰造が忍び込んで、

「おいお紺、おめえの持っている絵図面を俺によこせッよこさねえとこの前のように裸にしても取り上げるぜ、どうでえッ」

とおどかしたからだだった。

「親分さんはやさしいから、ほんとうのことを教えてあげる……」

と、お紺が云いだして、井関半九郎も辰造も知らなかった、たいへんなことを云い出したのはその夜のことだった。

「本当を云うとね。隠し金の絵図面は、用心のために三枚にわけられて、あたしのほかに稲葉藩の腰元二人が選ばれて、前後して江戸への旅に出ているんですよ……」

「な、なんだとッ？おめえのほかに二人の腰元が絵図を持てているというんだなッ」

辰造はそれを聞いてあわてた。



# 女獣飼育



拓植 浩二

「あなた、今井さんから電話よ……」

隣の部屋から妻、恭子の声がする。少し冷たそうな調子である。今井美保子から電話があると、いつもそうである。

とも理由の一つ。

長くて短い十八年関係した歲月だった。

\*

ちようど昼休み時である。美保子は神奈川県大和市のある塗装工場の総務課に勤めている。いま四十四歳で、体型も顔つきも、女優

の岩下志麻によく似た女だ。一年ほど前から肉体関係がなくなっているが、それは、お互いの住居が遠過ぎて、ぼくが通いきれなくな

ったこと、それにつれて、美保子に男が出来た気配が感じられたことなどで、思いきりよく手を切った。ぼくに新しい女が出来きたこ

「ねえ、あなた……、ちよつと来てくれない？」

「うーん、少し遠いんだよなあ。なんの用なの？」

「うん、いらしたら話すわ」

「じゃ、おまえの車で迎えに来きくれないか。行くから」

「はい。これからでもいい？」

「ああ、いいよ」

電話はそれで切れた。

約一時間後に、真つ赤な車が、わが家の前まで迎えに来た。ぼくはグレーの結城紬の着物、羽織で助手席へ坐った。

「恭ちゃん！ご主人を貸してね」

ぼくが乗った際に、美保子はぼくの妻に深々と頭をさげた。

妻は何も訊かなかった。何の用かわかっているからだ。

「ねえ、ときどき来てくれない？」

運転しながら、美保子が話しかけてきた。白いタートル・ネックのセーター。紺のスカートは、際にすわっているぼくのほうの側が十五センチほど割れていて、黒っぽいストッキングに包まれた太腿がチラついて見える。

「だって男がいるんだろう？」

「そんな人いないわよ！」

前方を見つめながら、ツンとした澄まし顔で言う。こんなセリフは、ぼくは聞きあきている。女が男に迫るとき、だれでも使うことばだから。

「元気そうだね」

「ええ、まあね。病氣したらおしまいじゃない？」

「そりや、そうだ！」

妻ならぬ女ながら、長年関係してくると、



たといえ、一、二年会わなくとも、その間、二人がどんな生活を送ろうと、会えば前の情愛がもどつてくる。

なつかしい団地群が見えてきた。四千世帯は住んでいると思われる県営住宅である。

「さあ、着いたわ」

団地前の駐車場から出て、美保子の住む3号棟へ向う。

六畳の部屋に新しいタンスが入っている。

それだけが変わっていた。

「ぼくの着るものをくれる？」

「さあ、どこにしまったかしら？」

女はそう言いながらも押入れの中から浴衣と単衣、それに帯を出してくれた。

「ついでだ、ぼくの着替えも手伝つてよ」

これまで、ずっと美保子にやらせていたことだ。丹前で、しつくり包んでくれた。

四月の昼下がり。真紅のカーペットを敷いた四畳半の居間は、部屋幅いっぱい南側の窓から春の陽が注いでいる。

隣の小さな台所からポットを持ってきて、

「久しぶりね。お茶出すわ！」

とすわった。

「ああ、それより、ウイスキーがいいな」

「ごめんなさい。買つてないのよ。ブランドデ一ならあるんだけど」

「うん、それでもいい」

美保子は立つと、脇の棚の前にかがむようにしてガラス戸を開けた。スカート下から女の後腿がわずか見える。そこへつい手がのびた。

女の全身がピクンと動き、ふり向いて、

「びつくりしたわ……」

と言いながら、カシユのびんとグラスを持つて、ぼくの脇にすわった。

「……突然だったから」

「相変わらずいろいろっぽいね」

「ありがとう。でも、もうオパンよ」

グラスに注いでくれる。

とうてい四十四には見えない。三十代前半という色香をただよわせている。

「一年ぶりだ。くちびるをくれる？」

そう言つて、ぼくは美保子を左からかかえ

ると、全身をぼくのおぐらの上にのせた。ぼくのくちびるをむさぼるように吸う。それに

つれて、ぼくの右手は、女のスカートの下にはいり、両太腿をまさくり、上へと手をのばしていった。

スカートのスリットがめくれ、太腿のさま

が露わに見えてきた。女の鼻から喘ぎ声が大きくもれ出した。ぼくはたまらなくなつてきて、女体を倒し、パンティ・ストッキングと

その下に着けているものを下におろした。女も協力するかのうように尻を心持ち上にあげてくれたので、すぐに脱がすことが出来た。

両脚を思いきり開かせるにはスカートが邪魔だ。ファスナーをおろしてスカートも脱が

せた。腿下に広がる光景は、まさにわがふるさとである。少し小麦色かつた肌。でも、

内股は白磁そのもの。その付根に、そんなに濃くない茂みがあり、縦線からは、わずかに

舌が二枚、うかがえた。

「今いい？」

耳元でささやくと、女はコクリとうなずく。膝を曲げさせ、思いきり両脚を開くと、その二枚の舌の間に、ぼくの物を静かに呑み込ませていった。

＊

「これまでのこと、からだ覚えてるのね。

スーとしたわ」

「だけど、続けられるかなあ」

「だいじょうぶよ。いいわ」

ぼくの物は、まだ女体に埋まつたままである。

「じゃ、これからは、ずっとぼくといつしよ

に行くということ？」

「ええ」



薄い眉毛。ちよつと切れ上がった目尻。細みのある。

「全部脱がせていいか？」

女はこつくりうなずいた。

白いセーターをたぐつて首から脱がせる。

肌色のシミーズも同じように。同じ色のワングリとしたブラも脱ぎした。生まれたままの姿の女体、いや成熟したヴィーナスが横たわっていた。

少しいかり肩の上体。背丈は一五〇をちよ

つと過ぎたくらい。乳首は野いちごのように小さい。びよこんと上を向いている。抱きはじめた当初は、その小さい、野いちごも小さな乳房の中に、すつぽりと埋まっていた。が、日ごと、ぼくにしやぶられるうちに、硬く、しつかりとした姿を現わすようになっていた。

女体というものは万事、男の思いのままにかたちづくられてくるものだ。

数年ほど前、ある夜、若尾文子がテレビ・ドラマに出ており、美保子は溜息をつきながら、

「女優つて、みんな、なんであんなふうに美しいのかしら」

と、ぼくを見つめて言った。

「そりやネ、女は男に見つめられるから美し

くなるんだ。それがなけりや、女だつて、路傍の石」さ。おまえだつてそうだよ」

「そうかもしれないわ。見られるつていいのね」

美保子はテレビを見ながら、ウワ言のように言った。

過去を思い、今、自分の眼下に女の裸体を置いたら、嗜虐的な思いに駆られてきた。

「な……、前に台所に置いたカミソリは、そのまま？」

「ええ……。また前みたいに剃るの？」

「ああ……。全部、見たいからな」

立つて隣りの台所へ行き、戸棚から安全カミソリを持ってきた。

＊

視姦ということばがある。真赤なカーペツ

トにせ体を横たえ、思いきり開脚させて、その間にわがからだを置く。そして茂みをいじり、中を開いて、目をひたすらに、そこに注ぐ。これが視姦でなくてなんであろう。

美保子は、心もち顔を左に向け、両眼を無理に閉ざすかのように左腕をのせている。左腋下が、ぼくの前に丸見えで、それが、また、たまらなくエロチックな感興をそそる。

すぐそばにある鏡台から、コールド・クリ

ームを取った。そして、茂みの個所、丘から両側に万遍なく、入念に塗った。

「思い出すわア……」

女はつぶやく。丘から剃っていく。そして

両側へ……。ここがむずかしい。左手の指で支えて剃っていく。この時のカミソリの動きが、女には愛撫に感じるらしく、のけぞつて、吐息をもらし始めた。それにつれ、女体が蠕動運動を始めたので、ぼくの両腕で、両尻をがっちり支えた。でないと、カミソリで大事な個所を傷つけることになるから。

剃ったあとが、また大変である。0・5ミリぐらいから1・2センチのヘアが粘膜の内に残っているの、これらを手指で一本一本取り除いていかないことには、女体の粘膜に針のようにささつて傷をつけるからなのだ。が、女のからだを思いきり開いて、時間をかけ、見つめ、取っていく。

男にとつて、こんなに楽しい作業はない。が、女にとつては、剃られる間に、自分は相手の性のオモチャであることを肌身で納得するようになる。両腿の緊張はなくなり、剃ったあとの点検の際には、自分から両脚を広げたまま、上にあげ、尻の部分まで念入りに調べさせてくれた。

「ずっと来てね。迎えに行くから。あたし、



やつぱり、あなたのものだわ」

「なつかしかつたよ。一年ぶりなものね」

ぼくは、また欲情をもよおしてきた。

しつかりと肌身を合わせた中で、

「今これから、おまえを強姦するよ……、

いいね」

と言うと、目をつむつたままうなずく。クルリとからだを裏返しにして、両膝をつき、腕を枕にしたかたちを取らせた。

このかたちは、女にとつては、いちばん恥ずかしい型。しかし、恥ずかしさが高じてくると、女の欲びに変わってくるから不思議だ。男にすべてを見られる。自由にされる。自分は何も出来ない。しかも、自分の型は、まさに「けもの」のスタイルである。でも、それを飲んで、ぼくの前に、美保子は、尻を高く上げ、両脚を半開きにして、女体のすべてを開いてくれた。

剃らないと、おおぶりの浅。そのものといつたかたちのものが、剃つた今は、ふくらみをたたえた蛤といった感じである。

そして、腰から尻、太腿にかけての曲線がいい。このライン。男が楽しむには、まさに、このスタイルに限る。

蛤の合わせ目を開く。重畳とした肉襞が開けて、サーモン・ピンクの女腔が、春の陽を

浴び、奥深く、中を見せた。そして、男を求めて、開き、すぼむ。これをながめることは、男の醍醐味というべきか。ぼくは、いつきに入れた。

女が剃られること、その上、犬のかたちにされて男の自由にされること。この二つで、以後、完全にその女体は自由になる。それが女の欲びに昇華していく。これが女体を飼育する楽しみである。

## \*

夜七時ごろ、美保子の車で自宅に帰った。台所にはいると、妻の恭子が、流しのほうを向いたままで、

「お食事はいいんでしょ？」

と言う。

「うん」

「何食べたの？」

「煮込みうどん！」

「ふーん？」

「それに、酒サカナに、トリの唐揚げと朝鮮

漬けや、ほかにもろもろだな」

「じゃ、うちで食べなくていいのね」

「いいや飲み直すよ」

「どうぞご自由に！」

妻、恭子は、榊原郁恵を少し大柄に、そし

て年増にした感じの女である。そういえば、ぼくの長女は榊原郁恵と同じ高校の出で、彼女の一年後輩だ。妻に対しては不満はない。女としての力はたつぷりある。ちようど美保子と正反対のタイプの女だろう。美保子は細みのおご、スリムなスタイルなのに対して、恭子は丸形の顔、大きい乳房。といつても、腹部はふとつていない。明けがた、左手が妻の下腹部に、なにげなく行くことがある。服らんでいる。

「溜つているよ。トイレに行つてきな……」妻はとび起き、トイレへ行き、戻ると、ぼくのからだにしがみついてくる。この太腿の感触の良さ！もう二十年以上抱いているのに、と思う。

が、男は「多穴」人種！これは、ぼくだけなんだろうか。一人の女だけでは満足できない。美しい妻を身辺に侍らせておいて、そのほかに、一人、二人と手をつけていく。美保子の子の場合は、ずいぶん長かった。ほかにもいる。

それだけに妻は感知している。相手はだれで、どこに住み、電話番号はということまで、いつのまにか知っている。しかし、ぼくは、妻を捨て、家をなげうって出て行くというつもりはない。それも妻は知っている。妻公



認の浮気というわけだ。

中、腋をなぞる。

だいぶグラスを重ねた。フラフラしながら、ベッドに身を横たえた。いつの間にか眠りに入っていた。と、左に妻がはいってきたので、

「剃つていい？」

目が覚めた。左手が無意識のうちに、女のか

言つた途端に、ぼくに抱きついて腕が、さらにぎゅつとしまつた。返事はない。

らだを求めて動いていた。裸身だつた。触れ

「いい？……」

ると、ワットばかりに上にのつてきた。ぼく

「やつたの？」

の左手は女の茂みの中を彷徨している。濃い！

「うん！」

そして熱い！思わず知らず、入れていた。硬

「いいわ！」

い棒を軸に、グラインドし、ピストンする。

それを支えるために、左手を。妻の尻に回す。

「ね、今日、どんなことしたの？」

返事をしなかつた。運動をくり返していた。

ドレッサーからコールド・クリームを取つて塗り始めた。そして洗面所から、日本カミソリを持つてきた。毎朝、使っているものである。西洋カミソリに比べて、肌当たりがやわらかいので、ぼくは好んで使っているが、これで、妻を剃毛しようと思つた。使いなれたカミソリである。

この日、三度目の行為である。

「美保子さんにやつたのと同じことをわたしにもやつていいわ」

が、茂みは濃い。ぼくは、すっかり目が覚めた。両膝で、女体の開脚姿態をしつかりと固定し、剃つていく。美保子に比べて、あまり使いこなしていなかつたので、両側が、まだ、処女そのもの。だいいち、花卉が出ていない。それだけ、美保子をはじめ、ほかの女を抱いてきたということ。妻だというのに！

「こいつッ！」

左手で尻をキュツとつねつた。と、蒸子は、さらに重くのしかかつてきた。前に美保子の剃毛のことを話したことがあつた。

自分の見ている前で夫を連れ出され、五、六時間のちに、堂々と連れ帰つてくる。妻としての妬嫉心が出てきたのだろう。妻も負けず、ぼくの背中をつねつた。ぼくが女体をなぞる。それにつれて、妻の手が、ぼくの背

を上下しはじめ、喘ぎ出した。とくに両側の粘膜のあたりを剃るほどに、首を激しく左右に振り、大声を出し始めた。そして達した。ゆつくりと点検する。そして、散らばっているヘアを取り除く。まさに童女である。昔、お医者さんごっこをやつた数人の女の子を思い出した。

「あの人もいいんでしょうが、わたしも忘れないでね。どんなにいじめてもいいから」

「うん！」

真白になつた肉丘の両側を撫ぜながら、妻の乳首をしやぶつた。

女をいじめるつて、どういふことなんだろうか……





# 廊画投稿



ルードヴィッヒ・蘭



マゾ女性を求めて

# 鞭とバイブ

## 雅代の巻

縛悦介

新幹線・熱海駅前で、稚代の姿を見つけた私は内心ホッとした。今回は、東京の友人夫婦の招待で上京することになり、途中駅である熱海で落ち合い、友人の別荘でSMプレイをすることになっていた。上京日程が決まったところで、その事を稚代に話すと、快よく「私がお迎えに行きますわ」というので、今回は稚代の言葉に甘えてしまった次第である。

稚代の運転するクルマで伊東へ向う。土曜日だったので道路はいく混んでいたが、運転が上手なせいかクルマはスイスイと泳ぐように走って行った。すでに別荘で待っていた友人のK氏夫妻は私と稚代の到着を大変歓

迎してくれて、K夫妻とは初対面の稚代の紹介もそこそこに四人で近くのレストランへ入り夕食を済ませた。雑談に花を咲かせたあと別荘へ戻り、入浴を済ませて別室で休んでいると、稚代がちよっと戸惑った表情で「あの困ったことになったわ。Kさんの奥さま、たった今、生理になってしまったそうよ。プレイは無理みたい、どうします？」という。よくあることだが、間の悪いとき

になったものだ。としばらく思索して、Kさんには、また次の機会にしましょう、と伝えた。プレイんできない以上、お世話になるのも申し訳ないような気がして、稚代を熱海まで送り返すことにした。もともと、稚代を今







回のプレイに交えるつもりはなかったのですが、どのみち返えさなくてはならなかったのである。私がよほどがっかりした様子をしていたのであろう、熱海への戻り道で、「せっかく伊東まで来たのにプレイができなくて残念でしょう。私でよかったらお相手致しましょうか？」

といいだした。稚代と私はそれまでに三、四回のプレイをしている。私がどんな気持ちで

いるかぐらひはすぐ判るのであろう。私に無  
論異存はない。むしろ、稚代の申し出に感謝  
の念すら浮んだ。そうと決まればコトは急げ  
である。私たちはモーテルの看板を求めてク  
ルマを走らせたが、どこも満員、いくら土曜  
日とはいえ、セックスに励む男女の多いのに  
他人事ならず驚かされた。ようやく空室を見  
つけて入室。関西のモーテルに比べて、狭い  
上に設備もお粗末であったが不足もいって

られない。先に稚代を入浴させ、SMプレイ  
の準備にかかった。プレイ用品はKさんのも  
のをあてにしていたのであまり多くは用意し  
ていない。ロープとパイプ、それに愛用の自  
家製革鞭ぐらいのものである。始めは緊縛プ  
レイからいくか、と考えているところへ稚代  
が浴室から出てきた。腰にタオルを巻いただ  
けのなりである。そのまま私の前の肘掛け椅  
子に坐ったが、なんとなく恥ずかしそうにし  
ている。私の責めを待っているのだろう。私  
は稚代を立たせ、腰のタオルを取り去った。

風呂上りの薄いピンクに染った体を眺めた  
あと、さっそく縛りに入った。両手は後手縛  
り、乳房の上下に二重三重に巻きつけて、別  
のロープを首の両側から乳房の前で結び、更  
に腰へ回して縛る。私が最も好きな縛り方だ  
がある。前面は十文字縛りの型になっており、  
乳房が張り切って形よく見える。乳房のやや  
たるみかけた中年の女性には向いている縛り  
方なのである。稚代の乳房もややたるみ気味  
であるが、乳房の上下をきつく縛ってあるの  
で形よく前方へ突きだしている。緊縛した稚  
代をベットね端へ前かがみに倒し、尻を高く  
突き出させた。稚代が好むムチ打ちのポーズ  
である。自家製の「九尾鞭」を取りだす。音  
のわりに痛さはそれほどでもなく、プレイ用



として使っているものだ。中年女に特有のぼつてりと肉のついた尻をめがけてムチを叩きつける。稚代は、ブルツと尻を震わせ、アアウムム……、と呻くが決して許しを請わない女である。続けざまに打ち据えていく。尻から背中へ、そしてまた尻へ。九尾鞭は唸りを生じ、ビシリーツ、ビシリーツと小気味よい音をたてた。鞭が当たるときに稚代は、アア、ウー、ウーと圧し殺した呻き声をあげるが、拒むことはせず、むしろ、次第に高まってくる恍惚感に酔い痴れたように豊満な尻を右へ左へ揺すっていた。三〇回ほど打ち据えてから、稚代を抱き起してみると、肩で大きく喘ぎながらも、恍惚の表情を浮べていた。上半身を私の胸へもたせかけて夢心地でいるらしい稚代の額に軽く口づけしてやり、少し休憩を与えた。荒い呼吸が収まりかけた頃を見計って稚代の顔を私の股間へ引き寄せた。先刻からの鞭打ちで一物はたくましく膨張している。稚代は目をつぶったままだが、私の意図を察して首を振って拒む様子を見せる。

それが単なるゼスチャーだと判っている私は、わざと乱暴に稚代の首の根を押さえ、鼻をつまんだり、頬を叩いたりして無理矢理に口を開かせると、口中深く押し込んだ。稚代は、アアウウツ、と呻きながらも、すでに口に含んでしまったものは任方ないとばかりにモグモグと口を動かすのだった。私は稚代にその動作を続けさせながら、片手を伸ばして肉花を探り、固くしこり始めた肉芽を指先でとらえた。途端に稚代はくぐもった悲鳴をあげて尻をブルブルと揺すった。そのまま稚代を絶頂へ追いこむつもりで指先の動きに拍車をかける。やがて、おびただしい粘液をあふらせた稚代が呻き声を一段と早めながら、駄々をこねるように全身を揺すり始めた。間もなく絶頂がやってくる。稚代の様子から、それを察知した私は生温く潤った肉花の中心深く指を突き入れていた。



稚代は久しぶりの満足感に酔ったまま瞼を閉じて横たわっていた。先刻の恍惚境からまだ醒めやらぬ表情である。その様子を一服しながら眺める私の脳裏には、今更のように女の貧欲さが去来するのだ。女性、特に性の欲びを知った中年女性のタフさ加減はなまじの男を圧倒するほどだ。彼女たちには、もう充分ということがない。味わえるものなら何度でも味わいたいというのが彼女たちの本音なのである。一度や二度の絶頂でプレイを止めてしまうと、むしろ、蛇の生殺しで、逆に恨





まれることすらある。稚代にしても同じだ。

恍惚境から醒め始めたところで今度はパイプ責めにすることにした。後手十文字縛りにしたままの稚代を仰向けに転がし、両脚を開いて、おびただしい吐液にまみれた肉芽に小型パイプの先端を当てがう。

「アアッ、また始めるの、そのパイプはきついよ。すぐイッてしましますわ」

ズルズルと滑るパイプの先端で肉芽を追いつめ、両足を一ツに縛って固定する。稚代はもうパイプから脱れるすべはない。スイッチを弱に入れてパイプ責めの仕上げにかかる。

稚代はパイプのスイッチが入った途端に体を右左に波打たせ、オオ、アアと高く低く叫んでいたが、たちまち登りつめる様子を見せ始めた。小さなパイプを肉花に挟ませただけの、いわば自虐にも似た責めだが、マゾに目覚めた稚代には充分すぎるほどの責めである。絶頂を目前にした稚代に私の鞭が容赦なくさくれつした。鞭とパイプ……、女体の内と外から加えられる強烈な加虐に稚代は、

「いいーッ、いいーッ……」

と、はつきり絶頂を伝える言葉を何度も口走って豊満な体をビクン、ビクンとケイレンさせ、ウムムッ、と唸ったかと思うと、ガクンと力を抜いた。

友人夫婦とのSMプレイが果たせず、思わぬプレイを稚代とすることになったが、私の嗜虐心も充分満足させられたのである。ところが、再会を

約して稚代を熱海まで送り、Kさんの別荘へ戻ってみると、生理中の妻でもよかったらプレイを試みないか、という話なのである。次回はその時の様子も報告したい。





悦介 縛 ♣ 姦 女 ♣ 写









## 女子プロレスラー

## “ファニー”

定岡拓二

痩せすぎでガリガリの女は魅力がない。性的な魅力に欠けているし、第一、私のような男に対して、圧迫感というか、肉体的な迫力に乏しい。

やはりなんといっても、肥った女に限る。それも、人並みはずれた大柄な女なら言うことではない……。そう、私は大女に憧れているのだ。

その夜、私は地方巡業で当地へやって来た女子プロレスの一行を見かけた。マイクロバスから降りて来た彼女らを見て、私は思わず深い嘆息をついたほどだ。

それは、猛々しいまでの大きな体、盛りあがった筋肉に対する、私の畏怖と羨望の念から出たものだ。

私らが三、四人で東になってかかっても、きっと彼女らは、びくともしないだろう。逆に、その逞しい腕をひと振りされたら、私らは打ちのめされることだろう。

そんな事を想像していると、つい体がゾクゾクとしてきて、フワーツと宙に浮いたような気持ちになり、我を忘れてしまうのだ。

テレビでは見たことがあるが、実際の格闘場面はまだ見たことがなくて、以前から一度でいいから、リングサイドで観戦してみたい

と思っていたのである。

この地の体育館で、翌日から三日間にわたって試合が行なわれることになっている。

街を歩けば、いたる所に試合のポスターが貼ってある。拳を握って、両の脚を開いて、大きなお尻をいくらか落とし気味にして、さア来いとばかりに構えたポーズを見ているとまるで自分が組み伏せられて、やつつけられるような錯覚に陥るのだ。

太い腕で体を持ち上げられ、ドーンと投げ落とされるような気持ちになって、私は目くらむほどに強い衝撃を受けた。その原色で彩られたポスターにである。投げ捨てられて痛くて、いている私の顔を、さらにあのお厚く硬いリングシューズで、イヤというほど踏みつけるのだ。あげくの果てが、あの肉の塊りであるムキムキしたお尻を顔に乗せて、ギリギリとひねくるのである。

汗の匂いに混じって、女性特有の体の匂いが鼻にツーンときて、私は得もいわれぬ恍惚感に酔い痴れ、お尻の割れ目の中で、苦痛の涙でくしゃくしゃになった顔をひきつらせるのだ。

もしもし……。不意に背後から声をかけられて、私はハッと我に返った。仄暗い裏街の電柱に貼ってある、女子プロレス興業のポス



ターに見とれていた私は、何か自分が悪いことでもしていたようにブルツと怯えた。しかし、その声の主を見てみると、それはなんとポスターの中で戦うポーズをとっている、女子プロレスの星、ファニー桃倉ではないか。二、三度、ポスターの顔を見くらべてみたが確かに間違いない。あの、泣く子も黙ると言われている必殺技、*空中デスマスク*をつくったファニー桃倉である。

*空中デスマスク*というのは、後ろから両手をまわして首を締めつけ、そのままの形でグルグルとお互いに回り、これぞというところで空中に放り投げて、マットの上に落下させる技である。放り投げられて宙に舞っている間、そのレスラーは失神して、まるで死人が宙を泳いでいるような恰好なので、*空中デスマスク*と名づけられた。

この技は、女子プロレスラー数ある中で、ファニー桃倉だけにしか出来ない技なのだ。他のレスラーは、コツを知らないから、下手をすると首を締めすぎて、相手は死んでしまう。

ファニー桃倉は、まるで宝塚ガールのようなきらびやかな衣裳を身にまといっている。おとぎの国のお姫様のようなエレガントな身づくろいだ。私は声をかけられたものの、その

人がファニー桃倉だとわかると、上がってしまつて、体がポーとうわずつて、何んと返事をしたらよいのか、オドオドするばかりであった。試合、見たいんでしょう？ 艶っぽく笑いながら、ファニー桃倉は私に訊ねた。私は嬉しくなつて、ソワソワしながら、それでも恐るおそる、……え、ええ、ハイ……。と答えると、あとはもう体がカーツと熱くなつて視線をどこへ向けたらよいのか、迷つてしまつた。まるで、偉い先生を前にした生徒のようになり、私はかしこまつて、ファニー桃倉のそばで小さくなつていくだけだ。

ポスターで見るよりも、実物はもっと大柄で美人だ。一八〇センチは優に越すと思われる。相撲とりも青くなるぐらいの体格に、私は自分の体がもっと小さくなったような気持ちにさせられて、劣等感はあるばかりである。これ、リングサイドの切符、ぜひ見に来てね待っているわよ。骨太の大きな手でチケットを渡されると、私はガタガタと体が揺れ、手指が小刻みにふるえるのだった。（憧れのファニー桃倉の試合が見られる、それもリングサイドで……）私はもう嬉しくなつて、子供のようにはしゃぎまわつた。

（ファニー桃倉が、私だけに内緒で、三日間通しの切符をくれたんだ。私は、彼女の氣に

入られたんだ……）そう思うと、もうただ感慨無量だった。あの勇ましい、四、五人の男ぐらい投げ飛ばしてしまふ逞ましい彼女の戦いぶりを、リングのそばから見上げることが出来るのだ。

その夜は、ファニー桃倉の勇姿が眼の裏にチラついて、なかなか眼れなかった。ファニーの太く長い脚が、私の醜い顔、体を蹴る。蹴飛ばされて、苦通に歪んだ私の口の中に、ファニーは指を突っこんで、大きく開くと、そのまま体を持ち上げて、ブラブラ揺るのさだ。歯をむき出して、私は家畜さながらに、ただき、喚くだけで、ファニーの玩具になつていく。

宙ぶらりんになりながら、私はファニーの胸元を垣間見た。ふくよかに成熟している乳房の上のふくらみがはみ出て、今にもソックリそのまま、ポロンとこぼれてきそうだ。大きな乳房のわりには、たるみが全くなく、キユツと引き締まっている。押すとはじき飛ばされそうなほど、それは弾力性に富んでいる。するといきなりファニーは、私の口の中に指を入れたまま、顔を胸に強く押し当てた。ウグツと息がつまつて、ピチピチした乳房が顔を圧迫する。たまらない女の体臭が、私の鼻を刺激する。もっと強く、ファニーの体に



触れさせて！私は宙に浮いた足をバタバタさせて、むせかえるファニーの体臭に酔い痴れていた。つづいてファニーは私を押し倒すと

手荒く着ているものを舐めた。瘦せぎすの私は、自信のない体を露出させられて、面くらうばかりである。最後に残っていたブリーフをビリッと引きちぎると、ファニーは侮蔑したような笑いを浮かべて、ジーと私の局部を凝視めた。性器の大きさに自信のない私は、ファニーに凝視められて、ますます委縮してしまうのであった。ファニーは、まるで虫ケラでも扱うように、私のかしこまっている性器を、ピンと指ではじくと、ケラケラ、カラカラと大きな声で笑い出した。私はもう恥ずかしくて、その場から姿を消してしまいたいほどだった。ファニーの笑いが、私の胸に大きく響いて、身のちぢむ思いである。

その時、私は自分がすっかりファニーにかしづいて、自分に気がついたのである。なんと素晴らしいことだろう。この醜い私を可愛がってくれるのが、こともあろうに、男たちつまりはマゾヒストたちの憧れの的である、女子プロレスの輝く星、ファニー桃倉であるとは……。私は自分の、あまりに恵まれた環境にかえって戦々おぼえたほどである。ファニー、私のお姫さま、ファニー、私の素

敵なお姉さま……。ファ、ニ、……。いつか知らずか、私は深い眠りに陥っていた――

＊

＊

試合場は大変な人の数である。二千人も入れば満員になる体育館に入りきれず、溢れ出る者までいるほどだ。観客のほとんど、九十パーセント以上が男性客である。下は小学一年生ぐらいから、上は七十過ぎの老人まで、多種多様で目がくらむほどだ。だからパラパラとしかいない女性客が一段と光って見える。

歓声がひととき大きく鳴り響くと、控え室から次々と選手たちが登場し、リングに上がった。中でもやはり、ファニー桃倉に対する声援は、他の選手のそれとは違って、われんばかりの絶叫に近いものである。高々と手を上げるファニーの勇姿を、私はウットリとした、心地よい気分で眺めた。時々リングで構えを見せると、私はゾクゾクしてファニーに飛びつきたくなるほどだった。

前座が終わって、いよいよファニーの出場である。拳を握りしめて、口をキッと結び、あの綺麗な瞳をランランと輝かせて、今にも暴れそうな気配である。戦う相手は、ファニーよりずっと小柄で、それほど肉づきもよくない。ダイナマイト・マリーとリングネームだ

けはいかめしいが、それほど強そうには見えない。私の嫌いなタイプである、痩せた女の部類に入るレスラーだ。そして、さっそくゴングが鳴る前に、ファニーがいきなり脚でコリーの顔を蹴った。もんどりうって倒れるコリー。私はジッとファニーの筋肉質の脚に見とれていた。まるで私は自分が蹴られてもしたように、身をすくめるのだった。

なんと、マットに仰向けに倒れたまま、マリーは立ち上がろうとしない。いや、体をケイレンさせて、すでに失神状態なのである。担架が運ばれて、すみやかにマリーは乗せられて退場した。

さて、みなさま。ご覧のように、ダイナマイト・マリーはノックアウトされました。これではせっかくの試合が成立しません。そこで……。リングアナウンサーがマイクを握って、観客に説明している。そこで……。これではお客さまに申しわけありませんので、スベシャル・ゲームとしまして、これからお客さまの中から一人出てください。出場者は、ファニー桃倉と戦っていただきます。出場者は、ファニー桃倉が指名いたします……。アナウンサーの説明が終わると、思わぬハプニングに、観客はざわめき、誰だ、誰だとばかりに殺気だった。ファニーが含み笑いをしながら人さ



し指を立て、思わせぶりに二、三回指を天に向けて回すと、観客は息を殺して、ファニーの指先に注目した。ふいっと指がさされた。ワーツという観客のどよめきが館内にこだまして、私はそれが、自分自身に向けられている声だと気がつくまでに、かなりの時間を要した。ファニーの指は私をさしていたのである。しばらくボーとなって、わけがわからなくなっていた。

そのうち、ガードマンらしき制服に身を包んだ男が二人、私の腕をガッチリとつかむと私をリングの中に入れた。ふるえる私を前に巨大な女、ファニー桃倉が威風堂々と立ちただかっていた。私はすっかりナメられていた。ファニーは始めから私をいたぶるつもりで、試合の切符をくれたのだ。私のマゾヒズムをファニーは始めから知っていたのである。サディストである彼女の、私は格好の獲物だったのだ。いきなり私は、頭をファニーの股倉で挟まれた。首に彼女の内腿が触れて、それが強く締まるので、息もたえだえだ。首の後ろに、ちょうどファニーの局部があり、それがジットリと濡れていて、ぬめぬめとしてなんともない気持ちよさだ。びくびくと、ファニーの局部がふるえているのが、首の後ろから伝わってくる。ガンバレよーっ、チビ

ーっ！とか、可哀そうーっ！という声は、どちらかといえば私に対して同情的だが、私が戦慄をおぼえたのは、ファニー、もつといじめてやれーっ、半殺しにしてやれーっ。とか小便でもひっかけてやれよ、体中くそまみれにしてやるんだ、ファニー！という声だった。私も実際に、そんなふうにされたら、さぞ気持ちよいだろうな、なんぞと思ったものである。

私がファニーにいたぶられているところを二千人以上の人が見ているのだ。好奇のまなざしで、私の恥辱の場面を凝視めているのである。そんな四千もの眼を意識すると、私は異常に体が高ぶり、もつと恥ずかしいポーズを見て欲しい、という望みまで持つようになってくるのだった。ワーワーとさわめく観客の声が私を刺激して、よけいに、私をピエロの気分にするのだった。（おまえは卑屈になって、みんなに笑われるんだ。おまえのそのみつともない動きっぷりが、みんなはおかしくてしょうがないのだ。もつとみんなを笑わせるんだ。もつとおどけるんだ）頭の奥の方から、そんな誰の言葉ともつかない声が聞こえてきて、私をばげますのだ。このオーっ！私があんまりポケットとしているもので、腹を立てたファニーが怒り出し、私の頭を股に挟

んだまま、腰をつかんで、そのまま上に下半身を持ち上げた。このままファニーが後へ倒れれば、私は一巻の終わりである。頭は割れて、即死だろう。だがファニーは私をすぐに死なせなかった。もつともつといためつくして、とことんいたぶったあげく、私をどうにかするのだろう。ファニーは私のズボンをずり下げると、お尻を丸出しにして、観客に見せるのである。そして私のお尻に、平手打ちをくらわせるのである。ピシャッ、ピッシャン、と大きな音がするたびに、観客はみな拍手、拍手の大喝采なのだ。お尻が赤くなり、ヒリヒリとミミズ腫れのような痛みが走る。打たれるたびに、私が、ヒーツ、痛いよーっ！と泣き喚くと、観客は笑いながら手をたたくのだった。私は馬になって、ファニーを乗せると、ハイハイしながらリングの中を歩いた。あまりにもファニーの体が大きくて重いので、ちよつと歩くと私の馬はつぶれてしまう。それでも私は、力をふりしぼってファニーを乗せるのに懸命だ。額や首すじから汗がしたたり、途中で何度も失神しそうになったほどだ。ファニーのお尻がむっくりとしていて、背中をやさしく圧迫する。どんなに辛くとも、私にはやさしいという表現がぴったり当てはまる。私の人間馬に乗りながら、ファ



ニーは時々おナラをする。そのたびに、まわりは大爆笑の渦だ。そして、私の背中から手を口の方へまわして、その中に指を突っこみギューッと口を拡げてみせるのだ。そんな珍奇な光景を見て、観客はせせら笑うのである。私の惨めな姿を見てである。私は疲労と苦痛のために、体が硬くなって、一步動くのもやっとなという状態になって来た。こら、もった動かないか！ファニーの脚が私の下腹を打つ。あまりの痛さに私は、手足を折って、その場についてしまった。観客の顔がくるくる回り始め、声が、私に対する罵声が、少しずつ耳から遠ざかっていく。ファニーの重みも、もはや感じなくなって、私の意識は薄らいでいった――

＊ ＊

シーンと静まり返った館内。気がついて見ると、そこには誰一人として残っていないものはいない。まるで嵐のあとの静けさだ。私はとても虚しい気分になって、しばらくうつ伏したまま、じっとしていた。私はマゾヒストになって、それを衆人の目にさらした。その時は私も興奮していて、とても気持がよい。ところがどうだろう、こうして静かに、

一人残らず去って行ったリングを見てみるとまるで何事もなかったかのような空虚な空気が満ちている。マゾヒズムとは、こういうものかも知れない。私はつくづくそう思っていて、やっとなと体を起こした。お尻に手をさしのべると、傷あとが生々しく残っていて、ヒリヒリと痛い。その痛みから、先ほどのファニーの馬乗りのことを思い出した。ファニーの汗臭い体の匂いが、マットの上に残っている。私はたまりかねて、四つん這いになりながら、マットをクンクンと嗅いで、匂いの残っているあたりを、舌でペロペロと舐めるのだった。そして私は一人芝居を演じたのである。ハイハイをして馬になり、汗を流しながら、誰もいないマットの上を走るのだった。

「ファニー、私のファニーはどこへ行ってしまったの……」頼りなげな声には、力強さが失くなっている。幻のファニーを追って、私はリングの中を、いつまでも四つん這いになって走るのだった。ファニーがまた、自分の人間馬に乗ってくれることを夢見ながら、いつまでも……。

## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

東京都中央区銀座1の22の10

銀座ストークビル・5F

風俗資料保存会



## レスポスの園 2

### 結城紀子

お手伝いの多恵さんは、応接間のピアノの椅子に跨って恍惚とした表情で下腹部を動かしている私を見つけて、どんな気持だったでしょうか。私は、すぐ傍に多恵さんが近寄ってくるまで少しも気がつきませんでした。

「お嬢さん」と声をかけられた私は、一瞬心臓が止まるほどビクビクして、同時に子供心に大変なところを見られてしまったという恐ろしき身体の不快感がしました。もちろん、小学校一年の女の子のオナニーですから、「オナニーしようとして」したわけのものではありませんし、着衣もそのままでしたから、それほどあわてる必要もなかったのでしょうが、やはり、何かうしろめたい気持はありました。しばらくそのまま動けずにおりますと、多恵さんは私を抱きかかえて椅子から降ろし、ソファに座らせてから、「お嬢さん、いけませんよ。お椅子に跨ってここのところ、をいじっては」

そう言いながら、自分の黒のタイトスカ

トの上から、ソノ部分を押さえるようにして私の眼をみつめました。お多恵さんの黒のタイトスカートは、いわば、お伝いさんとしての制服のようなものです。そのタイトのピンと張った腰のあたりが、何とも言えない肉づきの良さを表現していた記憶が、今でもよく思い出されます。多恵さんは、その時、確か十八才だったと思います。その年令の少女にしては大柄で健康的な、肉の堅くしまった少女でした。後年、私自身、好んで黒のタイトスカートを着ることといい、私の好みが、比較的胸の小さい、固肥りで腰骨の張った女性に向っていったのも、この多恵さんの印象が残っていたのかも知れません。ともあれ、その時、七才の私に向かって、多恵さんは実に大膽なことを言ったのです。

「お嬢さん、女のコ、こはね、とても大切なところなんだから、自分でいじったり、今みたいに何かにこすりつけたりしてはいけませんよ。」その言葉の意味が私に判ろう筈はありません。私自身、そのことが禁断の行為であることをおぼろに察しながら、多恵さんのタイトスカートの曲線の美しさのみが、記憶に残りました。このあと四年間、私は多恵さんが結婚で家を去るまで、母親以上にベタベタと彼女のあとばかり追い、多恵さんの言う

ことは何でもきく子になっていました。あるいは無意識に彼女に恋していたのかなと、今になって思うのです。ピアノの椅子でのオナニーも、多恵さんに注意されたことでピタリとやめていました。お風呂もいっしょに入浴し、それはそれは、多恵さんなしでは夜も日も明けぬ有様でした。ですから、多恵さんが去る時は、半狂乱のように泣き続けていたそうです。この多恵さんとのこと以外、私の幼年期には特別のことは何もありませんでした。ごく普通の少女でした。昭和三十五年、私は小学校六年になっていました。父の会社が一番発展していた頃で、大田区の家も新築し、かなりの贅沢をさせてもらっていました。この年の夏、私にとってショッキングなことが起こったのです。（つづく）





## — 女人切腹秘話 —

# 愛怨睦みの腹切り

篠崎 陽

の前庭を、昼のように照らしています。

「では、めでたくお開きとして、われらは退散いたす。後は睦まじう契られい。はは、いや、めでたい。めでたい。」

仲人役の夫妻が上機嫌で去ると、後は真白に延べられた新床の前に、花簪花嫁の二人のみです。花簪の右京の手が、つと花嫁を引きよせ二人は新床の上に倒れこみます。アッと微かに花嫁が声をもらしたのは、す早く右京の手が襟もとへ滑りこみ、ふくよかな乳房をつかんだからでしょうか。艶めかしい気が部屋うちに漂ってきます。燭台の灯がゆらいでもつれ合う男女の影を写します。夕方に降りやんだ雪が、折からの月に映えて初夜の寝間

と、さくさく、雪を踏む足音がして築山のかげから人影が現われました。お高僧頭巾に面を包み、すらりとした姿が月明りを背にうかんで妖しの精が迷い出たかと思うばかりです。ほのかに灯のともる寝間の方をじっと見ていた人影は、さらりと着衣を脱ぎ、ふわりと雪の上に広げました。白雪に紫矢がすりの模様が鮮やかです。人影はその上に静かに座りました。脱ぎ落した下の衣服は白一色。白雪を照らす月光の下に、さながら雪の精の姿です。頭巾を解くと島田に結った女の顔が現われます。

「右京さま。いとしい奴と仰せられしは一時

## 切腹の語彙

三富浩生

切腹という語はもともと腹ヲ切ルの漢文体から、日本語の熟語となったのであろうか。播磨風土記にも女神の切腹が記録されているが、その女神が腹を剖いて身を投じた沼を腹剖沼と伝承されている。義経記にも忠信自害とあり、忠信切腹とは書いていない。忠信の思いを記すところも、今ハ腹切ラバヤとあり今ハ切腹セバヤとは書かないのである。

いつの間にか切腹という語が定着し、武士が自殺・自害・自刃というような語でその最期を記録されるときは、切腹と同義に解される。太平記あたりになると、腹切ッテとかカキ切ッテなどの記述が多出し、そこへ一文字とか十文字とかいう腹の切りようが加わり、腹一文字ニカキ切ル・腹十文字ニカキ切ルなど、せいぜい勇ましげに表現されて来る。

切腹という語が出来てくると、切腹とは、みずから刃を執っておのが腹を一文字あるいは十文字に断ち切つて死ぬこと、を意味してくる。ところが江戸時代になると、戦国時代までの切腹のように、自発的に、敗戦とか、恥を免れるとかの意志で切腹する、あるいは



の戯れ言にございましたか。無垢の処女の肌を  
もて遊ばれしも、この唇をお吸いなされた  
のも、そして、女の秘め所も露わに恥ずかし  
い姿で契り合うたも、みな殿ごのお慰みに過  
ぎませなんだか。この綾は右京さまの奥方に  
なぞと望みはいたしませぬ。綾は名も無き浪  
人の娘。今宵お向え遊ばす弓江さまは八百石  
のお旗本の御息女。身分の程はわきまえてお  
ります。それを、殿のお胤を宿した綾を、  
どこぞの小者と不義に及んだか、いたずら者  
めと、つれないお言葉。綾はただただ右京さ  
まの熱う強い男のしるしに身を燃やし、女の  
悦びに身も心もささげて参ったものを……。

弓江さまをお向えの邪魔とは申せ、お怨みに  
存じます。綾も武士の娘。不義者の汚名を  
負い、仮の遊び女の思いを懐いて永らえとう  
はございませぬ。今宵、新枕のお席をうかが  
いながら、右京さまが弓江さまを貫かる時、  
綾も怨みの念いをこめて、綾の女の生命の在  
り所を貫きます。弓江さまの喜悦のあえぎ  
に合わせ、この身もあえぎもだえします。お  
いつくしみにうちふるえたこの身を、存分に  
切り割いて呻きふるえまする。」

何かにつかれたようにつぶやきながら、綾  
女は細帯を解き腰紐をゆるめ、真白な着衣の  
前を押し開き、乳房から臍の下までむき出し

ていきます。白い肌が月と雪に映えて輝き匂  
います。

その時、右京もまた花嫁の寝召しの細紐を  
ほどいていました。老女から枕絵を手ほどき  
に、男女の契りのさまを教えられて来たとは  
いえ、男の手が寝召しにかかるたびくつと身  
がふるえ、かつと体が熱くなるのを弓江はど  
うしようありません。白無垢の前がはだけ  
られ、すつと夜の気が乳房に流れるのを覚え  
ると、袖で面をかくし体を固く締め息を弾ま  
せるのみです。遊びなれた右京も無垢の処女  
のやわ肌にも男心がたぎります。腰を包む白絹  
の湯もじを一気にひきめくると、円ろやかな  
腹が息づきにつれ微かにゆれ、愛らしい臍の  
凹みから続く下腹にほんのりしたかげりがの  
ぞきます。無意識に脚をひたて合わせ秘所を  
隠そうとするのを、右京の手が阻み、その間  
に滑りこみます。遊び慣れた巧みな指遣いに  
弓江の体が弛み、ほころびた唇から微かにあ  
えぎがもれ出すと、右京は弓江の脚を押し広  
げ、体を割りこみます。灯影に暗く沈んだ秘  
境の谷に春泉の湧くのを見定め、右京は手綱  
をしめられて猛りたった名馬にも似た、己が  
男の生命を谷間に進めました。あ、あーっと、  
弓江が呻声をもらしかかるのを右京の唇がふ  
さいで、後は聞えませぬ。

城将の場合のように、家臣の生命に代えて切  
腹する、というような例よりも、平和なだけ  
に、刑罰としての切腹が主体になってくる。

もつとも、刑罰としての切腹は戦国期にも  
あり、上杉氏の家法には、最高の罰として士  
籍剝奪・帯刀禁があり、その次が切腹で、従  
って武士にとって切腹刑は名誉を保持するも  
のであったと云える。しかし江戸時代には同  
時に殉死のための切腹が寛文の禁令まで行な  
われ、追腹の語で呼ばれたが、これには、忠  
誠の士であるから苦痛を与えまいとして早め  
に介錯が加えられ、しまいには刑罰でも、罪  
ある武士は腹に刃を加えることなく、腹切刀  
を執ろうとするところを、首を打たれてしま  
う、そういう刑罰としての切腹なる語が発生  
して来る。つまり切腹とは、江戸時代の武士  
に課する刑罰の一つ、ということになり、本  
当に腹を切らない場合も出来てくる。

漢文の腹ヲ屠ル・腹ヲ割クから出たのであ  
ろうが、屠腹・割腹は切腹よりも強く、本当  
に腹を切ることを意味する。日本語的な腹切  
りなども形式でなく本当に腹を切ることを意  
味する。忠臣蔵の判官切腹・勘平腹切の区別  
などその意味合いではあるまいか。屠腹はわ  
りに出典も古いが、割腹は昔の文献より近代  
の新聞記事見出しによく用いられた。初出は



この時庭さきの綾女も、白無垢の帯紐を解き捨て、広く肌をさらし出していました。湯

もじもゆるめ、ちらりとかげりののぞく際ま

で十分に腹をむき出した綾女の右手には、月光に冷く輝く短刀が既に握られています。ゆつくりと下腹から臍の回りをなでてゆく左手が、おのずとかげりの方へ下がってゆき、綾女の口からもあえぎがもれてきます。

「ああ……せつのうございます。綾の心は怨みに満ちておりますのに、綾の体は……綾の女は、未だに右京さまを慕うてこのようにぬれております。綾は哀しうございます。怨みながら怨みきれぬ女の性の憐れさを、右京さまはお解りになれましょうか。無念にございます……」

幾度も熱い右京の生命を受け入れた己が女を探り、身もだえる綾女の影が雪に写ってゆれ動きます。一枚の障子を境に二人の女が共に女の血汐のたぎりに燃えています。しかし、内の一人は熱い肉の刃に、外の一人は冷い鋼の刃に、それぞれ女の体を貫かれて、悦びと痛苦に我を忘れつつ、生と死の両極に向うのです。

弓江の脚をかかえ上げ、右京がずいと腰をよせると

「ア、アッ……あ、あ、あーっ」

初めて向える男に思わず弓江が体を反らし体をずり上げたとき、

「うっ、むう……」

庭先でも呻声が起りました。背を円めて突っ伏した綾女がそろりと体を起すと、左脇腹に深々と短刀が突き通っています。両の手で短刀をしつかり握った綾女は

「ウッ、むっ、思い出されます。初めてお情けを受けしとき、熱うたくましい右京さまのしるしに貫かれ、腹の奥から火の矢が頭の頂きまで走りました。今、刃を腹に貫きしとき、同じ心地がいたしました。ア、アッ、む、むっ、じわりと重苦しいしびれが腹の奥底から湧いて参ります。もっと深う刃を、え、えいっ、ウ、むーん、綾の女の生命の在り所へ、ずっと痛苦が響いて、アッ、綾の女が燃えます。う、うれしい……刃が右京さまの男さながらに綾の女をうずかせます。この短刀は右京さまの男。こう握って右京さまのお手にて、いつくしまれたこの腹を、存分に切って見せます。右京さまが綾をお見捨てなされても、綾は右京さまを離しませぬ。腹かき割って綾の女をさらけ出し、お情けにうちふるえお胤を宿した女の生命を、怨念こめたこの刃で貫き、無念の思いをはらします。右京さまに捨てられた綾の女はもはや無用の

明治初年の福沢諭吉説もあるが幕末桜田変を報じた大橋訥庵の書信に割腹の語あり、この方が初出かも知れない。





もの。存分に切り割くが仕末の仕方。怨みながら怨みきれぬこの口惜しさを、痛苦にのたうち回り、もだえ狂い、もだえ死にいたすが綾の一念。さればこそ女だてらに腹切つて……腹深々と貫きしこの刃を引回して、う、う、うっ、何の力一杯……え、えいっ、げえっ、切、切れた、腹が割けて、むうっ、目がくらんで、ええ不甲斐ない。く、くっ、ぞりぞりと肉を割く手ごたえして、生温いものが腹を伝えます。右京さまのお情け初めて頂いたときも、このような血汐が、アッ、うむ。右京さまも今頃、弓江さまを……私も腹を貫きこのように、むっ、苦しみもだえて果てます。右京さまの熱い男のしるし受けし心地をしかと抱いて……ウ、ウ、刃が腹をえぐると綾の女がうずきます。痛苦の中に睦みごとの心地いたす……不思議の思い、こ、これが女の切腹の味わいか。ま、まだ綾の腹は僅かに切れしのみ……」

あえぐ綾女の太ももの間に、ぬめぬめと光る細わたがぞろりと流れ出て、ひくひくとうごめいています。

「あ、綾は、十文字腹いたし、このように右京さまの精を頂きし腹中のもの、さらけ出して、ございます。綾の魂の在り所も、この通り……」

綾女はずぶと腹に手をつっこむと、はらわたを更に引きずり出します。

「う、う、げえっ、綾の体が粉々に砕け散ります。くうっ……」

蒼黒い太わたをつかみ、身もだえる綾女の周りは、飛び散った血汐に赤い花が散り敷いたようです。

「この刃を、右京さまのしるしと思い、綾は睦みながら果てます」

べつとりと血脂にまみれた短刀を己が股間に向け、どつとのしかかるように綾女は身を伏せました。

「きえーっ、う、うれしい……強い右京さま

の生命が、綾の女をえぐって……もう、目が

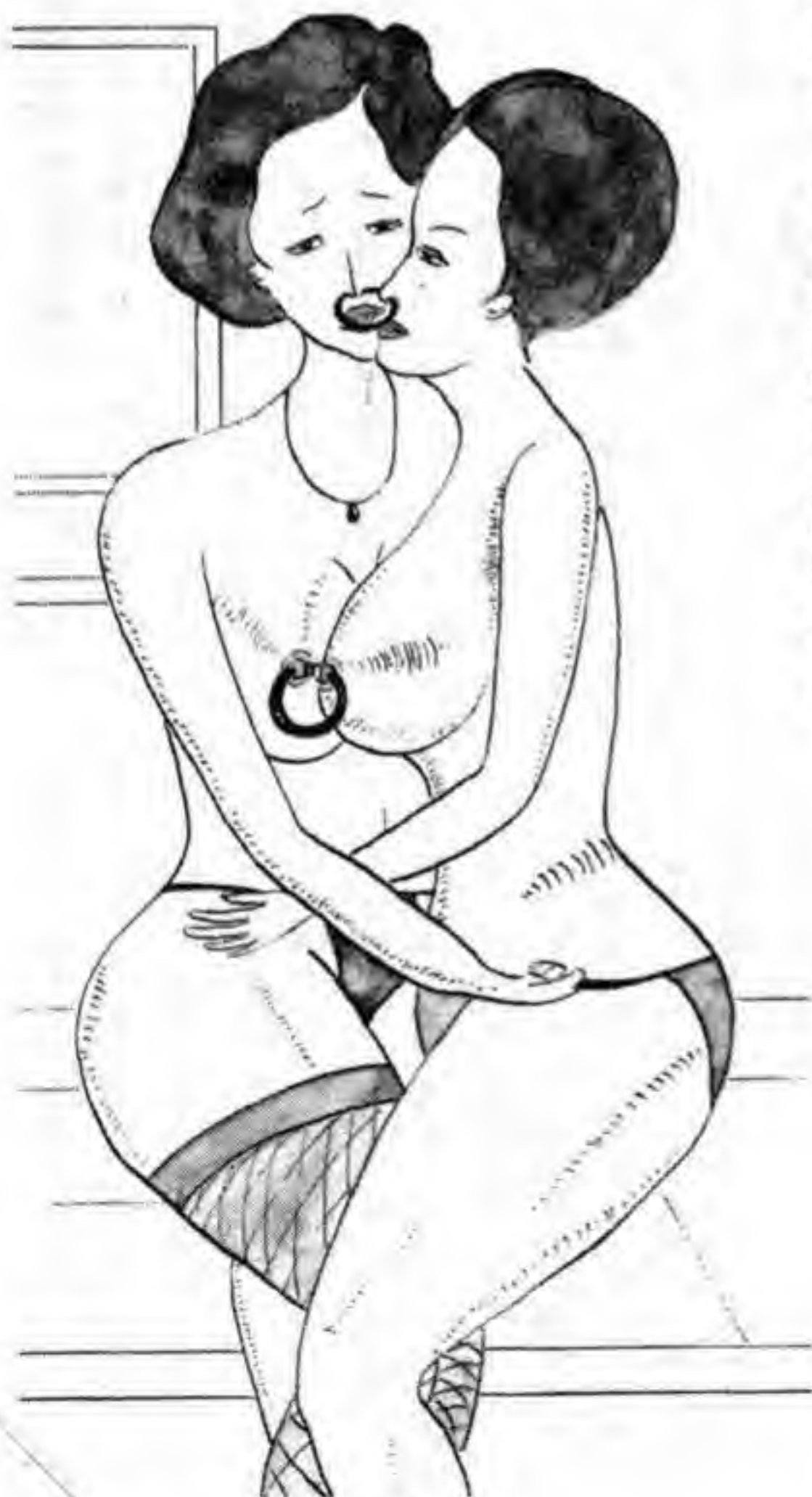
かすんで……ふわふわと綾の体は宙に舞う心地……右京さまを……しかと綾の体の奥に収めて……果て……まする……うーむ」

湯もじもほどけて豊かに張った腰をゆすりもだえる綾女の姿は、男女の睦みごとのさまです。うーんと大きく呻いてがっくり綾女の体が崩れた時、いいーっ咽喉を鳴らし、弓江も寝召しをほだけ、右京の背を固く抱いて、

「弓江は、死ぬ……死にまする……」

と、身をふるわせていました。

—終—



坊矢一生



# 白衣の散華

巴鳥訓右

昭和20年8月11日満洲——国境から中距

離の陸軍病院では、もう結核などで独歩の困難な病兵を除いて、院長以下の医官・衛生兵・看護婦が、軽症の患者を引率して南下して

行きました。残ったのはわずか二名の看護婦だけです。その任務は、待避不可能な病兵の処置なのです。処置と云えばきこえはいいのですが、それは死の宣告であり、薬殺でありました。強制された玉碎です。

二名とは、主任看護婦吉美輝子、そしてその忠実無二の部下で宿舎でも同室の、藤本悦子看護婦、この二名の看護婦は医官の指示どおり、致死量の薬液を注射してまわります。

情報を伝えきいて、連合国軍の進入を察した患者たちは、もうあきらめのいろをうかべていました。いさぎよい患者は

「主任さんに最後までお世話をかけます」

と言葉を残して注射を受けました。末期近い患者で動けないままにも

「ああ、死にたくない」

涙をうかべるのもいます。あたりまえですが、吉美主任看護婦は

「ごめんね、わたくしも皆さんと一緒にここで死にます。あの世で又お世話しますよ」

そう慰めながら注射を続けて行きますと、「主任さんは逃げて下さい、生きて下さい」

最後の叫びをあげる兵もいます。

「なぶり殺しになるよりここでいさぎよく散華するのが、軍人の本分でしょう。わたくしも自決するのですからね」

藤本看護婦は反対にきびしく云って、注射して行きます。それには兵も心を打たれ

「藤本看護婦どの、死なないで下さい、死ぬのは自分たちだけでいいのです」

そう云うのでした。市街地から離れている

静な一廓でした。すべてが終わって静寂の病舎に呼吸を弾ませているのが二人きりになつたとき輝子は悦子に、

「許してね、あなたを選んでしまつて」

深く一礼します。

「主任さん、うれしいのよ、わたし、よろこんでお伴します」

二人はしつかり手を執り合い、感情の激したあまりか、輝子は悦子をしっかりと抱き寄せました。悦子は輝子の肩に頬を寄せ

「主任さん、かねての覚悟のとおりね」

「もう階級はないのよ、悦子さん」

「じゃあ、おねえさま、いよいよね」

「そう、いよいよ、あの秘めて来た願いを、今こそとげるのよ、いいわね」

「いいも何も、長いあいだ待っていたわ、お



ねえさまとこうなる日を」

「悦ちゃん、かわいい」

「おねえさま、せつないわ」

二人は瞳を見合わせて次の瞬間、妖しいほど凄艶な微笑をうかべました。白衣のすそをさばくようにして、二人は病舎の二階に、階段ぎわの詰所と並ぶ宿直室へ入りました。六畳の和室ですが何もないので広く見えます。

二人きりで広い病院に取り残されて、一室にこもると、戦慄に似た怯えとよろこびが、心もち蒼ざめた二人の表情をおおいます。

悦子が部屋に入るなり洗い立てのシーツを二つ折にして敷きます。二枚を向かい合うようにも、また並ぶようにも見える敷き方で敷きます。そのあいだに輝子は、白木の三宝を二つ、向き合うようにすえ、その上に懐剣を横たえました。このしつらは、昔ながらの切腹の場そのままだのです。

「悦子さん、ごめんね、わたし、どうしてもあなたと一緒に死にたかったの」

「わたしも……これから先どんな悲慘がまつているかも知れないのに、二人きりでここで切腹出来るなんて……しあわせだわ」

「悦子さん、かねての覚悟どおり、一緒に」

「ええ、思う存分腹かきくつろげて、心ゆくまで真一文字にかき切りたいわ」

「充分に腹かき切った上は、互いに臍窩を刺し違えるのよ」

「云うにや及ぶ、ですわ、おねえさま」

さすがに蒼じろくなりながらも、二人は互いの瞳を見つめあつたのち輝子の目くばせで、「いざッ」「いざッ」

声をかけ合うと、純白の看護服のボタンをはずし、ベルトをぬいて膝立ちになると、両太腿をそれぞれしっかりと豊かな腰をおちつけたら踵の上にしつかりと豊かな腰をおちつけた二人は、何のためらいもなく看護服の腕をぬいて、いさぎよく双肌ぬぎになりました。ボタンをはずしてありましたから、たちまち腰をおおう下着の上縁が覗けるぐらいに、深く腹もあらわになりました。

端麗な輝子の裸身、豊麗な悦子の裸身、淡いクリーム色と象牙色の中間のようなやわらかい色つやの二人の腹には、淡く静脈が透けてみえるのです。戸外では満州の日暮れはおそく、斜陽というよりも代赭色の緒陽といった陽ざしが黄土に照っています。

二人は同時に払った懐剣の鞘を三宝へ戻すと、用意の白布で刀身を巻きます。切先三寸残して白布で巻かれた懐剣は武士の腹切り刀の心もちです。手馴れた動作を進め、左手で柄がしらを握ったまま右手で三宝を脇へ押し

やり、あらためて瞳と瞳を見かわしながら、二人は申し合わせたように、しっかりと右手で白布の上から刀身を握りしめ、めいめいおのが腹へ切先を向けて少し離します。

輝子の臍窩の中心に丸い環状の隆起もあざやかであり、悦子の臍窩はふっくら丸い腹部の中心で深くくぼんでいます。その美しい腹をなでおろす間も惜しいのか、二人はもう腹へ刀を突き立てようとしているのです。輝子が悦子に目くばせしたかと思うと、同音に、「い」「や」「さ」「かッ」と、一字一字を区切るように唱えて、びったり呼吸が合うあいだに二人は、ぐうッと腹に力をこめていました。鳩尾の辺りが少しくぼんで、臍下にこもる力がその辺りを一層張り切らせました。悲愴な、しかし緊迫して美しい瞬間です。輝子も悦子も最も女性らしい美しい豊かさを感じさせる腹部の中心を、みずからかき切ってしまうおうとしています。それは白虎隊の少年たちの悲壮な切腹を規範として教育された少女にとつては、あたりまえのことであり、そうして成長した輝子と悦子にとつても、かねて覚悟し、手習っていたことでした。しかしあたりまえと口では云えても、実行するのは女の身で、やはり並々ならぬ覚悟と気力の充実を必要とするはずです。それを二人は二



十を出ぬか出たばかりの娘の身で成し遂げようというのです。

「いやさか」の最後が「かッ」と叫びに昂まった瞬間、二つのひらめきが部屋の中央で走り、ぷつり、ぷつり、とかすかにせつない音が二つ。輝子も悦子もおのが腹に、いよいよ刃を突き立ててしまったのです。そのまま、ふるえを帯びた右手に力をこめ、二人は互いの瞳を見すえながら、左手で柄がしらを押します。ずぶりと刃が腹に深く入ります。

「ああッ」「ううむッ」

悦子の透明な叫びと輝子のくぐもった呻きが同時に交錯し、二人の白い腹の左寄りに血が湧きました。刃の刺さったところから滴落

します。切先が深いのでずいぶん苦痛なはずですが覚悟の二人はさすがに顔まで白ませながら、刃を右へ引きます。輝子はちょうど二重環のようになっている腹筋の隆起の左側に立てた刃をゆっくり右へ、悦子は臍のすぐ下ふつくらと張りみちた辺りをキリキリと早いピッチで、それぞれ切り進みます。先に正中線に達したのは悦子で、ホッと吐息して、

「ああ、いたい、いたいわ、いたくてせつない……」

と小さく訴えます。輝子は無言でジリッジリッと切っていくのですが、切りなずむのは腹

筋が強いせいかも知れません。

「ああ、じれったい、一気に思いつ切り」

云うなり力をこめ直し、正中線を断って、右の腹へ切り込みます。おくれじと悦子もまた悲愴な決意に挑みなおします。

「よく、き、きれるわ、こんなに……」

云いつつとうとう右脇腹まで引きつけたのです。おくれながらも輝子も充分に引き切りました。輝子が六寸、悦子の方は八寸も切っているでしょう。みごとに一文字の切腹。切り口から下の腹はいくすじもの血の流れに色どられ、散りしづいた血が白衣の膝をくれないに染めています。

「え、えつ子、さ、はやく」

眉根を寄せながら右脇で抜きとった刃をとり直した輝子が、蒼白な顔で悦子を短く促します。一方、年こそ下ですが腹の厚い悦子は脂肪の厚みのせいで苦痛が少いのか、ゆっくり刃を抜きとって、持ち替えながら

「お、おねえさま、りっぱにせつぶくできて

思いのこすこと、ないわ」

息をつめながらも、はつきり云いました。

「えつ子、かわいいわ」

「おねえさま、うれしい」

云いざま二人は刃先を右の手で摘んで、相手の臍窩へあてがいます。丸く深い悦子の臍

窩、浅く縦長の輝子の臍窩、それぞれがまだ

血を知らずに腹の中心で微笑むようです。そこへ切先を、チクリとするほどに互いに差当てようと、左手で相手の右肩をつかみます。

そのまま輝子と悦子はそろそろと膝で立ちます。血が一層腹の切り口から噴き流れるのもかまわず、二人は一気に抱き合いました。

よほど今日までに稽古を積んでいなければこうも気が合いますまい。

「ああッ」「ああッ」

同音の絶叫、ここに白衣の花二輪、散り果てたのでした。





# 鞘 和彦 凄絶画譜！





# 犬と私と夫 3

上野悦子

ます。

夫がセパードを買ってきたその夜、さっそく私は、初夜を迎える花嫁にさせられたのです。新郎はもちろんセパード犬です。セパード犬は大きいので、ベッドの上では無理だからと、居間のジュータンの上が新床のかわりになったのです。

コリー犬との経験から、犬は私の肌を爪で引っかくので、ネグリジェを着て、お尻のほうをまくった格好でつがわされることになりました。

「さア、四つん這いになれ」

夫に命じられて、ネグリジェのお尻をまくり、四つん這いになって待っていると、  
「今、犬のヤツを興奮させてやるからな」

と、夫は私の目の前で、犬のペニスをしごきにかかりました。犬の肉棒がどんどん出てき

「頼むからな、悦子とつがってくれよ、お前の瘤を悦子の中へ入れ、抜けなくなるようにしてくれよ、お願いだ」

なんとか念願の獣姦を成功させようとしている夫は、必死になってセパード犬にお願いしているのです。

「よし、大きくなったぞ、これならきつとつがえるぞ」

夫は嬉しそうな声をあげて、私のお尻にセパード犬をドーンと乗せました。

セパード犬は大きいですがとても重いのです。私は犬の重さに耐えながら、こんなに大きい犬なら、きつとつがってしまうに違いない、そうして、いつか見た野良犬の交尾のように私とセパード犬がつがって、長い間抜けなくなってしまうのではないかと思いまし



た。人間の女の私と、この大型のセパードがつがい、お尻とお尻をくっつかせて離れられなくなるのです。私は頭に血がカーッと湧き上がってきた。私には、もうセパード犬が私の中にいるのです。とうとう私は犬とつがってしまったのでしようか。

「あなた、どうしよう、この犬、離れないわよ」



「よし、大成功だ。悦子と犬がつがつたのだ。どうだ、気持がいいか。もう二〇分も離れずにいるぞ」

夫は私の気持なんて気にもかけず、大喜びで今にも拍手さえしそうにしているのです。

「恐いわ、あなた。離れなくなったらどうしよう」

犬に犯され、お尻とお尻をくつつけたまま離れられない私……。

＊

＊

ところで、結果ですけど、夫の期待も私の妄想も、ものの見事に裏切られてしまいました。

夫は、私のお尻のほうへ回って、何かしていました。多分、犬と私をつがわせようと懸命になっていたのだと思います。

「どうしたんだ、どうしてもうまくいかないぞ。こんなに太くて大きいのに、どうしても

駄目だ」

「あなた、焦らないで」

夫の為になんとかつがってみせようと私も必死でした。でも、私にはどうすることもできないのです。協力できることといえば、お尻を上げたり下げたりして目標を定めさせてやろうとするぐらいなのです。

「あなた、もう少し下じゃないかしらとか、

「いいえ、もう少し上のようだよ」

とか、私もだんだん焦ってきました。

そして、とうとう、

「そこだよ、そ……」

間違いなく犬の先端が当たっているのですが

やはり駄目なのです。

そのうち、犬のほうもくたびれたのか、あ

るいは興味をなくしてしまっただのか、

「あッ、犬のヤツ、小さくなってきたぞ」

という夫の声が聞えてきたのです。私はもう

ガッカリしてしまいました。せっかく努力し

てつがってあげようとしているのに、これで

は努力しても無駄になります。私は夫以上に

情けない気持になっていました。

「もう一度犬のヤツを興奮させるから、その

まま四つん這いで待ってろ。今度はサツとつ

がわせるからな。

やがて、興奮した犬を私のお尻に乗せてき

ましたが、やはり同じことでした。犬は私の

お尻を抱いて上手に腰を使うのですが、どう

してもつがうことができないのです。こうし

て、獣姦はまたしても失敗してしまい、夫の

失望は想像以上のものでした。

＊

＊

その後、私たちは何度か獣姦に挑んでみたのですが、つがいの真似事ぐらいはできても、どうしても、犬の瘤で離れられなくなるような状態まではいきませんでした。

そんなわけで、念願の獣姦をほとんど諦めかけていた私たちでしたが、最後に、と思い私から提案してみたことがあるのです。

「前向きでしたら……、もしかしたら成功するかもしれませんわ」

私の提案に、夫はちよつと不満そうな表情を浮べました。夫の理想は、犬と私がお尻とお尻をくつつけて抜けなくなることであったのですから無理ありません。

でも、私と犬とが前向きで向き合う格好なら、私が自分の手で導いてやることもできると思ったのです。そして、犬の瘤で離れられなくなったなら、体位を変えて夫の理想のポーズになればいいのです。

私の説明に夫もやつと納得してくれて、「仕方がない、そうしよう。しかし、うまくいくかな」

夫は半信半疑のようでしたが、他に手だてもないので、一応実行してみることに決めました。



私は犬と向い合い、手を伸ばすと、小さくしぼんでいるものを愛撫してやりました。

「さアさ、わかってるわね。今度はしっかりするのよ。ほら、犬同志でつがっているでしょ、あれと同じことを私とすればいいの」

私が犬に話しかけるのを夫は黙って聞いていました。そんなことを話してきかせても、どうせ駄目に決っている、とでも思っているような顔付きです。

でも、私にしてみれば、なんとかつがってみせてあげたいし、セパード犬は利巧だから話してやれば判るような気がしたのでした。

セパード犬は横に寝転がって私の愛撫を氣持よさそうに受けていました。

「さア、大きくなってきたわよ。もう大丈夫ですね。ねエ、つがいましょうね」

充分にエレクトしたのを見計って、私のほうから腰を押しつけていきました。

「あなた、大丈夫よ、今度こそうまくいきそうですね」

私は思わず夫に向って叫びました。思ったより簡単に成功しそうな感じがしたのでした。

「そうかッ、うまくいきそうか。よし、悦子離すなよ。今度こそ獣姦が成功する、今に犬の瘤で離れられなくなるぞ」

私が四つん這いになるポーズと違って、こ

の格好なら夫にも見えてる筈です。それに、セパードはコリーよりも毛が短いのですからどんなふうになっているか判る筈なのです。

「見える？ あなた」

「見える、見えるぞオ……、よし、大成功間違いなしだ。どんな具合だ？」

「それが、柔かいの」

「柔かい？」 どういうことだ」

夫は怪訝そうに覗きこんでいる様子です。夫に訊かれてもどう答えていいのかわかりません。

「どういう感じなのか、いってみろ」

「どういう感じといわれても……、なんだかつがっている感じがしないんですの」

どうも変な氣持なのです。もしかしたら失敗したのではないかと私はあわてて上半身を起して下腹部を覗きこみました。

その時です、夫が突然叫びました。

「悦子、見ろ、瘤だ、犬の瘤だぞ」

夫の声にびっくりして、よくみると、確かに瘤でした。子供の握り拳ぐらひはある、大きな瘤です。その時、私たちは始めて犬の瘤を目の前で見たのでした。

「そうか、これが瘤か。大きいなア、これなら抜けなくなるのも当り前だ。よし、いいぞ、うまくいくぞ、今度こそ大丈夫だ」

夫は興奮で顔を赤くしていました。

「オッ、悦子、そらッ、瘤が移動していく、見ろ、すごい、すごい」

ところが、夫の興奮はそこまででした。移動し始めた犬の瘤は途中からどんどん小さくなっているのです。

「あれッ、あれッ……、どうしたんだ」

夫は、あわてて犬のお尻を押さえて、私のほうへ押しつけました。でも、間に合いません。瘤はどんどん小さくなって、終いには前と同じになってしまったのです。

「ど、どうしたのかしら」

「待て。あッ、こいつ、射精しちゃったようだぞ」

そういえば、なんだかべとつくものが腿のところを流れていきます。

「本当ですわ、いってしまったのですわ」

私は、なんだか肩すかしを食わされたようで、すっかり拍子抜けしてしまいました。

「畜生ッ、なんてことだ。せつかくいいところまでいったのに」

夫はもうかかんかに怒りだしていました。犬が射精してしまった以上、私をつがうことはもうできません。

「さては、悦子、お前、さっき愛撫したときに……」



夫は期待を裏切られた腹いせに私に因縁をつけてきました。犬の射精寸前まで愛撫してやっただけに違いないのです。

「まさか、そんなこと……。あなただって見ていたではありませんか」

「わからないぞ。お前のテクニックならそれぐらいのことはわけないし、な。第一、お前は獣姦を恐れていたからな」

「そ、そんな……。私、あなたの仰言るとおりにしてましたわ。それに、私だって早く犬とつながってみせて、あなたに喜んでもらおうと思ってましたのに……」

私は悲しくなっていました。夫は、私の努力をぜんぜん認めてくれようとしなかったのですから。

夫といいあいをしているうちに、セパード犬は射精して満足したのか、ごろりと寝転がると知らん顔して眠ったふりをし始めたのです。そんな様子に、夫も怒るのが馬鹿らしくなったのか、あーあ、と大きな溜息をつくばかりでした。

その後も、何回かセパード犬をつかうことを試みたのですが、つながことは愚か、二度と瘤も現われませんでした。一体、どうしたのでしょうか、私にはわかりません。

以上で、私の獣姦失敗談を終わりますが、

最後に、私の見た夢のお話をしたいと思えます。夫が、私と犬をつがわせることを諦めた頃に見た夢です――

### 夢の中で……

昼間の公園、だったと思いますが、夢のことですからハッキリとはいたしません。

私がベンチに腰かけていると、大きなセパード犬が来て、私のスカートの中へ鼻を突っこんできたのです。私はパンティをはいておりませんでした。犬は私の股の間をペロペロとめだし、その気持よさにうっとりしている私です。

そのうち、その大きなセパード犬のペニスが見たくなり、手を伸ばしていじっているうちにどんどん大きくなってきました。それを見た私は、

「これならつながるわ……」  
と思ってしまうのです。諦めていた獣姦願望が夢の中でよみがえってきたのです。

私は芝生の上でスカートをまくり、お尻を丸出しにして四つん這いになりました。現実の犬と違って、夢の中の、そのセパード犬は

さも慣れた様子で、私のお尻に乗り、腰を両前足で抱くと、すばやくドッキングしてきま

した。それはもうアッというまのことで、現実であんなに手こずったことが嘘のようでした。私と夫が驚嘆したあの大きな瘤も小さくならず私の中へ移動してきます。

「もう大丈夫だわ、絶対に離れないわ」

私が安心すると、犬が体位を変えたので、今度こそ本当に私と犬とはお尻とお尻でつながったのです。

「できたわ、悦子、できたのよ」

私は夢の中で大満足でした。ところが、それ以上に私を満足させることが起ったのです。人間の女が、犬とつながっているぞ」

誰かが叫ぶと、その辺りにいた人たちが急いで寄ってきました。たちまち、私と犬との周囲には見物人でそっばいです。私は興奮で気が狂いそうでした。犬とつながっている私のあさましい恥態を大勢の人たちが見ているのです。

「こりや獣姦だ、やるなア、あの女……」

「女の尻と犬の尻がくっついて……、抜けな

いのですね」

見物人たちは好奇心な目をひからせ、ワアワアとはやしたてています。

「水をぶっかけてやりますか」

「いやいや、このままやらせておきましょう、ごらんない、あの女は嬉しそうに尻を振っ



てますよ”

私はすっかり見世物にされ、女の人などはハッキリと軽蔑の眼差しで私の様子を眺めているのです。

ああ、私は見世物になってるんだわ、犬とつながっているとそこを見させているのね……、恥ずかしくて死にそうなのに、その反面で、いつまでもつながって見せていたい気持なのです。私は、それまでのどんな快感よりも強烈な快感に酔い痴れていました。

夫が話していた犬と女がつがう、シロワンシヨ—というのはこういうことなのだよ……、それにしても、なんという快感なのでしょう。私はいつのまにか熱くあふれかけていたのです。

でも、夢の中の見物人はなんて薄情なのでしょう。私がせっかく達しようとしているのに、眺めるのに飽きてしまったのか、そろそろと私と犬のまわりから散り始めたのです。

“あッ、待ってッ……、もっと見てて、駄目よ、もっと見ててくれなくちゃ……、悦子、もうすぐいくのよ、それを見ててッ……”

いくらお願いしても、見物人はどんどん散っていくばかりです。

“ほら、見てッ、犬とつながっているのよ、見て、見てッ、犬の瘤で離れられないのよッ”

私はもう泣きださないうちに叫んでいました。そして、自分の声にハッと目を覚し、それまでのことが全部、夢の中の出来事なのだと思ったのです。そして、ふと気がつく

と、私の足の間にチンがもぐりこんで、しきりに舌を鳴らしていたのです——（終）



坊矢一生



# 投稿画廊





# 毛皮と女と縄

女性にとって毛皮は確かにすばらしい宝物で、ミンクのロングコートなど、手に入れたものの筆頭ではなからうか。

それはまた男にも強いセックスアピールをもち、毛皮をまとった女には、つい目が向いてしまう。

パリでは、ミンクのコートは高級娼婦の代名詞だという。娼婦というのはセックスアピールの固まりともいえるのだから、それを引っ張り出す最大の武器として用いられるミンクのコートは、男にとっても魅力的な存在であることは言うまでもない。

## 毛皮の性的魅力

毛皮にどうしてそんなにセックスアピールがあるのだろうか。

それは第一にあの柔らかな手触りというか風合いの感じにあると思う。これは、手皮そのものの材質感に魅力があるのだが、それよりも、女の素肌を包む時、女体とのコントラストにおいて、一層その素晴らしさを感じさせるようだ。女の肉体は柔らかいといってもしなやかな弾力があって、外力を加えても無限に凹んで行くことはない。

毛皮に力を加えれば、殆んど無限に凹んでしまう。その柔らかい毛皮が、弾力のあるしなやかな女体をすっぽりと包む時に、何んとも云えないハーモニーを生ずる。

毛皮の魅力の第二は、そのはかなさ、にあるのではなからうか。毛皮は乱暴に扱えば毛が抜けてしまふし、手あかや汚れもつき易いし、毛が固まってしまったりすれば、どうしようもない。

豪華な毛皮ほど、汚れてしまえばみじめで哀れっぽい。

そのはかなさ、うつろひ易さが、また男心を刺激するようだ。

手皮の魅力のもう一つは高価なことにあ



写真①赤い腰巻ひとつで荒縄に縛り上げたユキをムートンの上に正座させた



う。ミンクのロングコートは安いものでも二百万円はする。まともな仕事をしている人にはちよっと手の出ない値段である。そこで、ミンクはむしろハーフコートの方が売れているようである。でもミンクのハーフコートはいかにもお金が足りなかったという感じがしていい。デザインからしても、ハーフコートではフラップがめいて、しとやかで成熟した女のイメージが湧いて来ない。

ま、そんなわけで、高価なロングコートをまとった女は、その毛皮同様高嶺の花で、それをまぶし気に見る庶民には、あこがれと羨望をよび起すことになる。

以上三つの理由で毛皮というものは、それをまとった女体を含めて、男達に強いセックスアピールをよび起すことになるのだと思う。ここいら辺までは、何も我々SM族でなくとも、誰でも共感する所だが、これから段々と話がおかしくなってくる。

全裸の女に毛皮のコートを着せてみたいと思うのは、まずノーマルな性情であろう。

しかし、全裸の女を縄できつく縛り上げ、その上から手皮のコートを着せて、街の中を一諸に歩きたいと考えるのはいささか変っているかも知れない。

私は全裸の女を細目ほそめの縄で後手にきつく縛

り上げ、毛皮のコートの袖に手を通さず、ふわりと着せかけて、口には猿轡をはめて、その猿轡を毛足の長い毛皮の襟巻で隠し、頭から目深に毛皮の帽子をかぶせて歩かせてみたい。そのロングコートも、出来れば裏表ともミンクの毛皮で作り、毛皮が直接女の肌に当るようにしたいものである。

こうなるとSMマニアだか、フェチズムだかよくわからなくなるが、私にはSM趣味と共棲して、毛皮フェチがあるようである。

コートの内側にも毛皮をとりつけたいの私は私にとって毛皮はそのものもさることながら女の肌と毛皮の風合いふうあいとの接点にセックスア



写真②白状しないユキを横倒しにし、片足をもちあげたところ



写真③強情をはる女囚ユキを仰臥させ、下の口を天囲に向けてみた



ピールを感じるからである。

コートの表面だけに毛皮が使ってあれば、女の肌との接点は首と手首と膝位だけになってしまう。

そこで、この一二年流行しだしたライナーコートと云って、表面はバーバリのレインコートのようになっていて、裏面にムートンなどの毛皮をとりつけたものが、私の性向には向いている。お値段も二十万前後と手軽でよいのだが、裏の毛皮の風合いが今の所もう一つもの足りないのが残念である。

次のシーズンには、裏にフワフワの毛皮をつけたライナーコートが発売されないかな。そうしたら早速購入し

て、(ウツフン)、着せる相手が居たっけかな？

立派なハーフコートより、裏の良いライナーコートの方がずっとお洒落だと思ふのだが、今時の若い娘はそうは思わないようだ。

さて、縛り上げた女に毛皮のコートを着せて散歩する件については、まだ実行していないので、上手く行ったら来年の今頃、写真入りで御報告することとして、もう少し現実的でもう少しセコい話に進むことにする。

S M プレイやセックスをする時、毛皮の敷物の上でやりたいと考えるのは、毛皮フェチの私だけだろうか。

毛皮などでもミンクタッチといって毛足の長いもので、毛皮のような模様がついたものが出ています。またシートでもナイロンボアと云って、毛足が七、八ミリのものも売られている。これ等を使う時はもちろんカバーなどかけない。肌触りのよさがセクシイなムードを昂めるのに役立っているからである。

これはさほど高価なものではないので、もちろん私も使っていて、ある程度は良いものだと思うのだが、残念ながら、現在までの製品は毛足が短かいし、手触りもあまりよいとは云えない。

汚れるのは仕方がないとしても、洗い晒し



なつては、ムードもなくなる。

出来ればミンク製のシーツなどを特注して作ればいいのだろうが、これは宝くじでも当らなければ土台無理な話である。

現実に出来ることは、ムートンの良いものを何枚かつなぎ合わせて、その上でのプレイということになってしまう。

そこで、ある時、ある所でそんなことをやって見たのが、今回お目にかけている写真である。

### 秘蔵の女囚を責める

坂本信三氏といえば、古い奇譚クラブの読者の中には、御存知の方も少なくないと思う。坂本氏は旧寄ク編集者の箕田京二氏と親しく箕田氏が塚本鉄三というペンネームでカメラハント記事を書く時の黒幕的役割を果していた人である。私とも古くから親交があつて、私のSM雑文を書く時のネタの大半は坂本氏と一諸にプレーした時のものである。坂本氏自身は筆不精であり文章を書かれないのでいわばシャーロックホームズとワトソン博士のように、私が書き役で、実力者は坂本氏ということになっている。

さて、実は今回も、私が坂本氏のかねてから秘蔵している女囚、上川ユキなる女を責め

る時、私から提案してミンクの毛皮ならぬムートンを使ってみたものである。

この時は予算の関係もあつて一枚だけ、ただし、かなり上等なムートンをデパートで購入して、そのままプレイ場所のホテルに持っていた。

そこはラブホテルではなくシティホテルなので、SM用の設備も小道具もなく、手持の道具類だけでプレーしたのだが、その一枚のムートンが、どれほど役に立ったかということを書いてみたい。

①の写真は、まずユキを赤い腰巻き一つで菱縄に縛り上げ、そのムートンの上に正座させた所である。縄は細



写真④女学生ユキをカニ縛りにして、ベッドの上で仰向けにした



目の紺色で、紫色の猿轡ともマッチさせてある。

肝腎のムートンは、写真を小さくカットしてしまったのと、光線の具合とではつきり写っていない。

まあ赤いお腰のやや時代劇めいたムードにムートンはいささか場違いなのはいなめない。特に正座させる時は畳とか板の間、あるいは土間に直接坐らせてこそ、その肢の痛々しさがムードをかもしのだから、これはどうも愚作ということか。

ムートンとは話はそれるが、プレイの冒頭にこんな風に女を縛り上げたら、まず女の人定尋問をすると面白い。

「お前の名前は？」

「住所、生年月日は？」

など尋問し、真面目に答えなかったら、それを理由に色々拷問を加える。

ちゃんと答えたら、さらに、「昨夜は誰と寝たか？」

「お前は何人の男と関係したか？」

などと尋ね、返事をしないと拷問にかけることになる。

それでも素直に白状してしまうような性悪女だったら、「麻薬の隠し場所を云え」

といって脅かし、首尾よく白状させても、

写真⑤細目の紺色の縄で女学生ユキを縛りあげ、床の上にごろがした



「苦しまぎれに嘘を云うな。本当のことを白状しろっ」 いずれにしても次の責めに移行することになる。

「ないじゃないか」と云う時が、SMプレイの最も楽しい瞬間なのだ。

この際「猿轡をしてあつては白状出来ないじゃないか」など云うのは、全く教条主義的発相であつて、猿轡などはめてあつても、いくらでも喋れるものだし、はつきり発音出来なければ、それがまた味い深いのだ。

「こらっ、もっとはつきり云え、ききとれ

そういう時に、うまくこちらの科白に乗って調子を合わせてくれるようなM女は、それこそ貴重品である。しかし、それは、こちらの方でそのように教育しなくては駄目で、生れつきそういうことの出来る天才少女はまず居ないだろう。



②の写真は白状しないユキを、怒った坂本氏が横倒しにして、片足をもち上げた所である。両膝の下に縄をかけ、背中を通して結んであるので、広げた太股は閉じることが出来ない。胸の縄目の具合など①の写真よりよく解ると思う。

この上川ユキなる女囚は、とび切り身体の小さな女で、身長は一五〇センチ位、体重は四〇キロはないと思われるので、一見中学生位の体格なのだが、おっぱいだけは結構出っ

である。

③の写真は強情を張る女囚ユキを仰向けにして、下の口を天井に向けている所である。こんな悪いことをするのはもちろん坂本氏であって、私はおとなしく写真やビデオをとっているだけだった。

坂本氏は決して大男ではなく、普通の身体つきなのだが、彼の腕がユキの足より太い所を見ても、いかにユキが小柄なのかわかってもらえるだろう。

私のフェチの対象たるムートンは、実際には縛られたユキの肉体とのコントラストの上で、なかなか良い味を出していたのだが、写真では、ストロボ直射一灯という台慢なライティングのために、すっかり材質感がとんでしまつて、味もそっけもなく写っている。

悪代官の坂本氏が、この後、女囚ユキにどんなひどいことをしたかということについては、読者の御想像におまかせする。

赤い腰巻とムートンとの取り合わせの悪さを反省し、女囚ユキに黒いストッキングとピンクのガーターをつけさせた。またしてもチビのユキには、フリーサイズのストッキングは長過ぎて、上端を幾重にも折つて、ガーターの下に隠さなければならなかった。



写真⑥サイドテーブルの上にムートンをかけそこに仰向けに全裸のユキを縛りつけた



黒いストッキングは、パンストと違って夢がある。ストッキングの黒さから、ハツと白い太股に移行する所が何んとも云えないし、その境界に赤やピンクのガーターが介在するのがまたよい。パンストでもずり下げれば同じじゃないかと云う人も居るが、左足と右足が別れていないというのは決定的に夢がなくなる。

さて、黒ストッキングをはかされたユキを女囚というのはしっくりしない。そこで誘拐されて来た女学生ユキということにしよう。

④の写真は女学生ユキをカニ縛りにして、ベットの上で仰向けにした所である。カニもこのように裏返しに引っくりかえされてはどうしようもない。困惑したユキはしきりに何か文句を云っていたが、坂本氏は耳が遠いふりをして、「なに？ 剃ってくれって？。そうか、お前がそんなに頼むなら仕方ないから剃ってやるか？」

勝手なことを云って、電気カミソリやら、T型カミソリやらを器用に使いわけて、一本残らず綺麗にそり上げた。坂本氏に云わせると、長い部分は電気カミソリのキワゾリ刃でザッとカットして、その後にシャボンをぬりたくって、ヌルヌルとT型カミソリで仕上げるのが、最も能率的かつ安全にして楽しい

やり方だそうである。しかし、幾ら能率的と云っても、一本残らず綺麗にするにはかなりその間、こういうスタイルを強要されているユキは心身とも疲れるだろうに、結構怪し気な声をもらしたりしているのは、坂本氏のテクニクなのか、ユキが先天的マゾ女なのかどちらかであろう。

ビニ本などではシャームハレが写ると、その筋がうるさいという理由で剃ることが多いが、坂本氏も、私もロリータコンプレックスなのか、幼女のようにツルツルなのが可愛らしくて好きなので、剃ってしまうことが多い。ツルツルなのは清潔な色気があって何んとも云えない。大体SM趣味などというものは何んでも正常の裏返しに興味をもつのだから、剃毛派は病気が重いのかも知れない。ムキ蛤の味がどうだったかは、坂本氏に聞いて欲しい。

ムートンがベット全体を覆っていると素晴らしいのだが、尻の方にかかっているだけなのは、どうもケチ臭くて良くない。しかし、黒い靴下と白いムートン、意外に豊かなユキの尻の弾力性とムートンのフワフワ感など、実際に見ているとなかなか良いもので、ユキのジュースか何かが垂れてムートンをよごす所など、何んとも云えない趣があった。

## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

東京都中央区銀座1の22の10

銀座ストークビル・5F

風俗資料保存会



この縛りでは、やや太目の金色に光る絹のロープを使った。

これは、しなやかで滑りがよく、肌ざわりがよい上、ほどく時によく滑ってほどきやすい。女の肌にあてたまましごいても肌を傷つけない。

この手の、いわばドレッシイな縄は、毛皮を使ったり、豪華なムードでのSMプレイには適していると思う。

これに反して麻縄とか、さらに進んで荒縄などのラフな縄は、野外とか、物置とか、もつと残酷な場面で使うとその雰囲気にもマッチする。T・P・Oで女を縛る縄を使いわけることである。

ついでに云えば、この写真では、ユキの小柄な身体つきに対して、縄が小ささか太過ぎるうらみがある。小柄な女には細目の縄を使い、大柄な女には太目の縄を使うのが、縛りの美学の原則である。

⑤の写真は、縄の太さを反省し、また①の写真と同じく、細目の紺色の縄で、女学生ユキを縛り上げ、床の上に転がした所である。どうもこの縄は一寸細過ぎたうらみがあり、ついつい余分に縄をかけすぎてしまった。縄は原則として沢山かけた方が緊縛感が出て良いのだが、沢山かければかけるほど、遊んでいる無意味な縄、いわゆる死に縄が出来易く

それがかえって緊縛感をそこなってしまうところがある。この写真も一寸ばかり遊んでいる縄があるようである。縄が細過ぎると、女体を巻き締める縄の力が弱いような感じがしてついで余分な縄をかけてしまい勝ちだ。

逆に太過ぎる縄は、つい縄の量が少なすぎて、これまた緊縛感が薄くなり易い。

縛られる女の肉体的条件に合った太さの縄を、必要十分な量だけ使うのが上手い縛り手ということになる。

大分昔にも一寸書いたことがあるのだが、縄は男の腕の代りだと男う。愛する女を両腕でがっしりと抱きすくめる代りに、縄でギリギリと縛り上げるのだ。だから、その女を最も美しく見せるような縄を使い、最も美しい縄がけで、きつくきつく縛り上げなくては満足出来ないのである。

この写真では、幾分かムートンのフワフワした材質感と、縛られた女体のムチムチプリプリンの質感とが表現されているように思う。

写真⑥はサイドテーブルの上にムートンをかけ、そこに仰向けに寝かした全裸のユキの四肢を縛りつけたものである。

もちろん、最初は水平の位置だったのだがローソクやら、パイプやら色々使っているうちに、頭を上にしたたり、下にしたたり、色々

と態位を変えたうちのワンカットである。もつと色々な写真があり、坂本氏の、時には優しく、時には残酷なサーヴィスぶりが激写さされているのだが、何かと差し障りがありそうなので割愛し、あまり差し障りのなさそうなのを一枚だけ提供する次第である。

これはあまりきつく縛っていないかったので頭の方がズリ下り、一寸だらしない恰好で、あまり良い作品ではないが、女体を台の上に載せ、その廻りを何人かで取り囲んで鑑賞するなり、攻撃するというのが場面設定はよいものである。その際は、ローソク責めなどが最もふさわしいのだが、赤いローソクが、女体だけでなく、毛皮の上にも跡をつけるなどというのは、なかなか贅沢な風景である。

冬の朝、白く降り積った雪の上に、足跡をつけるような、勿体ない、そつとしたい気持ちと、それに逆らって、美しいものを汚してしまいたい気持ちとが葛藤する所がよいのだ。

実際に、プレーの度ごとに毛皮を汚してしまふことは出来ないもので、それに代わる人工毛皮の良いものが、ほどほどの値段で売り出されないものだろうか。

美しい女体をむごたしく縛り上げ、その悩ましい女体を毛皮ですっぽりと包んだり、毛皮の上で思い切り責め上げ、毛皮と共に汚してしまふ、というのが私の夢である。





# 奇ワサロン



## 棒縛りの美学

K・O (埼玉)

うかつにも奇ワの復刊を知らず、5月号より購入しました。私はSM歴十数年になりますがパートナーの不足により、腕のほうはいっこうにあがりません。どちらかというと、私は、プレイに熱中するほうではなく、ひたすら構図的に面白い写真を撮るほうに専念するきらいがあって、自分では「SM芸術派」などと思っている次第です。そんな私の目から見ると、最近のSM写真は、どうも器具による責めが中心のようで、あまり「美」を感じさせてくれないようです。ワギナやアヌスの責めが中心になると、いづれは飽きてしまうのではないかと思うのです。本当のSMはちよつとやそつとで飽きてしまうようなものではなく、やればやるほど奥の深さを感じさせるものだと思います。もっとも、私などは、

その入口でウロウロしているにすぎないので、これからもどしどし投稿してみたいと思います。今回の写真は1年ぐらいい前に撮ったもので、パートナーは二





十二才の喫茶店ウエイトレスです。モーターでの緊縛プレイのあと、取りはづしができる床柱を利用していろいろなポーズをとらせてみました。床柱は短いものでしたが、かなりの重さがあり、うら若い娘には相当な重量に感じたようです。彼女はとてもスタイルのよ



い娘で、私と知りあった当時はモデル学校へも通っておりましたが、私とのSMプレイに溺れこんでからは、ポルノ映画のSM女優になろうかしら、などと言いだす有様でした。彼女とは半年ほどのつきあいでしたが、実に明るくていい娘でした。私も本年三十二才、そろそろ独身生活ともお別れしなければ、と思っています。マゾ性のある二十八才ぐらいまでの女性の方、よかったらお便りください。

## 初めての野外プレイ

浅井（栃木）

現在交際中の十九才のOLと、ときどきSMプレイをやっています。彼女は気の弱いタチで、ちょっと乱暴にすると、すぐ泣きだしてしまうのでハードなことはやっていません。普通、両手を後ろで縛ったり、両足を縛ったりするぐらいですが、それも裸で縛られるのは嫌がるので、大抵、ブラとパンティの姿です。投稿



した写真は、離れ家式のモーターの庭で撮影したもので、彼女にとっては初めての野外プレイとなりました。見られたら困る、と半ペソをかいている彼女を、今回はちよつと強引に立木に縛りました。最初は服を着たままの縛りでしたが、彼女もだんだん慣れてきて、だれにも覗かれないことがわかったと、セーターを脱いで上半身ブラだけの姿になってくれました。野外でのプレイを終えてセックスをしたのですが、彼女が想像以上に興奮していたことがわかり、ペソをかくれて閉口したことをのぞけば、かなりの収獲だったと思っています。私がやってみたいプレイとしては、剃毛、放尿、浣腸、鞭打ちなどがありますがパイプを見ただけで半ペソになる彼女のことですから、私好みのプレイが実行できるかどうか心配です。気の弱い彼女をうまくリードしていくよい方法があったら誌上でお教えください。

## 女体の置物

W・A（都内）

4、5月号の奇クサロンを拝見し、マニアの皆さまががんばっていることを知って





私も投稿してみる気になりました。一口にS Mマニアといってもいろいろで、縛りなどはどうでもいいS Mセックス派、セックス抜きの緊縛派、アナル派などこまかくあげていったらきりがありません。特に最近では、ビニ本などの影響でアナル派—浣腸派というマニアが増えているようですが、私が見るところでは、とても主流派にはなれないのではないかと思います。私の好むプレイは、緊縛してのクスグリ責め、ワギナや乳首いじめなどのほか、「毛抜き」と称して恥毛を引き抜くアソビがあります。ピンセットで絡めてピツと抜くのです。交合の最中にこれをやると、女のワギナがキュッと締まってよいものです。ところで、読者の皆さんはS Mプレイの相手をどうやってみつけているのでしょうか？ 私のような中年で妻帯者ともなると、妻に隠れての浮気すら思うに任せず、まして、S Mプレイの相手となると、そう簡単にはみつけれません。私にしてからが、この十五年間にたった二人という有様で、しかも、そのうちの一人はいわばセミプロといってよく、写真を撮ればモデル代まで請求されました。もう一人は、私の会社へアルバイトとして働いた女子大生で、卒業後、OLになってからも1年半ほどつきあいました。最初の頃はS Mプ



レイはせず、気を許し合える仲になってから少しづつ仕込んでいったのです。緊縛プレイが主体ですが、外国のS M雑誌に鞭打ちプレイが載っていたので、そちらのほうも何度か試してみました。軽く後手縛りにした彼女をベッドの上へ四つん這いにさせ、突きださせ尻を革バンドで叩いたり、平手でピシャピシャ叩くと、赤くなった尻をブルブル揺すつ





て悲鳴をあげます。彼女とは月に1回ぐらいしかプレイできず、現在、もう一人ぐらい物色中なのですが、なかなか思うに任せません。

## 妻に作らせた

### 半透明拘束具

静岡富士夫（静岡）

「奇ク」読者の皆さま、お元気ですか。私は夫婦でSMプレイを楽しんでおる者です。私はロープによる縛りよりも、妻に作った拘束



具や衣装を着けさせてプレイするのが好きで、革製や生ゴム製のものを多く集めています。革製の拘束具は、最近ではなかなかよくできた物も多く、プレイには都合がいいのですが、ただ値段が高いのが困ります。ここにお見せするのは、市販の革製拘束具を着けたものと洋裁ができる妻に縫わせた薄い布地の半透明拘束具です。

## オムツ万才！

S・M（東京）

私は小さなスーパーを経営するオムツマニ



アの男性です。年令四十二才。世の中にはオムツが大好きな人がいるのに他人には云えず自分だけで楽しんでいる人が案外に多いものです。私もその一人です。私は姉妹の多い家に育ったせいか、当時、姉妹たちが使っ



ていたゴム張り生理帯に魅かれて、それがゴムマニアになったきっかけでした。姉たちの生理帯をはめたりして楽しんでいましたが、高校を卒業すると同時に家を離れて仕事に就き、それと共にいろいろな生理帯やオシメカバーを買い集めて、毎日オシメカバーをはめて寝ているうちにオムツの離せないオムツマニアになりました。今では、ゴム張り、ピニール張りなどのオシメカバーだけで五〇枚ぐらい持っています。オムツに興味のある女性の方、お互いに理解し合い、励まし合える友だちになりませんか。お便りください。お友

だちになれたら、記念に私のコレクションの中から貴女の好きなオシメカバーを差上げてもいいと思っています。また、夜尿症のために毎日恥ずかしい思いですごしてられる女性の記事を読んだことがあります、そんな人こそ元気を出してください。ちっとも恥ずかしいことはありません。むしろ、普通の人と同じ生活ができ、その上、オムツも楽しめる自分は他人より幸せなんだと思うぐらいの気持ちでがんばってください。お便りお待ちしております。

ゴムマニアの皆さんへ

### ◆編集部◆

ここに掲載したオムツマニアのS・M氏に限らず、生ゴムの魅力に憑かれている方は想像以上に多いものです。旧「奇ク」誌では、そういった生ゴムマニアの方たちにページを提供し、支持されていましたが、此度、生ゴムマニアとして知られている仁志木好美氏（別府）が愛好会をつくり、マニアの方たちの参加を呼びかけています。入会を希望される方は仁志木氏宛のお手紙を同封したお便りをください。回送いたします。





遙かなり

わがSM遍歴

早坂信次

「奇ク」誌復刊おめでとうございます。書店で、この懐かしい名前を見たとき、一瞬、心に激しい動揺を覚えました。

結婚歴二〇年を過ぎた私達夫婦にとりまして、旧「奇ク」誌と共に、夫婦の性生活をエンジョイしてきた私には、「奇ク」という誌名は、生涯を通じて忘れることのできない誌名なのです。

貴誌復刊3号を昨日入手し、遅ればせながら参加させて戴きたく、写真を添えて投稿させて戴きました。

私が、旧「奇ク」誌に、初めて投稿させて戴いたのは昭和四十五年、妻が二十九才のときでした。それ以来、「奇ク」誌が終刊になるまでの間、二十数度にわたって「奇クサロ」や本文に、妻のあられもない写真の掲載をお願い申し上げながら、私自身、特に嗜好するSM夫婦交換プレイを唱え続けて参りましたおかげで、これまでに数多くのご夫婦と





貴重なSM交換プレイを体験させて戴くことができました。

また、交換プレイとは別に、妻をS嗜好の男性に貸し出すといった、異常とも思える行為も行ない、これまでに十指にも余るS男性によって、妻はなぶられ、犯される体験をさせて参りましたが、被虐に歓びを知る妻は、妻なりにMの歓びを満悦していたようです。

この妻も、すでに四十二才、姥ザクラの域に達してはいますが、私も妻も、SMに対する情熱は、まだまだ衰えてはいないつもりです。私の知る限り、旧「奇ク」誌の特色は、堅実な歴史に対して揺るぎない信頼に応えて投稿される読者の皆さんの層の厚さであつたろうと思われます。

そして、お互いがお互いを呼び合うことによって、一冊の雑誌を通じて心温まる交流ができ、小さな幸せが築かれていく力となっていたのではないのでしょうか。

今後、新「奇ク」誌が、その伝統を受け継ぎ、SM誌の旗手として発展されんことを切に希望してやみません。





# 調教妻の成果

十字軍(横浜)

「奇ク」復刊、まづはおめでとうございます。貴誌が復刊されるといふ事は、「なりひら会」のK氏から知らされており、いつ復刊されるか心待ちしていた次第です。K氏とは文通にておつきあいが始まり、妻も同氏の調教を喜

んで受けております。貴誌編集長とはまだお目にかかっておりませんが、K氏のお話を伺い、全面的にご信頼申しあげております。貴誌に対してなるべく早く参加させていただきたかったのですが、今年に入って体調を崩し、良くなったと思えば仕事が山積し……、と







いった状態でした。復刊号には、妻の新しいプレイものを、と考えていたのですが、なかなかできそうもありませんので、とりあえず昨年のものですが、少しお送りしてみましたので、掲載できるものがありましたら、どうぞお使いください。

なお、神奈川方面で、私どもとご交際してくださいの方がありましたら、お便りお待ちしております。





# 妻の妊娠腹を見て下さい

Y生

「奇ク」の復刊を心からお慶び申し上げます。あります。今後も、旧「奇ク」の熱烈な愛読者の一人です。読者が造る「奇ク」私の手元には、旧「奇ク」のうち、最終となをモットーに、よりった一冊だけが完全な姿で残っていますが、投稿の頁を増やして「奇クサロン」が好きだったものですから、欲しいと思っています。その他の号は、そこだけを切り取って残しています。お送りした写真



は、妻が二番目の子供を妊娠した時のものです。当時はカメラや八ミリに凝っていたものですから、自然のうちに妻の夜の姿も被写体になっていきました。今回のものは、数多いきわどい写真の中の一部です。この種の写真は、他人に見せるものではないと信じ、現像、引伸しの過程から一人秘かに楽しんでいたのですが、今回、新「奇ク」の5月号に原見良氏の「妊婦の魅力」で興味のある妊婦腹を拝見し、私も投稿を、と思い切ってお送りした次第です。腹の中の子供への影響を考え、ロープによる緊縛を避け、短い紐で簡単に後手に縛っただけのものです。女性には不思議なもので、最初はストロボの光や、シャッターのたびに嫌々をしていますが、何枚か撮られているうちに、段々と変わっていき、しまいには両股を大胆にオープンしてくれました。二、三ヶ月に一回位のペースで剃毛をしていましたが、妊娠後は病院通いのこともあ





り、写真は剃毛を一時やめていた時のものです。下の毛は剃毛を繰り返すたびに増々濃くなってくるようですが、出産間近かであるので特に濃く写っています。自分の撮った写真が雑誌に載るといふことは、当人にとって非常に嬉しいことです。ましてそれが秘密の写真、しかも妻



の全裸の妊婦姿ともなると、考えただけでぞくぞくしてきます。小版ながら十枚ほどを同封しました。適当に選択され「奇ク」誌上に掲載していただければこのうえない喜びです。全国の何万という見ず知らずの読者から、自分の妻が視姦されていることになりましたが、この種の写真の投稿者の共通の性癖と考えます。今回を最初とし、今後は写真投稿者の仲間の一人に加えてもらえれば幸いです。

◆編集部より◆

「奇クサロン」へのご投稿は、なるべく写真を添えてくださるようお願いします



# 読者投稿画廊



スパンク・森

読者「投稿画」はSMのイメージがあふれるイラストを自由に投稿するページです。筆、ペン、鉛筆などは自由。カラーも可。サイズは本誌一ページ大まで。





坊屋一生





北原純子・画

『折<sup>せつ</sup>

檻<sup>かん</sup>』



(1) 言い寄ってきたお客を嫌って自分の部屋へ逃げ帰ってきた美津子は…。(2) 大事な常連を袖にしたと、女将に呼びつけられて、お尻をさんざんにぶたれたが、なかなか女将の言うことをきかなかった。それでは、というので……。



# 旧誌『回顧展』

昭和三十五年七月号（麦秋増大号）所載



(3) 女将は仲居に手伝わして美津子をグルグル巻きに縛りつけ革バンドで、お尻をうんというまでも殴りつづけた。



(4) 女将の言葉を半信半疑できいて離室へ来た男は、そこに満開の花のような華麗な光景を見て、驚きの声を挙げた。



# 奇ク「友の家」紹介

本誌愛読者のご好意により奇ク「友の家」が誕生しました。場所は、国電・総武線「本八幡」駅よ

り、クルマで一〇分。高塚交差点近くです。

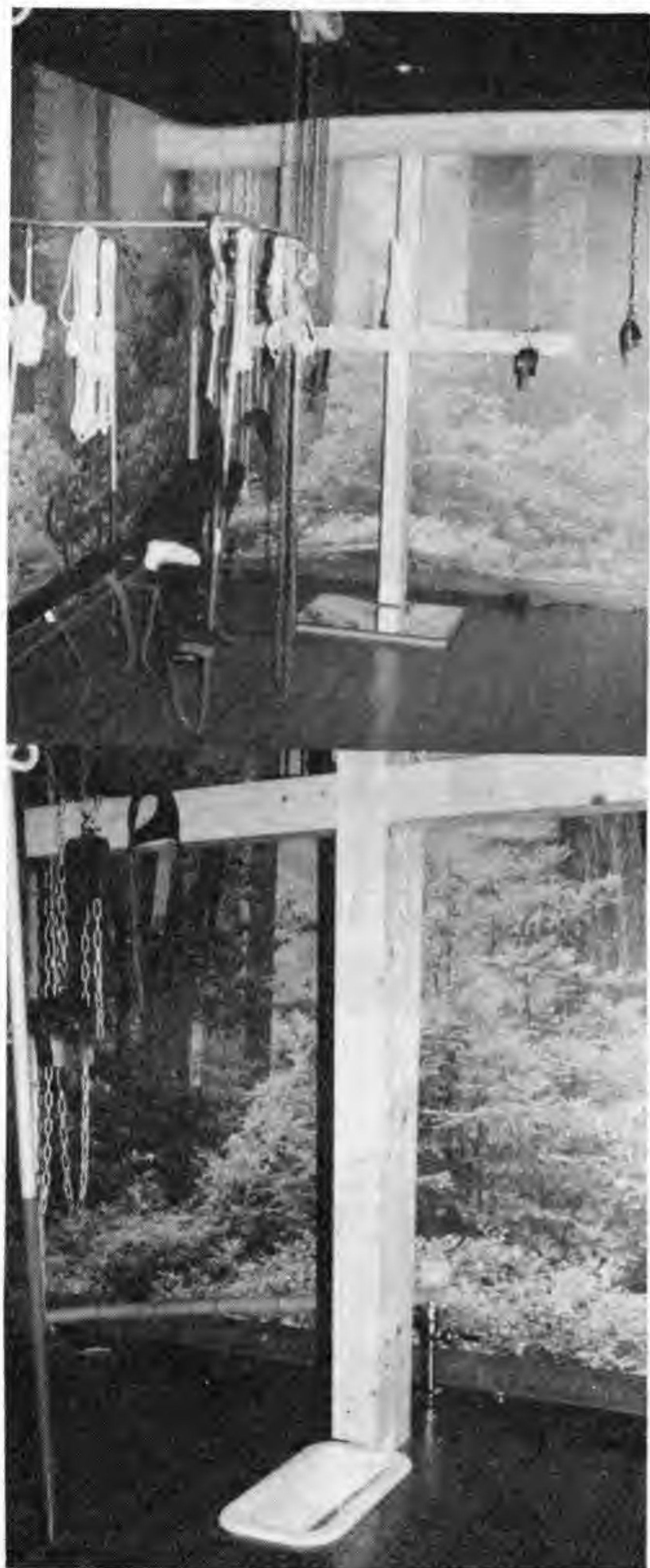
提供者のT氏が、ご自分の専用

プレイ室として作られたもので、プレイに必要なものはすべて揃っており、完全防音の一軒家なので、存分にプレイが楽しめます。

費用は、使用料として五千円、宿泊は五千円増となります。

使用希望者は、編集部までお問い合わせください。

※一般客は使用できません。





## 〈ご案内のページ〉

東京「SAMM」開店一周年記念パーティ  
六本木

大デモンストレーション開催!



「奇譚クラブ」読者  
特別ご招待!

10名様まで

\*\*\*\*\*

わが国で唯一、最大規模を誇るSMサロン「SAMM」が開店一周年を記念してSM界の著名人をお招きし、楽しい一夜を皆さまとすごしたいと存じます。この機会に本格的なSMの味をご堪能ください。

店主

特別ご招待  
(会費) 3万円  
10名様まで

※参加希望の方は下記へ  
電話で申込んでください

TEL (03)578-2366

「SAMM」(サム)

P.M. 7:00~10:00

東京都港区麻布台1-4-3

フェニックスビルB1

(地下鉄・六本木駅ヨリ10分)

※会費は当日、会場へ  
ご持参下さい。

日時・6月26日 P.M. 7:00~

場所・東京・六本木「SAMM」

〈イベント〉

1. SM回顧談義 団 鬼六先生  
美濃村晃先生
2. SMへのメッセージ 長田英吉  
佐土魔造  
賀山 茂
3. SMマニヤの実演
4. SMショー「奴隷市場」

プレイ参加



# 読者ポスト



まづは奇クの復刊を心からお祝い申し上げます。奇クを初めて知ったのは高校2年の時で、今から十九年も昔になります。それから毎月買い求めておりました。二十六才で結婚する時にそれまで集めた奇クと分譲写真を中心ならずも処分してしまいました。あの時、何処かに保管するところがあれば、と残念で仕方ありませんでした。そして8年前の2月にヨーロッパへ三ヶ月ほど出張しました。帰ってからさっそく本屋へ行きました。何度も、あちこちの本屋へ行きました。しかし、奇ク

を見つけることはできませんでした。何かの理由で廃刊になってしまったのだろうと残念でなりませんでした。それから時々、他のSM雑誌を買ってはみましたが、私を満足させるものはありませんでした。内容、特に写真が迫力に欠けているのです。奇クのような本当のM女性の写真は、モデルを使ったのとは違う迫力があり、読者をひきつけるものです。独身時代、そして結婚してから交際した女性何人かとSMプレイの経験があります。2年前まで交際していた女性とは、彼女が結婚するまで5年間つきあい、色々とSMプレイを楽しみました。私も、つきあった女性とは独身時代、結婚後を問わず、真剣に恋愛をしたつもりです。ただし、家庭をこわしたり、彼女を不幸にするようなルール違反はしておりません。ですから、私は今までは女性に恵まれていたと思います。また、あるSMの会に入って2度プレイをしたこともあります。遠かったり費用が高くついたりして続けることができませんでした。私は、誰とでも交際ができるという事が苦手です。心がかよわなければ、つきあう気になれないのです。最初に会って、この人ならと思った人しかつきあえないのです。SMでもやはりそうではないでしょうか。やはり、心が合ってお互いに安

心してプレイができるのではないのでしょうか。今度、またヨーロッパに出張し、4月の中旬に帰ってきたのですが、町をぶらついている時に偶然入った本屋で奇クを見つけ、復刊を知りました。さっそく復刊3号を買い求め、家へ帰って自宅にこもり読みふけりました。大変に興奮したものです。私のこの手紙が奇クに載り、もし私と交際してもよいと思われる方がおられましたら大変うれしく思います。ここに私のことを少し振れておきます。私は現在三十六才で神戸にある外国系の船会社に勤めております。地位もある程度のところにおります。子供も3人います。SMプレイでは、縛り、バイブレーター、腸などの羞恥責めを好みます。是非、すばらしいパートナーが見つかりますようお願いしております。最後に奇クが末永く続きますようお願いしております。(神戸の港正)

○私はS八割、M二割の中年の男性です。ゴムフェチの女性を求めています。幼い頃より自分で自分を縛る術を研究してきましたが、半年ほど前、遂に開発。私同様、こっそりSMプレイをやりたい方にお教えしたいと思います。特に私と文通だけでも交わってよいMの女性を優先。手紙を下さい。自分で自分を後手に緊縛するということは、まともにやる



うとすると容易でなくなります。仮りにそれがなし得たにしてせほどのが大変、と私もあきらめていました。が、それが全部解決し、全く理想的なことが成就したのです。万一、私のやり方では不充分だとおっしゃる方は文通を続けなくてもよろしい。一分たらずで縛ることができ、かつ、ほどのに一分ぐらいかかるのも、一〇分以上もかけてようやくほどこけるようにも、他人の手をかりなければ絶対ほどこけないようにも加減することができのです（岩手・川田 大）

○名古屋にSM同好会を作りました。楽しい集い、撮影会、SMパーティ、SMショー、プレイ、調教、縛り方研究その他の企画です。商売ではなく愛好者の集りですので会の支援費用と実費のみで済みます。SMに興味のある男女ご夫婦カップル、女装、レズ、ホモの方たち、お便り下さい。ただし真面目な方に限ります（名古屋・ABC企画）

○私四十八才自営業、一六七センチ六十五キロ、M女性とのプレイを強く希望しています。少しでもM性のある女性の方、ご連絡下さいますよう。SMプレイに好適の別荘も所有しています。ご希望の方、無料でお使いください（和歌山市・KS）

○私は二十三才、独身の高校教師です。SM

には中学生の頃から興味を持っていましたがプレイは未経験です。私自身はS性が強いですが、M性もあるようです。女性の悶え苦しむ姿に異常なほどの興奮と感動を覚えます。

M女性、S女性どなたでも平常味わえない快感を求める女性との交際を希望します。またご夫婦の方のプレイの助手もしてみたいと思います。プレイはソフトからハード、どんな形態のものでもオーケー。私自身、新しいものとしては、お灸を使用したプレイもしてみたいと思います。特に東海地方の女性、ご夫婦の方、お便りを待っています。私は身長一七〇、体重六十五です。よろしく（愛知・S・Y）

○私は三十二才、独身会社員です。S女性を求め、心の通う文通をしたいと願っております。よく女性にはS性向はないとか、女王さまらしくふるまっても、所詮はセミ・プロだといわれます。でも、私はそうは思いません。男にMがいるように、女にもSがいるはずでそれが自然界の摂理です。ただ、日本の男尊女卑の風土では、S女性が育たないことは事実です。ですから、世のM男たちは暖かくS性向の女性の台頭を育んでいかねばなりません。自分がSだと気付いていない女性を発掘し、開発しなければならぬのです。そこで

一言。SMに興味があるも、自分が被虐されることに抵抗のある女性、貴女はSです。加虐の喜びを私と共に開発してみませんか……（都内・M夫）

○5月号のイラスト競艶（カラー）はとてもよかったと思います。もっとも全部がよいというのではなく、なかにはSMの心がこもっていないようなイラストもありますが、写真よりかはいいと思います。実のところ、写真は他のSM雑誌にたくさんありますし、新味もないので奇クにはのせなくてもいいと思っています。私の希望としては、ありふれた緊縛やプレイの写真よりも、もっともっとイラストを増やしてもらいたい気持ちでいっぱいです。イラストの場合、画家の方たちも真剣にSMについて考えなくてはならないと思うので、いいものができるのではないかと考えているのです。私はどちらかというと吊り責めが好きで、両手吊り、逆さ吊り、片足吊りなどのイラストを是非お願いします。また、室内ばかりでなく、野外の木の枝などに吊したところなども描いて欲しいと思います。勝手なお願いですが、よろしく頼みます（東北の山猿）

○革製拘束具のマニアである私は、5月号に四馬孝先生のイラストを発見し、感激にひ



たって居ります。思えば、旧奇ク誌にて四馬先生の絵に陶酔したのがきっかけでSMの道に入った私でした。旧奇ク誌が突然消えて以来、もう二度と先生の絵にお目にかかれなと淋しく思っていたところ、再び拝見することができて感激もひとしおです。なんといつても革製拘束具のイラストでは四馬先生が第一人者です。私のような革フェチの者には、先生が同じく革に興味を持っておられるのがよく判るのです。今後もフェチの者たちに素晴らしいイラストをどしどし描いてくださることを心から願っております（京都・革男）

○6月号、腰巻党氏の「腰巻風俗」に感激、あの、赤い腰巻の良さが判る人はもういなくなつたか、と慨嘆していたところなので、我が意を得たり、とばかりに感激しているところ。女のふっくらした白い肌にまといつく赤い布、そして、それを剥いで豊満な尻をむきだしてやる喜びは、何にも勝る感激なのです。といつても、今では、あのショトリした味わいのあるネルの腰巻きはなかなか手に入りません。私なども赤いネルの腰巻を求めて浅草辺りまで探しに行くのですが、そんなものは現在作ってませんね。という返事がかえってくるだけでがっかりさせられます。仕方なく、妻に作らせるのですが、ネルそのもの

のがもう無いそうで、昔に作らせたものを着けさせて楽しんでる有様です。私の妻はもう四十六才、ウバ桜もいいところですが、ムチムチと太った体は生来の色白で、赤い腰巻一枚の姿にすると、見違えるほどイロツぽい女に変身します。去年の暮れのことですが、知人が遊びに来たときに、ふとしたイタズラ心から、妻の湯上り姿（その時、妻は赤い腰巻を着けただけの姿で化粧台に向っていました）を覗かせてやったことがあります。この知人は、若い頃からの親友で、女遊びも一緒にやつたくらいなので、なんでも許せるのです。妻は私たちが覗いているとも知らず、裸の上全身をくねらせながら、しきりに化粧をしていました。知人は赤いネルの腰巻に包まれた妻の大きなヒップにいたく興奮した様子で酒の酔いがいっぺんに回ったということでした。実をいうと、私もその知人の奥さん（妻より三つ若く四十三才）の全裸に近い姿を覗かせてもらったことがあるのですが、知人の趣味カラフルで、ひどく小さいパンティをはかせることなのです。お互いの妻の全裸姿を覗きあうなどというのは、私たち中年男の他愛のない遊びなのですが、結構、刺激にはなります。つまらぬ話を書いてしまいましたが、腰巻などという他のSM誌

では決して取りあげてくれない趣味を載せてくれた奇ク誌に感謝すると共に、今後も腰巻についての投稿を掲載してくださるようお願いする次第です（東京・腰巻ファン）

○6月号の巻頭カラーイラストは素晴らしいの一語につきます。モデルを使った緊縛写真に飽き飽きしていたところなので、絵画の素晴らしい余計にひきたつようです。特に桐丘先生の絵は繊細で、SMの世界をイメージで楽しむ小生の如き小心者には夢のような世界であります。これからも素晴らしいSM画を期待しております（静岡・夢男）

○復刊1号より購読しております。私は旧奇ク誌も読んでいたので、最初はどうも様子が違うような気がして少し失望したのですが、号を追って「奇クサロン」なども充実してきて旧奇ク誌に近づいている気配が感じられます。奇クの場合、コケおどかしのような写真や、プロ作家による小説などは不要だと思っているのですが如何でしょう。共感を覚えた文章としては、6月号の「SM半世紀」（町陽一氏）などは興味深く拝読致しました。それに、旧奇ク誌にも投稿されていた室井亜砂路氏のイラストと文章もよかったです。時流に乗ったが為に堕落していった多くのSMプロ（？）の人たちよりも、室井氏のように



な人がホンモノのSM界を支えているのではないかと痛感します。旧奇ク誌がSM隆盛期を目前にしながら遂に時流に乗ることなく休刊してしまったように、新奇ク誌に対しても決して浅薄なSM誌に墮することなく、SMを糧に人生を語るようなものになって欲しいと願う者であります。今後の発展を祈り、合わせて、決して時流に乗る気のないホンモノのSMマニアの出現を期待しております（山梨・サトウ）

○6月号の巽良行氏のカラーイラストは大シヨックでした。旧奇クから出発された春川オミ氏以来、これぞと思うM画を拝見することがなかったのですが、巽氏の「M治療」はS女性の圧倒的なボリュームといい、男を尻の下に敷いた表情といい、M族の僕などとはもう何もいうこともないイラストです。他のSM誌では見かけないので、今後も氏のカラーイラストを続けてください。お願いします（都内・TT）

○5月号より連載の上野悦子さんの「犬と私と夫」のファンです。体験手記のようですがこれほど面白い手記はないと思います。猥姦という、ともすれば非人間的な事柄になるのに、なんともユーモアがあつて、チンやコリ―犬などと一体になって生活する様子がとて

も愉快なのです。これはやはり実際に犬とのセックスを体験しなければ書けない文章なのではないか、などと想像してしまっています。私の家の近所にもチンを飼っている三〇過ぎの奥さんがいるのですが、その可愛いがりようときたら大変なものなのです。もしかしたら悦子さんのようにワギナを舐めさせたり、つるんだりしているのではないか、などといった想像したくなるほどです。そんな愉快な想像をかきたててくれる「犬と私と夫」に拍手を送りたいと思います。この上は、ご主人の命令どおり、一日も早く悦子さんが育つがつてみせることを願ひしてやみません。もし、実現できたら、その様子なども誌上で発表してください。首を長くして待っています（神奈川・アニマル）

○僕は二十六才の独身で、SMプレイにはすごく関心があります。僕はSのほうで、M女性を縛ったり、浣腸したりして恥ずかしがらせたいと考えています。今のところ、恋人どころかガールフレンドもないのでプレイができずにいますが、できたら千葉方面で僕のプレイ相手になってくれる女性の方、お手紙をください。年令は二〇才ぐらいから三十五才ぐらいまでの女性で、女子大生、OL、人妻の方でもいいです。傷をつけたり、あとで

困るようなことは絶対にしませんから安心してください。それではお手紙をお待ちします（千葉・真実一郎）

○三十六才、一流企業の中堅社員です。週に1回ぐらい、私のペットになり、M調教を受けてみたいと思っている女性、ご連絡ください。貴女が縛られたまま強制的に放尿させられているシーンをポラロイドで写してあげます。年令は四〇才ぐらいまでの方で、絶対に秘密の守れる方に限ります。初回のみ回送にてご連絡します。手紙に勤務先の電話番号を書いておきますのでいつでも連絡してください。ではよろしく（川崎・三田）

#### \*編集部より\*

「倒錯愛のメッセージ」欄を廃止し、読者間の文通、交際はすべて「読者ポスト」欄を通じて行なうことになりました。回送のお手紙の出したい方は左記の規則を守ってください。

※回送する手紙の封筒のオモテに掲載月号と相手の名前をエンピツで記入する。  
※回送する手紙には必ず切手を貼る（送料に注意）

「読者ポスト」への投稿をお待ちしています。



## 編集室ノート

復刊「奇ク」誌に対するご意見、ご感想のお手紙を多くの方々からいただいた。特に、旧「奇ク」誌を知る方々からのご意見は手厳しい内容が多く、心のひきしまる思いがする。時代は移り変わり、SM誌隆盛の昨今だが、その原点としての本誌再出発は、どうやらマスコミの格好の獲物になったらしい。その取

材攻勢のすさまじさにはへきえきさせられるが、当編集部としてはいっさい応じないことにしている。従って、事実と反する伝聞を記事にされることも多々あると思われるが、すべて「黙して語らず」である。本誌は、時流に乗る気もないし、マスコミに宣伝する気もない。あくまでも「読者」のためにのみ存在する。

※直接購読のお申込みは「きたん社」へお願いします。



スパンク・森

## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

東京都中央区銀座1の22の10

銀座ストークビル・5F

風俗資料保存会